

2014年度 聖路加国際大学大学院 博士論文

論文題目

首都圏在住の定年退職した男性が地域とのつながりを構築していく理論の生成
Toward a Theory of Relationship Building among Retired Japanese Men and
Non-Family Members in a Community of the Tokyo Metropolitan Area

学生番号 11-DN-011

氏名 吉 野 純 子

目次

第1章 序論.....	1
I. 研究の背景.....	1
II. 研究目的	3
III. 研究の意義.....	4
IV. 用語の定義.....	5
第2章 文献検討.....	7
I. 日本の高齢化の現状とその課題.....	7
1. 日本の高齢化の現状	7
2. 高齢期における健康課題と研究的取組み	8
3. 高齢者の孤立化	9
II. 地域とのつながりに関する研究.....	10
1. 地域とのつながりの現状.....	10
2. 社会活動に関する研究	12
III. 定年退職男性に関わる研究	13
1. 退職に関わる研究.....	13
1) 日本における研究	14
2) 海外における研究	16
2. 定年退職男性を対象とした研究.....	17
IV. 本研究への意義	19
第3章 予備研究.....	21
I. 研究方法	21
1. データ収集.....	21
1) 対象.....	21
2) データ収集期間.....	21
3) 方法.....	21
2. データ分析.....	22
3. 倫理的配慮.....	22
4. 研究協力者の基本属性	23
II. 結果.....	23
1. 地域活動に対する態度	24

2. 地域活動に対する態度に影響する関連要因.....	27
3. 定年退職期にある男性の地域活動に対する態度とその関連要因.....	34
III. 考察.....	36
1. 退職後の生活リズムの変化がもたらす地域への意識.....	36
2. 男性と地域をつなぐ外的アプローチの必要性.....	37
3. 地域活動を通して変化する地域への意義：「居る」から「在る」へ.....	38
4. 人的つながりにおける地域特性.....	40
IV. 本研究への示唆.....	41
第4章 研究方法.....	44
I. 本研究の理論的前提.....	44
1. シンボリック相互作用論の特性.....	44
2. シンボリック相互作用論の方法.....	45
3. 本研究でシンボリック相互作用論を理論的前提とすることの適切性.....	46
II. 研究方法の選定.....	46
1. グラウンデッド・セオリー・アプローチの背景.....	46
2. グラウンデッド・セオリー・アプローチの特性.....	47
3. グラウンデッド・セオリー・アプローチの4タイプ.....	48
4. グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いることの適切性.....	49
III. 研究方法.....	50
1. 研究デザイン.....	50
2. 研究協力者.....	50
3. 研究協力者のリクルート方法.....	51
4. 研究協力の辞退とその方法.....	52
5. データ収集期間.....	52
6. データ収集方法.....	52
7. データ分析方法.....	53
8. データ分析過程における信頼性と妥当性.....	55
IV. 倫理的配慮.....	57
第5章 結果.....	58
I. 研究協力者の概要.....	58
II. 定年退職した男性が地域とのつながりを構築していく過程を構成するカテゴリー.....	59

1. 《自己の存在価値を模索する》	61
2. 《個人として在る》	72
3. 《地域と共に在る》	78
4. 『地域の中で共有できる視点をもつ』	87
Ⅲ. 定年退職した男性が地域とのつながりを構築していく過程の理論化.....	87
1. 定年退職した男性が地域とのつながりを構築していく過程	87
2. 定年退職した男性が地域とのつながりを構築していく過程の理論化.....	94
第6章 考察	96
Ⅰ. 首都圏に住む定年退職した男性と地域との関わり	96
1. 首都圏における地域の著しい変化	96
2. 首都圏における住宅形態による影響.....	97
3. 地域に残る古い組織体制による影響.....	98
Ⅱ. 定年退職した男性が自己の存在価値を模索することとは.....	99
Ⅲ. 定年退職した男性が個人として在ることの意味	100
Ⅳ. 定年退職した男性にとって地域とつながることの意味	103
Ⅴ. 看護への示唆	105
Ⅵ. 本研究の限界と今後の課題	108
第7章 結論	111
引用文献	113

図表目次

図 1 定年退職した男性と地域との関係	19
図 2 定年退職期にある男性の地域活動に対する態度とその関連要因	34
図 3 主要カテゴリー同士の構造	61
図 4 主要カテゴリー《自己の存在価値を模索する》の構造	61
図 5 主要カテゴリー《個人として在る》の構造	73
図 6 主要カテゴリー《地域と共に在る》の構造	78
図 7 首都圏在住の定年退職した男性が地域とのつながりを構築していく過程の理論化	89
表 1 研究協力者のデモグラフィック特性	23
表 2 地域活動に対する態度	27
表 3 地域活動に対する態度に影響する関連要因	28
表 4 研究協力者のデモグラフィック特性	58
表 5 定年退職した男性が地域とのつながりを構築していく過程を構成するカテゴリー	60
表 6 定年退職した男性が地域とのつながりを構築していく過程 《自己の存在価値を模索する》を構成するカテゴリー	62
表 7 定年退職した男性が地域とのつながりを構築していく過程《個人として在る》を 構成するカテゴリー	73
表 8 定年退職した男性が地域とのつながりを構築していく過程《地域と共に在る》を 構成するカテゴリー	79

資料目次

資料 1	研究への協力のお願い（研究協力依頼者用）	i
資料 2	研究への協力のお願い（インタビュー協力者用）	ii
資料 3	研究への協力の同意書.....	iii
資料 4	研究協力の断わり書（インタビュー協力者用）	iv
資料 5	インタビューガイド	v
資料 6	個人および所属組織フェイスシート.....	vi

第1章 序論

I. 研究の背景

高齢化と平均寿命の延伸に伴い、わが国では、ヘルスプロモーションの観点から、高齢期をいかに充実させ自立して健康に過ごすかということが大きな課題となっている。2012年以降、戦後の日本の高度成長を支え変化の象徴でもあった「団塊の世代」が65歳に達し始め、2014年までに毎年約100万人ずつ65歳以上の人口が増加し、65～74歳人口は2016年の1,761万人でピークを迎えると推定されている（内閣府,2014）。就労者も、退職を機に職場の第一線を離れて、各々の地域での自分らしい生き方が可能な時間を得ることになる。厚生労働省の「就労条件総合調査」によると、2011年では企業の82.2%が、60歳を定年退職年齢としているが、2006年に施行された「改正高年齢者雇用安定法」の効果もあって、勤務延長制度や再雇用制度を設ける企業も増えているとの報告がある（斎藤,2012）。しかし、企業のほとんどが最高雇用年齢を65歳までとしていることから、65歳で退職する人が多いことが推察される。この定年退職を迎える時期は、中年期から高齢期への移行期であるが、今の65歳前後の人々は、同じ年齢でも昔に比べて健康状態が良好であると推測され（国民衛生の動向,2014）、寿命の延伸とともに、退職後の生活期間が長くなる傾向にあるといえる。平均寿命は今後さらに延伸することが見込まれており、元気な退職者が長い退職後の日々をいかに自立して健康に過ごしていくか、また地域での生活と疎遠であった彼らを地域がどのように受け止めていくかということは、地方自治体にとっても大きな課題となっている（藤原,2007）。

定年退職は、人生後期における大きな転換をもたらすライフイベントでもある。特に労働を重要な役割としている男性にとっては、これまでの企業・職域指向型の生活から、家族・地域指向型の生活へとその生活構造を大きく変容させることになるため、ライフスタイルや個人を取り巻く人間関係、生活環境が大きく変化するといわれる（Barbara,2003;堀江,2007; 西田,2007; Barbara et al., 2011）。定年退職に伴う健康や Quality of Life（以下、QOL）に関しては、退職前の就労者を対象とした、生活習慣調査（森田, 2005）、ストレス対処能力と精神的健康度との関連（宇佐見ら, 2010）、定年後の健康づくりに対する意識（船山ら,2008）、退職後の不安感と対応行動（佐藤ら,1999）などの研究がある。さらに、退職後に関しては、QOLを表すひとつの指標である“生きがい”に着目した、熊野（2007）や若林ら（1989）の研究、“主観的幸福感”と社会参加との関連をみた西田ら（2006）の研究、そ

して地域活動や人間関係量など地域での人とのつながりから QOL を捉えようとした、青山ら(2010)や安田(2007)の研究がみられる。また、人々と地域との関係を、“意識”の視点から捉えようとした試みは、ほとんどが定年退職者ではなく一般住民を対象とした研究である。地域意識を構成する基本的次元の 5 因子を抽出した飽戸(1976)の研究や、2 因子構造の 45 項目から成る「地域社会への態度尺度」の開発を試みた田中ら (1978) の研究、居住地域への意識と地域活動との関連を明らかにしようとした越田ら (2012) の研究などがみられる。

これらの定年退職と健康や QOL に関わる先行研究は、定年退職者全体を対象とし、退職を高齢期への移行期として捉え、高齢期に向けた社会心理的な適応という視点で行われたものが多い。そして多くの研究が、生活の満足度や QOL の維持・向上には、地域社会とのつながりが有効かつ重要であるとの結果を導き出している。定年退職に関わる研究の多くは定年退職者全体を対象としており、男性に焦点をしばった研究は少ない。男女の比較を行った希少な調査である「サラリーマンの生活と生きがいに関する調査」(年金シニアプラン総合研究機構,2012)によると、男性は女性に比べて“仲間・友人”が「欠けて」おり、“近隣との交流”も「不満足」が高く、団塊世代の男性が退職後に感じる不安には、「人的交流」と「情報量の減少」がきわめて高いという結果が報告されている。また男性は、定年退職を控えて「会社以外の活動の場を作っておく」など、会社中心の生活を切り替えるために、会社や仕事関係以外の人的ネットワーク作りに取り組む必要性を感じていることが示されている。この結果からも、男性は女性よりも、定年退職という生活構造の転換期において、地域とのつながりや地域生活への適応に課題を抱えているといえるだろう。

現在、我が国において地域のつながりが薄れている背景のひとつに、都市化の進展が挙げられている。特に、人口と業務機能が集積する大都市部、中でも首都圏では、通勤・通学距離の伸長に伴って職住分離の都市構造が顕著であり、その結果、平日の男性就労者の多くは、ただ寝に帰るために家に帰るような、地域の実情に疎くつながりも薄い地域コミュニティへと変容していつている(土堤内,2010; 松原,1983)。職場での時間や人間関係が中心であった男性にとって、地域について考えることやつながりは希薄であることは想像に難くなく、定年退職後彼らは、まず地域を基盤とした生活スタイルになじむことが求められると考える。しかし、定年退職期および定年退職後の男性を対象とした、定年退職後の生活や活動の変化の過程を、地域とのつながりの中から探索した研究は少ない。地域とのつながりを‘社会活動’の側面から捉えて、生活満足度や主観的幸福感との関連を探究した研究は多く見られるが、職場関係が中心だった男性に焦点をあて、定年退職を機に生活基盤となる地域

とのつながりをどのようにして築いていくのか、そのプロセスや関連する概念を質的に探究した研究は希少である。地域活動への参加を通して定年退職後の男性が地域生活へ移行していく過程について探求した竹之内ら（2013）の研究が唯一みられるが、地域活動を積極的に実施している一組織の活動者を対象とした限定した取組みであった。定年退職後の男性が地域とのつながりを構築していくプロセスを明らかにすることによって、定年退職した男性が地域に何を求めているのかも明確になる。このことは、定年退職後の男性にとって魅力的な保健事業プログラムの開発へ具体的な示唆を与え、地域に入り込みにくい高齢期男性を地域に入り易くする一助として活用でき、高齢期男性の社会的孤立を予防するための糸口を与えると考える。そして、定年退職後の男性が地域との接点を持ち易くなることで、彼らが長い退職後の生活を地域の中で自立して心身共に豊かに過ごしていき、高齢期の QOL を高めるために資するところがあると考ええる。

II. 研究目的

本研究は、定年退職した男性が定年退職後に、地域活動との関わりを通して地域の中で家族以外の新しいつながりをどのように築いていくのか、その構造とプロセスを説明し、見出されたカテゴリーを統合して体系的に関連づけることで、定年退職した男性が地域とのつながりを構築していく理論を生成することである。

生成した理論は、保健師に対して、定年退職後の男性を対象とした地域保健プログラムの開発を行ううえで、彼らが地域や参加プログラムに求める要素を具体的に示すことができる。そして、定年退職後の男性にとっては、理論を活用して開発された定年退職後男性にとっての魅力的な地域保健プログラムの存在は、地域に入り込みにくい高齢期男性を地域に入り易くするひとつの窓口となり、彼らが地域の中に新しい居場所や生きがいを見出していく機会を増やすことで、高齢期の QOL を高める一助となることが期待できる。

そこで、本研究の研究目標を以下に設定する。

1. 定年退職した男性が定年退職後にどのような体験や心情の変化を経て、職域指向型の生活から現在の地域指向型の生活へと移行していったのかについて記述する。
2. 定年退職した男性がどのような契機で地域活動へと踏み出し、何が活動を継続する原動力となっているのかについて記述する。
3. 定年退職した男性にとって地域活動のもつ意味とはどのようなものなのかについて記述する。

4. 定年退職した男性にとって、地域とつながるとはどういう状態なのか、どのような意味があるのかについて記述し、前述の 1. 2. 3. で見出されたカテゴリーと統合して体系的に関連づけて解釈をすることで、定年退職した男性が地域とのつながりを構築していく現象に関する理論化を行う。

本研究で構築する理論は、定年退職後の男性が地域活動を通してどのように家族以外とのつながりを地域の中に築いていくのかという、特定の状況にある当事者の認識文脈についての具体理論（substantive theory）である。定年退職した男性が、定年退職後から今の生活に至るまでにどのような体験や心情に変遷をたどってきたのかという、定年退職した男性の「地域とのつながり」を獲得するまでの経験に根ざした理論である。そのため、「定年退職した男性が、定年退職後に地域の中で家族以外の新しいつながりを地域活動との関わりを通してどのように築いていくのか」という現象に限局された状況について、経験者の語りから帰納的に語りの言葉を生かしながら概念を生成していき、その概念自体がその現象を説明することになる。

Ⅲ. 研究の意義

これまでの退職をめぐる研究は、退職による「ライフスタイル」の変化に伴う社会心理的な側面や、高齢期の QOL の視点から‘生きがい’や‘生活満足度’、‘主観的幸福感’に焦点をあてた調査や量的研究が多く、退職者本人の視点から退職による変化を捉えて退職の意味を探ろうとする質的な取組みは少ない現状がある。高齢者と社会活動に関しても、社会活動の指標や測定尺度の開発や、社会活動が主観的幸福感や生活満足度に影響を与え高齢期の QOL 向上に寄与するなどの関連性を検証した研究は多くみられるが、高齢者にとっての社会活動の意味や意義を本人の体験や視点から質的に探究した研究は数少なかった。今後も延伸していくであろう寿命と高齢社会の中で、長くなる高齢期をいかに健康に充実して暮らしていくかという課題への具体的な対策の検討において、高齢者本人の主観的な経験や思いからより現実根ざした生きた概念や理論を構築していくことは、実際の生活に即した具体的で実現可能な対策やアプローチを提唱していくうえで重要な理論的根拠となると考える。

また、高齢化の進む我が国においては、高齢者の健康増進の観点からも、高齢者の QOL を高めるための施策の策定や、高齢者の社会的孤立、特に男性の孤立を予防するための保健

医療専門職による支援のあり方は、各地方自治体によって試行錯誤されながら検討され展開されている（竹原,2007; 山本,2007）。しかし、退職後の男性向けの保健事業の活性化に関しては苦戦を強いられている現状があり（藤原,2007）、西田（2007）は、男性向けの保健事業の活性化には、対象男性の社会心理的側面を十分理解したうえでのアプローチが重要であると述べている。本研究は、定年退職後の男性が求める地域とのつながりのあり方を彼らの視点から探究するものであり、研究結果より定年退職後の男性の地域に対する社会心理的側面の具体的な内容を提示できることで、地域における保健医療専門職が定年退職した男性向けの保健事業プログラムを開発していくうえでより具体的で男性にとって魅力的な支援プログラム内容の検討やアプローチの展開を可能にする一助となる。

IV. 用語の定義

本研究で用いる用語として、「定年退職」、「定年退職期」、「地域」、「地域活動」、「地域とのつながり」、「居場所」、「生活の安定」、「健康」、「首都圏」、「地方都市」を以下のように定義する。

1) 定年退職：

ある一定年齢に達したという理由で自発的もしくは強制的に職を辞し、職業活動から退くこと。

2) 定年退職期：

Atchley, R. C.の退職の過程(1)(退職)直前段階、(2)(退職後)ハネムーン段階、(3)幻滅段階、(4)再志向段階、(5)安定段階、(6)終結段階の6段階に基づき、次のように定義する。
定年退職後、再就職などを行いながら、仕事に代わる新しい生活の仕組みや関わり合いを探り、自分なりの生活の処し方を見出していくまでの期間。

3) 地域：

職場以外の、定年退職後に日常生活を営むうえで基盤となる場所を中心とした自身にとって馴染みのある範囲の土地空間。

4) 地域活動：

地域の中で自分のための時間を使った、家族以外の人との対人的な相互作用を伴って継続的に行われる集団的・組織的な活動。また、他者との交流を伴う学習的活動や個人的活動といった自己完結する活動も含める。

5) 地域とのつながり：

「地域とのつながり」における「地域」とは、上記 3) で定義した「地域」にいるひとびとのことを示し、「地域とのつながり」とは地域のひとびととの結びつきのことである。単に地域のひとびとや組織と関係性があるだけでなく、地域のひとびととの相互作用の中で、他者から認められたり、自身の安らぎや満足感が感じられたりする社会の中において自分を確認できる意味を伴うもの。

6) 居場所：

他者から認められ、自分にとって安らぎを覚え満足のできる空間として、社会の中における自分を確認でき、なおくつろげる場所。

7) 生活の安定：

変化に対して、おのこの価値選択基準をもって自分なりの生活の仕方を処していくことができる状態。

8) 健康：

身体面に多少の不安があっても、その人が居住する地域において、日々の生活に充実感をもち無理なく自分なりの暮らしや活動が維持できている状態。

9) 首都圏：

都市類型や都市規模別の名称および範囲については、国土交通省による「三大都市圏」、「地方圏」、内閣府が用いている「大都市部」、「地方部」、国立社会保障・人口問題研究所による「大都市部」、「その他の地域」、首都圏整備法における「首都圏」という語などが見られるが、いずれも共通した明確な定義ではなく、各々の活用の便宜上の定義である。こうした数々の用語やその範囲を吟味した結果、本研究では、研究協力者の選定にあたって用いる「首都圏」を次のように定義する。

大都市部（東京都（島嶼部除く）、神奈川県、埼玉県、千葉県、愛知県、大阪府）に含まれる、東京都（島嶼部除く）、神奈川県、埼玉県、千葉県の一都三県の範囲。

10) 地方都市：

大都市部以外の「地方部」に含まれる、9) 首都圏以外の都市。

第2章 文献検討

本章では、日本の男性が定年退職後に地域の中で家族以外のつながりを構築していくプロセスの構造に関する本研究への示唆を得るために、わが国の高齢社会の現状と課題、中でも高齢者と地域社会とのつながりにおける課題と高齢者にとっての社会活動について、また男性退職者に関する文献について検討を行う。

I. 日本の高齢化の現状とその課題

1. 日本の高齢化の現状

世界の先進諸国において高齢化は共通の傾向であり、社会課題となっている（内閣府,2014）。その中でも、我が国の高齢化は例をみない速度で進行しており、1970年には65歳以上の高齢者人口が総人口の7%を超える高齢化社会に、1994年には14%を超えて高齢社会となり、2013年現在では25.1%となり超高齢社会となっている（内閣府,2014）。高齢者人口は、今後「団塊の世代」が65歳以上となる2015年には3,395万人、75歳以上となる2025年には3,657万人に達し、高齢化も上昇を続け、2035年には33.4%と3人に1人が65歳以上の高齢者という社会が予測されている。

65歳以上の高齢者のいる世帯を構造別の構成割合でみると、2012年時点では、夫婦のみの世帯が最も多く約3割を占め、単独世帯と合わせると半数を超える状況である。特に65歳以上の一人暮らしの高齢者の増加は男女ともに顕著であり、高齢者人口の占める割合としては男性11.1%、女性20.3%となっている（内閣府,2014）。

一方、平均寿命でみると、2012年時点では、男性79.94歳、女性86.41歳であり、65歳時の平均余命においては、1955年には男性が11.82年、女性が14.13年であったものが、2012年には男性18.89年、女性23.82年と、男性、女性共に高齢期が延長されており（内閣府,2014）、今後も高齢期は長くなっていくことが予測される。こうした高齢化や平均寿命の延伸により、寿命をただの命の期間としてだけではなく、質の面からも捉えようとする「健康寿命」という概念が、WHOから2000年に公表されている。健康寿命とは、‘健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間’と定義されており、我が国においては、2011年で男性70.42歳、女性73.62歳となっている（厚生労働省,2011. 内閣府,2014）。平均寿命の延伸と合わせて、生命の質の面から着目されており、国民の健康づくりの推進にあたって、平均寿命の延び以上に健康寿命を延ばすことが重要となってきている。

このように、平均寿命の延伸や世帯構造の変化は、長くなっていく高齢期をいかに健康に充実して暮らしていくかに大きく影響し、国としても高齢社会対策として、高齢者の健康不安や経済的不安、社会からの孤立などの課題への取り組みが進められている。

2. 高齢期における健康課題と研究的取組み

こうした急速に進む高齢社会への流れの中で、人々が享受できる長い人生に求めるものの質にも変化が生じてきている。生活への満足度について内閣府の調査（2007）では、2005年時点において「満足している」、「まあ満足している」と回答した人の割合が合わせて35.8%と年々低くなっている傾向がある。その一方、「どちらかといえば不満である」、「不満である」の合計した割合は、1978年には15.6%だったものが2005年には28.3%にまで高くなっているとの結果がある。こうして総じて人々の生活への満足度が低下していく中で、何に生活の豊かさを求めているかという内容では、1978年は「物の豊かさ」40.0%、「心の豊かさ」37.3%であったものが、2005年には「物の豊かさ」30.4%、「心の豊かさ」62.9%と、心の豊かさがより重視される傾向が強まっていることが明らかである。心の豊かさは、人々の精神的な充実感や安心感に大きく影響しており、高齢期の研究においても、生きがいや主観的幸福感、サクセスフルエイジングなどの概念の視点から数多く報告されている。

高齢者の生きがいに関連する要因を探究した松田ら（1998）の研究においては、健康、家族、趣味・生涯学習、友人・地域のつながり、経済的余裕、社会参加の6つがこの順で、高齢者の生きがいとして重要であると報告している。高齢者の主観的幸福感に関する研究では、社会活動との関連性から検討した研究（竹内他,2011; 岡本,2009; 浜崎他,2007）や、「農村・山間」「一般住宅」「団地」の3区分の地域特性から主観的幸福感を捉えようとした小関ら（2006）や農漁村の地域特性を考慮した竹内ら（2011）の研究など数多く報告がある。さらに、社会活動（井戸,1997; 岡本,2009; 小関,2006）、家族との会話（岡本,2000; 竹内,2011）、社会的役割（中村,2002; 小関,2006）、趣味（松田,1998）、ソーシャルサポート（出村,2001; 湊田,2003）が高齢者の健康や幸福感に影響があることが明らかにされている。主観的幸福感を評価する尺度には、主に改訂 PGC モラールスケール（古谷野,1996）や生活満足度尺度K（古谷野他,1989）が用いられており、PGC モラールスケールは、「満足感をもっている」、「安定した居場所がある」、「老いていく自分を受容している」の3次元から構成されている。どちらも幸福な老い（successful aging）に関する研究の過程で開発されてきており、個人の主観的評価の結果としてのQOLを測定する尺度として広く活用されている。

る。浜崎ら（2007）や竹内ら（2011）は、高齢者の主観的幸福感を社会活動との関連から検討しており、浜崎ら（2007）の研究では、後期高齢者が生活圏内において継続可能な社会的役割を持つことが主観的幸福感を高めるうえで大切であると述べられている。また竹内ら（2011）の研究からは、家族構成と主観的健康感、個人活動が主観的幸福感と有意に関連していること、個人活動の中でも「近所づきあい」や「近くの友人・親戚を訪問」などの近隣他者との交流や、社会参加による他者との交流が生活に活力を与えて幸福感を高めていることが示唆されている。このことは、前期高齢女性の家族以外の身近な他者との交流関係と健康認識の関連を探究した大森（2005）の研究結果で示された、日常生活の範囲内の身近な地域における近隣他者との社会的な交流そのものが、高齢者の主体的な健康増進、ひいては QOL の向上において有用であることとも一致している。

このように、高齢社会となり高齢期の延伸が進む現在、人々はものによる豊かさではなく、人とのつながりによって精神的な充実感や安心感を得ようとしている現状がさまざまな研究によっても明らかにされている。

3. 高齢者の孤立化

しかし、現在の日本社会では、都市化や工業化の進展や地縁、血縁、社縁などの相互扶助システムの崩壊、世帯構造の変化などにより、地域社会における人と人とのつながりが薄れることによって、高齢者の社会的孤立という問題が浮上してきている（内閣府,2012; 小辻,2011）。実際に、人口の高齢化が進行し、夫婦のみの高齢者世帯や単独世帯の高齢者が増加してきている近年、政令指定都市などの大都市近郊の団地などでは多くの孤立（孤独）死の報道も耳にするようになってきている。

社会的孤立（social isolation）という用語は、1957 年の英国の Townsend による高齢者の家族生活についての調査から導かれ、日本においては、1974 年に山本らに訳されて紹介された概念である。日本では、社会的孤立という用語は「家族、友人、近隣の人々などとの交流や接触がない、もしくは乏しい」という意味で用いられている（小辻,2011）。その他には、「人と人との間に必要なコミュニケーションが不十分なために、感情や経験を交流することが少ない」と、Townsend の定義に感情や経験の交流という部分を付加した浅野（1992）の研究がある。

こうした高齢者の社会的孤立の問題は、日本に限らず、高齢化の進む世界の先進国でも同様であり、空閑（2006）はオランダにおける高齢者の孤立防止活動への参加を通して、高齢

者の社会的孤立の問題とソーシャルワークについて研究を行っている。オランダにおける孤立防止活動では、ソーシャルワーカーやボランティアによる個別訪問以外にも、地域住民が集まって話し合う場や機会を作るなどの、住民同士の社会的なつながりやネットワークの形成に尽力しており、すなわち高齢者の「自立支援」のために多様なかたちでの‘社会的接触’の機会を保障する活動として具体化されている、と空閑（2006）は報告している。内閣府による 5 カ国の 60 歳以上を対象とした意識調査（国際比較調査）によると、日本は、他の 4 カ国と比して単身世帯の割合が低く、同居の家族のいる世帯割合が高く、また困った時に頼るのは、同居の家族以外では近隣の友人よりも別居の家族・親族が高いという傾向がある（内閣府,2009）。日本の高齢者は、家族や親族という血縁関係を中心に人間関係を構築している傾向があり、近所の人や友人との関係がやや希薄であるためにいざという時に支え合える関係にはないかもしれない。廣瀬（2011）も、現代社会の一般的問題として社会的孤立を挙げたうえで、日本は諸外国と比しても人々の社会的孤立の傾向が強い、と述べている。誰とも会話をしない、近所づきあいをしない、困った時に頼る人がいないといった社会から孤立した状況が続くことは、生きがいの喪失や生活への不安の増大といった QOL の低下に大きく影響する。特に一人暮らしの男性では「生きがいを感じていない」人の割合が 34.9%（内閣府,2011）と平均の約 3 倍高く、社会的孤立に陥りやすいハイリスク対象者であると言えるだろう。

このような状況において、多様な高齢者の現状やニーズを踏まえながら、今後も進行していくであろう高齢社会に適した地域社会での人々の新しいつながりを作り出していくことが、我が国の重要な政策のひとつとして求められている（内閣府,2012; 東京市町村自治調査会,2012）。

II. 地域とのつながりに関する研究

高齢者にとって地域社会とのつながりの必要性への示唆を得るために、地域社会とのつながりの意味とつながるための手段のひとつとしての高齢者の社会活動について文献を概観する。

1. 地域とのつながりの現状

現在の日本社会にとっての「つながり」は豊かな国民生活の維持向上のためのキーワードでもあり、「つながり」の現状や過去からの変化、変化が国民生活に与えた影響、「つながり」

の再構築に向けた動きについて、2007年に内閣府から「平成19年度版 国民生活白書～つながりが築く豊かな国民生活」が発刊されている。地域におけるつながりは、大きく、①在る場所に居住し生活することで生まれる近隣住民とのつながり、②町内会や自治会などの地域の地縁組織に参加することによって生まれる限定区域内でのつながり、③ボランティア団体やNPOなどの特定の目的のために設立された組織への参加によって生まれるつながり、に大別されている（内閣府,2007）。家族、地域、職場の人とのつながりは、精神的な安らぎをもたらして生活満足度を高める（岡本他,2005；石川他,2009）。その一方、現代ではその付き合いの深度において、必要であれば気軽に話し合うような‘部分的’な付き合いや、必要最低限の‘形式的’な付き合いを望む人の割合が多く、人との付き合いにある程度の距離を置くことを望むようになってきていることが、地域社会内でのつながりの希薄化の一因となっている。実際、人間関係が「難しくなった」と感じる人は63.9%、その要因の上位には「人々のモラルの低下」、「地域のつながりの希薄化」、「人間関係を作る力の低下」、「核家族化」などが挙がっており、近隣関係によるつながりは総じて浅いと住民自身も実感していると言える（内閣府,2009）。

そうした中で、「地域のつながり」が必要だと思っている人は93.6%である一方、「地域のつながり」があると感じている人は77.0%に止まっている（内閣府,2010）。また町内会や自治会などの地縁組織への参加頻度は、1968年（市部）には49.1%が「だいたい参加する」であったが、2007年では「月に1日程度以上」12.7%、「年に数回程度」35.8%、「参加していない」51.5%と顕著に関わりの減少が見られている。そして、「地域のつながりを感じる」人は、大都市（東京都区部、政令指定都市）で69.1%、中都市（中核市、特例市）が73.8%、小都市（人口10万人未満の市）83.4%、町村（町、村）が87.8%であり、都市規模が大きいほど「地域のつながりを感じる」人が少ない状況も報告されている（内閣府,2010）。しかし、他方で、「社会のために役立ちたいと思っている」人の割合は、1977年には45.2%だったものが2007年には62.6%と、社会への貢献意識は高まってきている。実際に地域活動に参加した場合は、新しい仲間やつながりをもつきっかけや、達成感や充実感などの精神的充足が得られ、こうした地域のつながりは、いざという時の頼みの綱としての安心感へと繋がっていることが調査報告されている（内閣府,2009）。こうした現状から、自身の意識には地域社会と関わりをもって社会に貢献したい思いがあるにも関わらず、実際への活動には結び付いていない人々の複雑な地域への態度が読みとれる。

2. 社会活動に関する研究

高齢社会対策大綱では、「横断的に取り組むべき課題」として、「地域社会への参加促進」が挙げられており、「国民ひとりひとりがその能力を最大限に発揮し、積極的に社会に参加して‘居場所と出番’を持ち、社会経済を支えていくことのできる制度を構築する」として、高齢者が生きがいをもって、生き生きと高齢期を過ごしていくためにも、高齢者が自ら進んで出かけることのできる‘居場所’をつくることや、高齢者の‘社会的な活動’への参加を促進することにより、高齢者の地域からの孤立を防ぐ必要があると述べられている（高齢社会対策大綱,2012）。

社会活動は高齢者自身の‘生きがい’形成や主観的幸福感に影響を与え（浅野,1987; 馮,2005; 岡本,2006; 浜崎,2007）、身体面や精神面での健康を良好な状態に維持し（松田,1998; 高橋,2001）、さらに地域や社会との連帯や社会の活力を高めることが示唆されており（岡本,2006; 平野,2011）、社会活動について研究することの意義が指摘されている。

研究論文の多くは「社会活動」という用語を用いているが、その操作的概念や測定尺度は研究者によってさまざまで、論文内でも明確に定義されていないものも多い。高齢者の社会活動について多くの研究を行っている岡本（2010）は、「家族や親族を超えた他者との対人活動、団体や組織に参加して行う活動、地域における活動の場への参加といった、高齢者が空いた時間を活動して自主的に行う活動の総体」という定義を用いており、社会活動には①仕事、②社会的活動、③学習的活動、④個人的活動の4側面をもつ活動と定義づけている。玉腰らは、社会活動を「社会と接触する活動」（1995）とし、また高齢者の社会活動状況の指標開発を行った橋本ら（1997）は、「家庭外での対人活動」と端的に規定して研究を行っている。その他にも、高齢者の対人的社会活動尺度の開発を行った馮は、「相互作用を伴い家庭外での対人的ならびに集団的活動である」と定義している（馮,2005）。そして平野（2011）は、日本の「高齢者の社会活動」の概念分析を行い、その概念を、「家族以外の身近な人との相互交流や集団・組織への参加、また他者との交流を主眼にせず、これまで会社や家庭内で役割を果たしていた時間を自分のために使う、自己完結する活動を通じた社会との関わりである。これらの交流は、高齢者に対して健康に向けた心身機能の活性化や老年期を過ごすことへの充実感を与え、さらには地域・社会との身近なつながりの形成や、地域の一員としての社会貢献へとつながっていく活動である」と、社会活動による効果（outcome）を含めた詳細な定義づけをしている。共通して定義されている内容より、社会活動は‘家庭外’での‘対人的な相互作用’を伴う‘集団的’で‘自主的’な活動である、と言えよう。

社会活動の指標としては、橋本ら（1997）による「社会活動指標」がよく用いられている。橋本らは、高齢者の社会活動を「仕事」、「社会的活動」、「学習的活動」、「個人的活動」の4側面から捉え、項目として「仕事」1項目、「社会的活動」6項目、「学習的活動」4項目、「個人的活動」10項目の計21項目を設定している。「社会的活動」には、地域行事や町内会活動、老人会活動の他に趣味の会の活動なども含まれており、広い視野で家庭外の社会的な対人活動を捉えている。この橋本ら（2007）の指標を用いた研究に、浜崎ら（2007）の高齢者の社会活動と幸福感に関する研究や、高齢者の社会活動の実態に取り組んだ玉腰ら（1995）の研究、地域在宅高齢者の活動能力と社会活動との関連性を検討した佐藤ら（2002）の研究など数多くみられている。また、高齢者の社会活動について多くの研究を行っている岡本は、「社会活動指標」を考慮しながら、研究の主旨に沿ってアレンジを加え、「町内会・自治会」、「学習」、「ボランティア」、「趣味や娯楽のサークル等」という4項目を用いたり（2006,a）、「人が集まる場への参加」と文化的な側面として「趣味や娯楽」の2側面を設定したり（2006,b）など、模索しながら研究を行っている。そして、高齢者の対人的社会活動尺度の開発を行った馮の研究（2005）からは、探索的因子分析の結果、対人的社会活動は「社会的役割の遂行」と「社会集団への参加」、「自己啓発的活動」の3つの因子から構成されている。

これらの研究はほとんどが量的研究であり、高齢者にとっての社会活動の意味や意義を質的な側面から探究した研究は、青木ら（2010）が高齢者の地域活動についてのリフレクションへの語りを質的帰納的に分析し、暮らしと地域活動へ的高齢者の思いを明らかにした取組みなどはみられるものの量的な研究に比して少ない。この青木らの研究（2010）では、「地域活動」という用語を用いており、「地域住民が趣味や助け合い・コミュニティの活性化などのために組織化して行う活動」と定義している。

このように、高齢者と社会活動に対しては、概念自体が多様であることと共に、社会活動の指標や測定尺度の開発、主観的幸福感や生活満足度との関連性の検証、活動参加意向や活動能力との関連を測るなどの量的な研究が多く、高齢者にとっての社会活動の意味や意義を質的な側面から探究した研究は数少ない現状が明らかになった。

Ⅲ. 定年退職男性に関わる研究

1. 退職に関わる研究

定年退職は、人生後期における大きな転換をもたらすライフイベントでもある。労働者が

退職すると、職場でのストレスがなくなる一方、身体活動量の減少や人間関係が変化すること、自由時間が増えること、定期的な収入の減少などの変化が複雑に関係して、高齢期の健康にさまざまな影響が現れることが予測される（堀江,2007）。

特に労働を重要な役割としている男性にとっては、これまでの企業・職域指向型の生活から、家族・地域指向型の生活へとその生活構造を大きく変容させることになるため、ライフスタイルや個人を取り巻く人間関係、生活環境が大きく変化するといわれる（Barbara,2003; 堀江,2007; 西田,2007; Barbara, et al., 2011）。そのため、退職に関わる研究には、退職による生活構造の変容によって生じるさまざまな身体的・精神的問題（佐藤ら,1999; 森田,2005; Calvo, et al.2013; Hamoudi, et al.2013）や社会心理的側面からの取り組み（Marlene, et al.1998; 木村,1999; 西田,2006; Ben, et al. 2013）と共に、高齢期の生活の質（QOL）や生きがい（若林,1989; 西田ら,2006; 熊野,2007; Estelle, et al.,2008; Ben, et al. 2013）との関連から考察する研究などが多くみられる。

1) 日本における研究

定年退職に伴う健康に関する研究には、退職前の就労者を対象とした、生活習慣調査（森田, 2005）、ストレス対処能力と精神的健康度との関連（宇佐見ら, 2010）、定年後の健康づくりに対する意識（船山ら,2008）、退職後の不安感と対応行動（佐藤ら,1999）など主に精神的側面の健康に着目した研究がみられる。宇佐見ら（2010）は、定年退職者の精神的健康には、個人的要因として人生経験の積み重ねの結果得られたストレス対処能力の向上が大きく影響することと、環境的要因として「質的負荷」と「対人関係の困難」が精神的健康に影響すると示唆しており、船山ら（2008）は定年退職後の健康には社会活動参加がよい影響を与えると述べている。身体的側面からの健康に関しては、生活習慣病など高齢期の健康としても捉えることができるため、退職との関わりから健康を捉える場合、退職による生活環境や人間関係の変化に伴う社会心理学的な側面からの研究が多いのではないかと考える。

退職後に関しては、社会心理学的な研究のひとつとして、退職後の生きがいや QOL に関する研究が多くみられる。QOL を表すひとつの指標としての“生きがい”に着目した、熊野（2007）や若林ら（1989）の研究、“主観的幸福感”と社会参加との関連をみた西田ら（2006）の研究、そして地域活動や人間関係量など地域での人とのつながりから QOL を捉えようとした、青山ら（2010）や安田（2007）の研究がみられる。熊野（2007）は、定年前後の男性を対象とした研究より、仕事、地域活動、趣味、家族を生きがいの対象とすることが生活満足度

にそれぞれ同程度関与しており、様々な生きがいを持つことが満足度を高めると述べている。また、退職後の生きがいは何によって影響されるか、という視点から取り組まれた若林（1989）の研究では、在職中の自律的な生き方が、組織に対するコミットメントを高め仕事のやりがいを促進すると同時に、仕事・余暇、家族、住居、貯蓄、社会的貢献、友人関係の要素が、退職後の生きがい感や満足感、貢献度にも強い影響を及ぼしている。そして、女性の定年退職者の楽しみ・生きがいについて M-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）を用いて分析した徳田（2010）は、「現役時代を継承した生き方」、「職場と別の世界での生き方」、「仕事に代わる「生きがい」探し」が見出されている。概観すると、退職者の生きがいや QOL には、職場以外での家族や友人、社会とのつながり等人間関係のありかたが影響を与えていることがわかる。

岡本(1985)は、定年退職が職業生活の終わりを示し、自我同一性にとっても重要な節目として自我同一性の危機という視点から研究を行い、退職を重要な転換期として主体的に捉える意識の有無が、退職後の自我や不安定感に影響を与えると述べている。また佐藤（1999）は、定年後の不安に関して「経済力」、「健康」、「家族」、「人間関係」が高かった結果より、定年退職後を不安なく過ごすためには、健康の維持・増進、経済生活の不安と並んで、社会から疎外されることなく、社会とかかわりを保ち続けることが重要であると示唆している。

サラリーマンの生活と生きがい調査（年金シニアプラン総合研究機構,2012）では、男性は“定年前に退職に向けて実際準備していること”の項目において、「会社以外の活動の場を作っておく」との回答が女性よりも多く、男性は定年退職を控えて、会社中心の生活を切り替えていく、あるいは会社や仕事関係以外の人的ネットワーク作りに取り組む必要性を感じていることが報告されている。また西村（1993,1997）は、ライフスタイルの変化に対応するためにも、その変化を支える社会的ネットワークの編成が重要であると述べている。そして、退職者が退職後の生活を考えるうえで、社会的環境への再適応を考慮することも重要であり、地域に根ざした人的ネットワーク形成を促進する地域支援や介入の方策の必要性を示唆している。

このように、退職による「ライフスタイル」の変化に伴う“自我同一性の危機や不安感”や“退職後の生きがい、満足度”、“社会的ネットワークの必要性”等に焦点をあてた調査・研究はいくつも行われている。これらの定年退職と健康や QOL に関わる先行研究は、定年退職者全体を対象とし、退職を高齢期への移行期として捉え、高齢期に向けた心理社会的な適応という視点で行われたものが多い。そして多くの研究が、生活の満足度や QOL の維持・

向上には、地域社会とのつながりが有効かつ重要であるとの結果を報告している。

こうした先行研究でも論じられているように、退職後のライフスタイルについて考える時、彼らにとって、職場とは異なる居住する地域社会の中で新しいネットワーク構築や生活リズムの再調整を図っていくことは重要であるが、それと同時に、そのためには、彼ら自身による「地域への意識」を高めることや参加行動が求められるのではないかと考える。しかし、職場での時間や人間関係が中心となりやすい定年退職期にある男性にとって、第二の人生の場となる地域は生活を送っているとは言えなじみは薄く、地域への意識は希薄であると考えられる。人々と地域との関係を、“意識”の視点から捉えようとした試みは、ほとんどが定年退職者ではなく一般住民を対象としたもので、地域意識を構成する基本的次元の 5 因子を抽出した飽戸(1976)の研究や、2 因子構造の 45 項目から成る「地域社会への態度尺度」の開発を試みた田中ら (1978) の研究、居住地域への意識と地域活動との関連を明らかにしようとした越田ら (2012) の研究などがみられる。

これまで行われてきた退職をめぐる研究は、退職がもたらす変化を客観的な視点から捉え評価しようとする量的研究が多く、退職者本人の視点から退職による変化を捉えて退職の意味を探ろうとする質的な取組みは希少であることが明らかになった。

2) 海外における研究

欧米においては、一定の年齢で労働契約を打ち切ることは、年齢を理由とする解雇であり、差別と受け止める考え方がある。米国では定年制度はなく、イギリスも 2011 年に定年制は廃止され、オーストラリアでも多くの州で廃止されている。欧米での退職とは、主に職業的なライフサイクルの最終段階に該当し、個人が職を辞する時期 (timing) を自覚した時に始まり、退職の役割を果たすことが出来なくなった時に終わる一つの「過程」である (Atchley,1979)。そのため、退職に関わる研究の傾向も日本の研究とは異なる部分があると思われる。

欧米においても、第二次大戦後のベビーブームの世代の高齢化や退職が、社会や経済、健康などに影響を与えることが懸念されており、米国では Health and Retirement Study(HRS)、イギリスでは English Longitudinal Study of Ageing(ELSA)、欧州では Survey of Health, Ageing and Retirement in Europe(SHARE)など、大規模なコホート調査が実施され、基礎資料として構築されている (堀江,2007)。HRS のデータは、この世代の生活習慣や保健行動と健康に関する研究によく利用されており、退職と社会保障金

(Social Security Benefit) の研究 (Gustman,2002) や主観的な身体的・精神的健康が退職のタイミングにどのような影響を与えるのかの研究 (Calvo, et al, 2013) もこのデータを基に行われている。

また米国には、Retirement community や Continuing Care Retirement Communities などの退職者や高齢者だけの集合住宅や街という特殊なシステムがあり、退職に関わる研究の多くが、この集合体を対象として行われている (Karen, et al, 2008; Abir, et al,2009; Barbara,2011; Schafer,2011)。Barbara(2011)は、この、老化の進行に伴って必要となるヘルスケアサービスを受け続けることができる高齢者のためのコミュニティに住む高齢者の運動に関わる関連因子の探索を行い、身体的・精神的な健康を回復させるためには、まず自身の回復力 (立ち直る力) が自己効力感および運動の実施に影響を与える重要因子であることを探究している。

その他、米国の退職に関わる研究の特徴として、退職を社会経済的な側面から危機的イベントと捉え、社会保障金や収入の安定が退職後の満足や精神的満足に寄与すると述べる (Gustman,2002; Dow,2010) など、経済面と健康との関係性をみる研究が日本より注目されている感じがある。一方、退職者が労働者よりも精神面での問題を抱えている割合が高く、退職者への精神的サポートの充実が求められている現状 (Gill, et al, 2006) や、早期退職者により精神的問題が起きやすい結果 (Butterworth, et al, 2005)、退職にともなう社会的役割の喪失が健康や高齢期の幸福に影響を与え、社会的役割を再獲得することが退職の過程における幸福の獲得に重要であるという研究 (Ben, et al, 2013)、退職におけるヘルスプロモーションに関する文献レビュー (Donna, et al, 2007) などがあり、退職に関わる研究課題として日本と同じであり、退職にともなう世界共通のテーマであることがうかがえる。

しかし、退職という過程における社会心理的変容のプロセスやストレスへの適応に関する研究において、米国やオーストラリアでは、量的研究 (Rosenkoetter, 1998, 2001; Farquhar, 2013) の他にも、ナラティブ・アプローチ (Jonsson, et al, 2000; Jonsson,2011) や現象学 (Wythes,2006) などの質的な研究も行われており、量的研究が多くみられる日本の研究傾向との違いが感じられた。

2. 定年退職男性を対象とした研究

定年退職期に関わる研究の多くは定年退職者全体を対象としており、男性に焦点をしば

った研究は少ない。希少な男女の比較を行っている「サラリーマンの生活と生きがいに関する調査」(年金シニアプラン総合研究機構,2012)によると、生きがいの意味は男女とも「生きる喜びや満足感」、「心の安らぎや気晴らし」、「生活の活力や張り合い」が上位であると同時に、男性は「人生観や価値観の形成」の選択率が女性よりも高いことが報告されている。また、男性は女性に比べて“仲間・友人”が「欠けて」おり、“近隣との交流”も「不満足」が高く、団塊世代の男性が退職後に感じる不安には、「人的交流」と「情報量の減少」がきわめて高いという結果も報告されている。そして男性は、定年退職を控えて「会社以外の活動の場を作っておく」など、会社中心の生活を切り替えるために、会社や仕事関係以外の人的ネットワーク作りに取り組む必要性を感じていることが示されており、この結果からも、男性は女性よりも、定年退職という生活構造の転換期において、地域とのつながりや地域生活への適応に課題を抱えているといえるだろう。

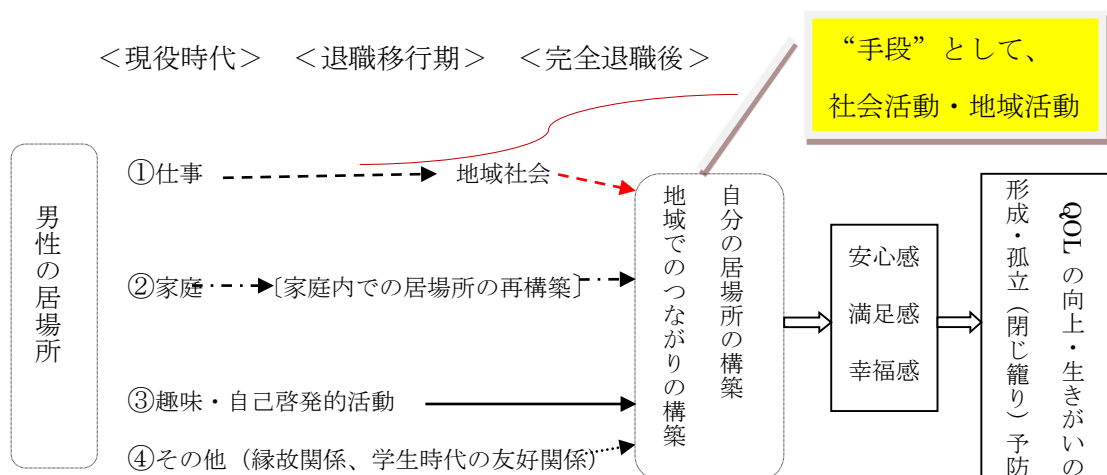
高齢者の主観的幸福感を高める要因について男女別に明らかにした浜崎ら(2007)の研究からも、男性の主観的幸福感を高める要因として、「自覚症状数が少ないこと」、「友人数が多いこと」、「社会的活動の実施率が高いこと」が関連していると述べられている。また、在宅高齢者の活動能力と社会活動の関連性を探索した佐藤ら(2002)は、男性は女性と比べて、町内会・自治体などの地域に密着した活動や個人的活動領域の項目割合が多く、高齢期の地域社会参加のルートとして、町内会や自治体などの既存の地域活動の位置が高いことを報告している。そして男性は、退職によって失われた有用感や充実感を新たな社会活動によって獲得しているものと示唆している。

団塊の世代の意識を調査した内閣府による平成25年版高齢社会白書(2013)の報告では、団塊世代の男性が今後参加したいと考える社会活動は、「趣味、スポーツ活動」33.3%、「地域行事(地域の催しものの運営、世話役等)を支援する活動」18.0%、「地域の伝統や文化を伝える活動」15.1%であり、彼らは地域におけるさまざまな社会活動への参加意向を持っていると言える。また、社会活動への参加のきっかけは、「友人や地域住民から誘われた」が最も多く36.6%、「自分かやりたいと思う活動があった」24.5%、「参加する時間的余裕ができた」18.7%となっている。団塊の世代は、地域におけるさまざまな社会活動への参加の意向は持っていたとしても、現状では社会活動には参加していない人が多いといえる。こうした現状を踏まえて、定年退職男性を迎え入れる地域としても、退職後に時間的な余裕ができた時に、地域での活動にスムーズに参加できるように環境を整備していくことの必要性が示されている(内閣府,2013)。

地域生活へ移行していく過程を歩む定年退職した男性にとっては、まずは地域を基盤とした生活スタイルになじむことが必要だろう。地域での生活には、人との社会心理的なつながり（共同性）と場所（地域性）への適応の両側面が影響してくるため（成木,2007）、彼らはこの両方に適応していくことが求められると考える。そのためにも、先行研究でも論じられているように、地域に根ざした人的ネットワーク形成を促進する地域支援や介入の方策の必要性が示されている。それと同時に、定年退職男性が地域の中で地域活動への参加などから地域とつながりを持つためには、彼ら自身が地域について考え、積極的に地域へ出掛けに行く行動力も求められるのではないかと考える。

Ⅲ. 本研究への意義

これまでの文献検討を踏まえて、定年退職した男性と地域との関係を〔図1〕に整理した。



〔図1〕 定年退職した男性と地域との関係

文献検討によって、地域とのつながりおよびその手段としての社会活動への参加は、高齢者にとって、身体的・社会心理的に不安的な高齢期の生活に対して、精神的な安心感や生活への満足感、主観的幸福感をもたらすことが明らかになった。そして、その安心感や満足感、幸福感は、さらにその人の生きがいや生活の質（QOL）の向上に寄与し、社会的課題である高齢者の社会的孤立や閉じこもりの予防にもなること、また、男性、特に一人暮らしの男性は社会的孤立に陥りやすい状態にあることが示唆されている。

こうした社会的孤立にならないためにも、これまで職場でのつながりや役割の中に自身の居場所や価値を感じていた男性が、定年退職を機に職場を離れることで見失った自分の価値や居場所を、職場から地域生活の中に徐々に見出していき、これからの高齢期を安定して生活していけることが望まれる。そのためにも、定年退職した男性が、地域の中で自分の居場所の再構築を行い、高齢期を安心・安定して生活していけるための支援が求められている。

自分の居場所を職場から地域社会の中に見出していくためには、地域の中で人とのつながりを持っていくことが必要であり、そのつながりを作る手段のひとつとして、社会活動（仕事、社会参加、学習活動、個人的活動）への参加が考えられる。定年退職後の男性が地域活動を通してどのような過程で地域とのつながりを構築していくのか、というプロセスを探究した研究は見当たらない。高齢者と地域とのつながりや社会活動に関する既存の研究の多くは、量的アプローチから探索したものが多く、定年退職後の男性の視点から地域とのつながりを質的に分析し明らかにすることは、彼らが職場環境から離れ、地域社会に軟着陸して地域と新しいつながりを構築していくための手がかりとなり、意義がある研究になると考える。

第3章 予備研究

本研究では、日本における定年退職後の男性が、地域の中で家族以外のつながりを構築していくプロセスの構造を明らかにしていく。そこで、予備研究では、地域とつながる手段としての地域活動に着目し、定年退職期にある男性の地域活動への態度について内容分析を行い、定年退職期にある男性にみられる“地域活動に対する態度”の特徴を記述することを目的とした。また、本研究での研究協力者の焦点を絞るためにも、地縁の存在や結びやすさが定年退職後の男性の地域活動に対する態度に関連してくる可能性を考慮して、首都圏と地方都市という居住地域の違い、および地域活動経験の有無による違いを明らかにすることを目的とした。実際の活動内容や地域活動への参加の有無には、その人（定年退職期にある男性）の捉える「地域」や退職後の地域生活への価値観などが潜在していると考えられる。地域活動への態度の特徴を把握することは、定年退職期の男性が捉える「地域」の定義にも関連し、その地域において、退職後の高齢期男性が安定した地域生活を築いていくうえで求められる“地域とのつながり”の構築の過程で重要な視点になると考える。

I. 研究方法

半構成的インタビューを用いた質的記述的研究を行った。

1. データ収集

1) 対象

企業等を定年退職した、退職直後の男性から退職後約5年間までの男性で、居住する地域での生活や活動、思いについて語ることができる人物であることを研究協力者の条件とし、機縁法によって紹介を受け、研究参加に同意が得られた定年退職期にある男性（60歳代～70歳代）9名とした。また、属性の違いによる影響の有無を検討し、本研究での研究協力者の絞り込みを行うために、(1)首都圏と地方都市、(2)地域での組織的な活動経験のある男性と活動経験のない男性、の属性を有する対象を選定した。

2) データ収集期間

2012年7月から2012年9月まで

3) 方法

データ収集には、「退職前後で地域との関わり（活動、交流）や生活に変化はありま

したか」や「地域との関わりの中で印象に残っているエピソードについて語って下さい」等のインタビューガイドを用いた半構成的インタビューを実施した。インタビューは、研究協力者の希望により指定された公民館や自宅にて、プライバシーに配慮して行い、1人1回60～90分で行った。インタビュー内容は、研究協力者の許可を得て、ICレコーダーとメモによりその場で記録を行い、インタビュー後に逐語録を作成してデータとした。

2. データ分析

質的記述的にインタビューの内容分析を行った。結果データ（逐語録）を繰り返し読み、語られた文脈から“地域活動に対する態度（心の構え、考え方、行動傾向）”についてコードを起こし、コードの示す意味内容の類似性を基にカテゴリーを生成した。そして、カテゴリーの類似性と相違性の比較をし、カテゴリー間の関係性をみながらカテゴリーの洗練を行った。カテゴリーの生成や命名の過程において、指導教授および質的研究の専門家からのスーパーバイズを受けた。その段階を繰り返しながら分析を進め、インタビューから抽出したカテゴリーをもとに、定年退職期にある男性の地域活動に対する態度の特徴と関連要因について検討した。

3. 倫理的配慮

計画書の段階で、聖路加看護大学研究倫理審査委員会の審査（承認番号：12-016）を受けて実施した。倫理的配慮として研究協力者の権利を保証するために、以下の具体的な倫理的な配慮を行った。

1) 研究協力者の意思の尊重・権利の保証

研究協力者の自由意思に基づいて行うものであり、研究への参加と辞退の決定、および中途での辞退の表明ができることを文書と口頭にて説明した。

2) 説明と同意

インタビューを行なう前に、文書と口頭にて、研究協力者に具体的に研究の趣旨とインタビュー内容について説明を行った。また、インタビューデータは研究目的以外には使用しないことや匿名性の保証をし、承諾を得た。

3) データの管理

個人情報を含むデータ、および個人情報に関する書類の厳重管理について、研究成果の

公表後 3 年間保管した後に、再生不可な状態にして破棄する事を説明した。

4. 研究協力者の基本属性

9 名の研究協力者のデモグラフィック特性を表 1 に示す。

表 1 研究協力者のデモグラフィック特性									
	A氏	B氏	C氏	D氏	E氏	F氏	G氏	H氏	I氏
年齢	70歳代前半	60歳代後半	60歳代前半	70歳代前半	60歳代後半	60歳代前半	60歳代後半	60歳代後半	60歳代前半
元勤務先	企業	企業	企業	地方公務員	公務員	公務員	公務員	公務員	公務員
退職後年数	14年	1年半	3か月	7年	1年	6年	7年	3年	4か月
住居形態①	戸建	戸建	マンション	戸建	マンション	戸建	マンション	マンション	マンション
居住年数	25年	28年	7年	5～6年	15年	6年	31年	27年	30年
居住地	首都圏	首都圏	首都圏	首都圏	地方都市	地方都市	地方都市	地方都市	地方都市
地域活動の有無	あり	あり	無	あり	無	無	無	あり	あり
地域活動の内容	町内会役員	町内会役員	特になし	町内会役員	特になし	特になし	特になし	ボランティア 同好会	公的 社会活動
近所付き合いの有無	あり	あり	無	あり	無	無	あり	無	あり

首都圏と A 地方都市（以下 A 市）に在住する定年退職を迎えた 60 歳から 74 歳までの計 9 名の男性で、平均年齢は 66.8 歳であり、全員が既婚者であった。定年退職した年齢は 59 歳から 68 歳であり、平均年齢 61.2 歳であった。4 名が首都圏在住、5 名が地方都市である A 市在住であり、組織的な活動経験のある男性は 5 名（首都圏 3 名、A 市 2 名）、ない男性は 4 名（首都圏 1 名、A 市 3 名）であり、活動経験ありの内訳は町内会役員が 3 名、ボランティア活動 1 名、公的社会活動 1 名であった。9 名中 7 名が再就職または退職後にアルバイトの経験があり、研究協力時に就労中だった男性は 2 名であった。また、定年退職後に再就職等を行いながら完全退職してからの経過年数は、4 か月から 12 年までと幅広く、平均 5.3 年である。元職業は、首都圏の 4 名は様々な大手企業あるいは地方公務員であり、大手企業勤めの者は全員単身赴任経験があった。また、A 市の 5 名は全員公務員であり、全員が全国規模での単身赴任あるいは転勤の経験があった。住宅形態は、戸建 4 名、マンション 5 名、あいさつを交わす以上の近所づきあいの有無に関しては、5 名が「あり」、4 名が「なし」と答えていた。

II. 結果

抽出したカテゴリーを元に、定年退職期にある男性の“地域活動に対する態度”の特徴とその関連要因について記述する。分析により、地域活動に対する態度を示す 3 カテゴリー、地域活動に対する態度に影響を与える関連要因 6 カテゴリーの計 9 カテゴリーが抽出された（表 2、表 3）。文中の【 】はカテゴリーを、『 』はサブカテゴリーを示す。

1. 地域活動に対する態度

定年退職後の男性の地域活動に対する態度には、【消極的姿勢により地域での再拘束を回避する】、【居住者として地域貢献は義務と思う】、【自己の存在価値を模索する】の3カテゴリーが抽出された。再び縛りのある人間関係や責任から回避するために、【消極的姿勢により地域での再拘束を回避する】行動をとる一方で、住んでいる者として抱いてしまう地域への義務感から、【居住者として地域貢献は義務だと思う】意識も併せ持っていた。地域に対して距離を置きたい意識と、義務感から何かしなければと様子を窺う意識が揺れ動く中で、その地域の中で自分の価値を見出そうと【自己の存在価値を模索する】意識が混在しせめぎ合っている状態であることが明らかになった。(表2)

1) 【消極的姿勢により地域での再拘束を回避する】

【消極的姿勢により地域での再拘束を回避する】態度とは、地域に住む人たちとは密な関係を持たずに自分が心地よいと思える程度の距離をもって落ち着いて生活したいという思いにより、地域の組織や人と距離をおくことである。『地域の人とは入り込みすぎず程よい距離を保つ』ことや、責任感や組織からの縛りから解放されてやっと得た自由を楽しむためにも、再び『組織や人に再拘束される生活を避ける』意図が強いこと、そして、程よい距離を保ったり再び人的・組織的な縛りを回避したりするためにも、あえて自分から地域に関わることは出向いて行かないという『自分から積極的に地域に関わらない』姿勢をとることであった。

定年退職期にある男性は、再雇用や再就職をしている男性も含めて全員が、「退職して時間ができた」、「仕事って言っても時間フリーとかゆとりができた」、「やっと自由になれた」などと、仕事でずっと身体的にも心理的にも縛られてきた重荷からの解放感を好ましいものとして受け止めていた。そのため、これまでの重責感を再び背負うことに疲れており、「やっと仕事が終わったのに」、「もう組織にしばられたくない」思いから、「いったん関わるとなかなか抜けられない」現実も見据えて、あえて自ら縛りに繋がるような関わりを持たないように、「お付き合いは距離を置いた方がいいのかなって思う」、「関わらずに静かに暮らしていきたい」という『地域の人とは入り込み過ぎず程よい距離を保つ』態度や『自分から積極的に地域に関わらない』態度などの消極的な回避行動をとることによって、『組織や人に再拘束される生活を避ける』姿勢をみせていた。退職によって現役時代の責任や時間から解き

放たれようやく得た身体的精神的な自由のために、また組織的な縛りを背負い込みたくないという強い思いが、【消極的姿勢により地域での再拘束を回避する】態度として示されていた。

「もともと僕は、ご存じのとおり人づきあいてあまり好きな方じゃなかったから。適当に、静かに、目立たず、じゃませず、ここでひっそりと生きていければそれでいいやと思っていたし。」(D氏 71 歳)。

「組織に縛られたくない。それまでずっと縛られてくるでしょう。そうするとね、やっとなんか自由になれたと思うんですよ。…いったん入ると、なかなか抜けられないというのね、ありますからね。初めから入らなかったらね、向こうは諦めとりますが、いったん入ってちょっとお付き合いをしますと、なかなか今度は抜けるのがね。」(H氏 66 歳)。

2) 【居住者として地域貢献は義務と思う】

しかし【消極的姿勢により地域での再拘束を回避する】態度をとる一方で、「住んでいるからには」という住民としての意識から、【居住者として地域貢献は義務と思う】態度も持っていることが示された。この【居住者として地域貢献は義務と思う】態度とは、居住者としての義務感と自然と抱く地域貢献への義務感のふたつが入り混じったものであった。「住んでいるからには何かしないと罰があたる」や「住んでいる以上町内活動は義務」などその地域に居住していることに伴う義務意識から生まれる『住んでいる者として何かしないとイケない思い』と、「退職したらなにか地域に対してやらないと」、「地域には貢献しなきゃ」という思いはある」という地域へ何かしら返したり貢献したりすることそのものに義務感を感じている『地域貢献はやらないとイケないという思い』の両方の意識が反映されている。この【居住者として地域貢献は義務と思う】態度も地域活動の経験の有無に関わらず見出されているが、定年退職直後の男性よりも、完全退職に至り地域活動の経験がある者からより多く挙げられていた態度であった。

「銀行員は転勤して全国回ってますから。だからね、そういう点では、転勤がなくなって、ここにズーっといるということになると、せめて地域のというか、そういうなんかお手伝いでもしないと罰があたるかなと思って。」(B氏 69 歳)。「やっぱりね。うん、やっぱり少しは地域に貢献しなきゃというね。偉そうなことを言うようだけど。」(E氏 67 歳)。

3) 【自己の存在価値を模索する】

そして、前述の【消極的姿勢により地域での再拘束を回避する】、【居住者として地域貢献

は義務と思う】態度の方向性に影響を与えるもうひとつの態度として、【自己の存在価値を模索する】が見出された。この【自己の存在価値を模索する】態度とは、退職によって見失った自分の価値を、新しい生活の場で‘役に立つ’ことで見出せないかと現状からの変化を求める態度であった。この態度は、地域活動の経験の有無を問わず定年退職期にある男性全員に共通するものであった。「何かして役に立ちたい」、「役に立てる存在でありたい」など、男性は、退職前に社会人として果たしてきた役割や役に立ってきたという自尊心が退職によって失われたことに対して、職場ではなく新しく生活の中心となった地域の中で、『何かの役にたてる存在でいたい』思いを皆が持っていた。そして、「自分にできることって何かな」、「地域の中で存在感を発揮していくためにも特技があるといい」と、貢献できる自分を意識して『自分にできることはなんだろうと考える』姿勢があった。また、自己を見つめることで‘役だつ’自分を意識する一方、「周りが困っていて役立てるならやる」、「求められれば何かあると思って動けるけど」など、地域と関わりをもつための行動への理屈として、自分が役立てる存在であることを自分以外の他者から働きかけられることに見出している『求められて役立てるのであれば動ける』態度が見られた。研究協力者のほぼ全員が「役に立つ」という発言をしており、定年退職後に男性が自身の存在を役立てて新たな存在感を得たいと感じていることが伺えた。

「会社とかいろいろで、その、男の人だってなんかして、役立つ、役立って助けることができる。それがね、年取った人の一番のいいあれかなと思うんだけど。なんかの役に立つ。やっぱり人間、あれですよ。ただ遊んでたって。なんかちょっと、ちょこっと人の役に立つかなというあれがないと。」(A氏 74 歳)。

「一番いいのは、あとはまあ、趣味をね、生かした何かができれば一番いいんでしょうけど。特技を持つことが一番いいんでしょうけど。地域の中で、その存在感を発揮しよう思うたらね。人に教える事ができるようなものがあつたら一番ええですよ。」(F氏 64 歳)。

定年退職期にある男性の地域活動に対する態度を表す 3 カテゴリー【消極的姿勢により地域での再拘束を回避する】、【居住者として地域貢献は義務と思う】、【自己の存在価値を模索する】は、定年退職期にある男性個々の中で混在した態度として同居しており、定年退職後の年数や彼らを取り巻く生活環境などに影響を受けて、【消極的姿勢により地域での再拘束を回避する】態度が強まったり、反対に【居住者として地域貢献は義務と思う】態度が強まったりと地域生活の中で揺れ動いている状況が垣間見えた。そして、地域活動との関わりを考えていくうえで【消極的姿勢により地域での再拘束を回避する】態度と【居住者として

地域貢献は義務と思う】態度のどちらにウェイトが傾くのかを左右するものとして、【自己の存在価値を模索する】態度が根底にあり、定年退職期にある男性は、その自己の存在価値を見出す場のひとつとして、地域との距離や関わり方を模索している現状が明らかになった。

表2 地域活動に対する態度

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
消極的姿勢により地域での再拘束を回避する	地域の人は入り込みすぎず程よい距離を保つ	静かに目立たず邪魔せず、ここでひっそり生きていければそれでいいやと思っていた
		お付き合いは距離を置いた方がいいかなって思う
	組織や人に再拘束される生活は避ける	それまでずっと縛られてくるでしょ。もう組織に縛られたくない。
		あんまり立ち入りつちゃうと拘束されてしまうんですよ 責任を負うこと自体が、もう苦勞なんですから
	自分から積極的に地域に関わらない	自分から手を挙げてやる人はそういないでしょ
		自分から積極的に‘地域とこう’とはあまり考えていない 世話をしてくれる人がいて、くっついていく方だったらまだ
居住者として地域貢献は義務と思う	住んでいる者として何かしないと‘いけない’思い	住んでいるからにはお手伝いでもしないと罰があたる 町内活動は住んでいる以上最低限の義務だなと
	地域貢献は‘やらないといけない’という思い	退職したらやっぱり何かその分をしていかないとけんあというのは常々ね
		少しは地域に貢献しなきゃという思いがあるね
自己の存在価値を模索する	何かの役に立てる存在でいたい	男の人だって何かして役に立つ、役に立って助けることができる
		町内会で少しでも役に立てることがあればと思って
		やっぱりまあ、少しでも役に立てばなあということで引き受けてね
	自分にできることは何だろうと考える	期待されることがあるんかなって考えると、逆に自分にできることは何かなって話になる
		地域の中で存在感を発揮しようと思ったら、特技をもつことが一番いいんじゃないかな
	求められて役立てるのであれば動ける	現役は退いたけど、何か役にたてることがあったらできようっていう気構え 周りが困っていて役に立つんだったらやります 求められれば何かあるかなかなと思ったりするんですが

2. 地域活動に対する態度に影響する関連要因

定年退職期にある男性の地域活動に対する態度に影響を与える要因として、背景となる心情的要因 4 カテゴリー、態度に変化をもたらす契機となる要因 1 カテゴリー、そして地域活動と関わることによって獲得される帰結 1 カテゴリーが抽出された。(表3)

表3 地域活動に対する態度に影響する関連要因

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
仕事に伴う精神的・時間的縛りから解放される	時間に余裕ができる	空いてくるじゃないですか、変な話暇を持て余しちゃう暇だから、正直言って
	気持ち的にも自由で楽になる	それまでずっと縛られてくるから、やっとなんて自由になれたとおもうんですよ 厳しい生活だった、それがなくなったで気分的にすごく楽になった
	仕事による責任から解放される	退職して責任がなくなったんで気持ち的にこうゆったり色んなことを考えられる 今はそういう立場にないから精神的に余裕ができた
これまでの人的つながりの継続に満足する	現役時代の仲間との関わりで満たされる	退職直後は会社とのつながりが残っていて 会社に勤めていればそちらのメンバーの方が関わり深いですから
	地元での元々のつながりが続いている	田舎に帰ればなんやかんや声かけてもらえますしね 今はまだ職場の延長での付き合いですね
	これまでの関わりに不自由さを感じていない	同級生がたくさんおるもんだからあまり寂しいとかはない 今は直接周りややらなくても生活できちゃうしあまり不自由でないです
生活リズムの変化による生活空間・人間関係の縮小を実感する	現役時代の居場所からの物理的隔たりを感じる	会社の仲間は近くに住んでいないから、徐々に地域の方になっていく 行動範囲が狭くなってくる、限定されてきますね
	日中中心の活動パターンへと移行していく	1回家に入っちゃうと夜出掛けて行くのが億劫になる 昼間飲むんだったらいつでも行くよ、明るいうちに帰れるもんだから
	現役時代のつながりが徐々に減っていく	会社の友達はどうぞ減っていきますよね 新しくできた友人はいないです、そういう意味では寂しい限りですね
終の住処として覚悟する	「ここ」という居住する場所を自覚する	ここに住む以上最低限の義務だけは果たそうと思った 何かなければここに居るんだなと思ってね
	今後ずっと「ここ」にいるという思いを抱く	ここで生きていくうえでの義務を放棄することになる 持家でそこに家を構えたからにはやっぱり町内におるわけですから もうズーッとここにいるということになるとね
必要とされている自分を実感する	他者からの干渉により参加の一步を踏み出せる	なかなかね、人からの干渉がないとね、結構動かないですよ 女房と子供にね、何かよればどうなのって後押しがあったからやる気になったのかな
	周りから求められて期待がわかれば動ける	役に立たないという思いもあるし依頼があれば応じますよ 求められれば何かあるんだと思うけど
社会的な自己価値の在る場を獲得する	地域に属する当事者としての現実を実感する	役員になることでこの歴史とか流れていくものに一気に取り込まれちゃったところがある 地域の色々な問題が見えてくるけど、でもこの場所が嫌ではないんですよ
	コミュニティの一員としての意識が生まれる	活動をしているおかげで退職後も地域に自分の居場所があるんです ‘こっち’が見る姿勢になるし、向こう側からの目を感じるようになった

1) 定年退職に伴う男性の心情

背景となる心情的要因として、【仕事に伴う精神的・時間的縛りから解放される】、【これまでの人的つながりの継続に満足する】、【生活リズムの変化による生活空間・人間関係の縮小を実感する】、【終の住処として覚悟する】の4カテゴリーが抽出された。

(1) 【仕事に伴う精神的・時間的縛りから解放される】

【仕事に伴う精神的・時間的縛りから解放される】ということは、現役時代に担っていた数々の責任感やそれを果たすための組織による時間的・身体的拘束が、退職によって無くなり解放されて、『時間』と『気持ち』と『責任』において自由を得たことを示している。

定年退職期にある男性は、再雇用や再就職をしている男性も含めて全員が、「退職して時間ができた」、「仕事って言っても時間フリーとかゆとりができた」、「やっと自由になれた」などと、仕事でずっと身体的にも心理的にも縛られてきた重荷からの解放感を好ましいものとして受け止めていた。退職によって得た自由には、「暇を持て余す」、「時間的にゆとりができた」という‘時間’と、「気分的にすごく楽になった」、「気持ち的にゆっくり色々考えられる」などの‘精神的’なもの、そして「仕事の責任はなくなった」、「(今は責任ある)そういう立場にはないから」という‘責任’の3側面があり、それぞれ『時間に余裕ができる』、『気持ち的にも自由で楽になる』、『仕事による責任から解放される』といった心情として見出された。責任に追われることなく時間的なゆとりができることで『気持ち的にも自由で楽になる』と、【仕事に伴う精神的・時間的縛りから解放される】日常を実感し、その自由をこれから楽しもうという姿勢で退職後の生活を再スタートさせていた。ただ、研究協力者9名のうち7名が定年退職後に再就職をしており、完全退職直後や現在も就業中の男性はみな「定年退職したばかりで、地域を意識するってまだできない」C氏59歳、「仕事をしているとまだ地域に自分の心が向いていなかった」A氏74歳、など就業中や退職直後は地域に心が向いていない状態を語っていた。

「だからまだ、こう退職したという思いはちょっとしてないのと、ただ責任がなくなったんで、精神的にすごくまあ、こう、気持ち的にゆっくりいろんなことが考えられるかなというのはありますけどね。勤めている時は、ちょっとグループの責任者をしていたんで。」(I氏64歳)。「やっぱり、あれじゃないですかね。精神的に、その余裕が出てくるからじゃないですか。ね、もう、仕事やってる時は現役の時はもうそれ、仕事ばかりだからね。」(E氏67歳)。

(2) 【これまでの人的つながりの継続に満足する】

【これまでの人的つながりの継続に満足する】は、特に定年退職した初期段階では、現役時代の会社の同僚や仲間との付き合いが継続しており、また地元のある男性には地元でのつながりが生きているために、現状の人的なつながりで十分満足している状態をあ

らわしている。完全退職した後もしばらくは、「会社とのつながりが残っている」、「会社メンバーの方が関わりが深い」など、現役時代の仕事仲間や同僚との交流が退職後の男性の主な友人的つながりで生きており、そのつながりが濃いうちは、『現役時代の仲間との関わりで満たされる』状態であった。特に地方都市においては「地元でのつながりがもあって地域との溝は感じない」、「田舎に帰れば声かけてもらえる」など『地元での元々のつながりが続いている』ことが多く、こうした現役時代の仲間や住んでいる地元での知り合いがいることによって、「あまり寂しいとかはない」や「田舎の方で半分暮らしているのだから不自由は感じない」など『これまでの関わりに不自由さを感じていない』、【これまでの人的つながりの継続に満足する】時期が退職後にはあることが明らかになった。『これまでの関わりに不自由さを感じていない』時期にある退職後の男性は、「今は直接周りに関わらなくても生活できる」、「(地域活動は) 必要になったら自分から求めていくかな」など、まだ地域活動への参加は視野がなく、新しいつながりをあえて求めていく必要性を感じていない状態であった。

「田舎に家があるもんですから、大体知った人…知った人ばかりですから。田舎ですから。生まれ育ったところですから、結構知った人がおるから、うん。」(I氏 64歳)。「会社に勤めてれば、そちらのメンバーの方の関わりが濃いですから。隣の人よりもね、顔合わせる時間も多し。」(C氏 59歳)。

(3) 【生活リズムの変化による生活空間・人間関係の縮小を実感する】

現役時代の仲間との関わりや地元での元々のつながりは、時間の経過と共に少しずつ変化していき、変化と共に徐々に【生活リズムの変化による生活空間・人間関係の縮小を実感する】ようになっていくことが示唆された。【生活リズムの変化による生活空間・人間関係の縮小を実感する】とは、退職後の活動パターンが日中中心へと移行することによって、現役時代の友人との交流を維持するための行動範囲や狭まってくることで、それまで維持してきた人間関係が徐々に疎遠になっていく変化を感じていくことである。

特に首都圏在住の男性からは、「1 回うちに入ると夜出掛けることがおっくうになる」、「昼間飲むならいつでもいくけどね。明るいうちに帰れるから」に代表されるように、徐々に『日中中心の活動パターンへと移行していく』ようになり、現役時代の付き合いの維持に必要な行動範囲や行動時間が縮小していくことが窺えた。行動する範囲や時間の縮小は、結果として「行動範囲が狭くなってくる、限定されてくる」といった『現役時代の居場所からの物理的隔たりを感じる』こととなり、定年退職期の男性は、「会社の友達

はどんどん減っていく」「新しい友達はいない」ことを実感し、退職後の生活上の変化として『現役時代のつながりが徐々に減っていく』現実の変化を認識するようになっていた。

「やっぱり、会社の仲間っていうのは近くに住んでないじゃないですか。だから、どんどん遠のいていきますね。会社の友達はやっぱりどんどん減っていきますよね。シフトも会社よりもね、地域の方になっていきますよね。」(A氏 74歳)。

(4) 【終の住処として覚悟する】

【終の住処として覚悟する】ということは、今までの生活の場であった住まいに対して、‘ここ’という限定した特別な意味合いをもつ場所として認識し、そこに自分の人生を沿わせる覚悟を決める心情である。

徐々に縮小していく退職前のつながりを実感したとき、男性は「ここに住む以上」や「何かなければここに居るんだなと思った」など‘ここ’という場所を強く意識するようになってきて、『「ここ」という居住する場所を自覚する』ようになっていく心情が語られた。そして、「ここで生きていくんだな」、「ずっとここに居ることになる」というように自分の人生と重ね合わせて住まいの場所のもつ意味を認識し、『今後ずっと「ここ」にいるという思いを抱く』という覚悟へと至っていたと言える。そして、今居住している場所に対して【終の住処として覚悟する】ことが、その後の長い高齢期の地域生活における地域とのつながりの必要性を意識させるきっかけのひとつとなっていた。

「われわれは特に、その、どうせまた引越りするんだとか、ここにずーっと住んでるわけじゃないと思うとね。そういう点では、ここに住まいを構えてからは、あ、俺はもうずーっとここにいるんだな、何かなければここに居るんだからということになると、やっぱり町内の人、どういう人が住んでるんだろうとか、どういう人がいるんだろうとかいうことになると、町内会が一番手っ取り早いよね。」(B氏 69歳)。

2) 地域活動へ踏み出す契機：【必要とされている自分を実感する】

地域活動に対する態度で見出されたように、男性は、地域との関わりに対してどちらかというと消極的で受動的な姿勢であり、意識の上では地域に貢献しなくてはと考えていても、自らの積極的な行動には結び付いていなかった。その地域活動に対する揺れ動く態度に働きかけて、地域活動への一步を踏み出すきっかけとして大きく影響を及ぼす要因が、【必要

とされている自分を実感する】ことであつた。【必要とされている自分を実感する】ことは、【自己の存在価値を模索する】態度を内在して地域活動への関わりを探っている定年退職後の男性が、退職によって見失った‘役に立つ自分’の再建を模索する過程で、自分以外の他者から依頼や誘いを受けることによって、自分が必要とされている存在であることを認識できることを表している。

『他者からの干渉により参加の一步を踏み出せる』や『周りから求められて期待がわかれば動ける』という、なかなか地域との接点をつかむタイミングやきっかけが作れずにいた退職後の男性が、家族や近隣のひとなどの‘他者からの干渉’による後押しによって第一歩が踏み出せている現状が明らかになった。他者からのアプローチによって、地域が‘自分’を必要としている状況を確認し、自分の役割や居場所があることに安心感を得て行動に移すという、男性の役割遂行的な行動の特徴が見出された。

「何か期待されることがあるんかなっていうふうに考えると、今度、自分にできることは何かなって話じゃないですか、自治会役員の話があつたら受けるかも分んないすね。まあ、周りじゃなくても困ってりゃ、役に立つんだつたら、そりゃやりますよね。ただし、自分から買って出るってことは…。」(C氏 59歳)。

「自分の方から入るのはどうかな…。求められれば何かあるんかなって思ったりするんですが。(話がきたら) 役員やつてもいいかなという気はしますけどね。」(F氏 64歳)。

3) 地域活動を通して獲得するもの：【社会的な自己価値の在る場を獲得する】

地域活動に対して複雑な態度を抱える定年退職期にある男性が、【必要とされている自分を実感する】ことを契機に地域活動と関わりをもった結果として、【社会的な自己価値の在る場を獲得する】ようになっていた。【社会的な自己価値の在る場を獲得する】とは、当事者として地域の現実に触れ、他者と交流し互いに認め合うことを通して、自分がその場に属している、一員となっていることを実感し、職場で得ていた自己価値を地域の中で新しく見出せるという帰結であつた。

他者からの後押しや、自分を求める状況に対応する形で参加のきっかけをつかんでいる地域活動に対して、男性は、「やるからにはほとんど責任は果たさなきゃと思ってしまう」D氏 71歳、「一度関わると責任感が生まれてくるんですよ」I氏 64歳、など責任感をもって遂行していた。そしてその結果、「(地域に関わることで) 現実を感じるんです」D氏 71歳、「(地域に関わる仕事をしているおかげで) 退職後も地域に自分の居場所があるんです」I氏 64歳、などの言葉に現れているように、『地域に属する当事者としての現実を実感する』ことで、

『コミュニティの一員としての意識が生まれる』意識の変容がみられていた。定年退職期にある男性は、地域生活を送りながら【自己の存在価値を模索する】存在でもあるを行っているが、地域活動への参加は、そんな男性に対して地域の中で【社会的な自己価値の在る場を獲得する】契機となっていたことが示唆された。

「うん、意識が、気持ちが変わるっていうのは思わなかった。うんとね、地域に、あの、何が見えてきたって言うんじゃないくて、見えてきたんじゃないくて、こっちが見るって言う感じが。意識の中に入ってくる。それとは逆に、向こうから（自分を）見ている人がいる。「見られているな」っていうのは驚きました。……役員になることで、この歴史とか流れっていうものを、一気に取り込まれちゃったっていうところ、あると思いますよ。知るっていうより、渦中に入っちゃうっていう。」（D氏 71 歳）。

一方、地域活動に関わっていない男性も、今を「まずは自分の力や引出しを広げる時間」C氏 59 歳、「地域の中で存在感を発揮しようと思ったら、一番いいのは特技をもつこと」F氏 64 歳、と考えて、目的意識を持ちながら趣味や関心事の充実に努めていた。そして、いずれは地域活動への関わることを視野に入れて、‘自己の存在価値’を示すことができる関わりを模索していた。

3. 定年退職期にある男性の地域活動に対する態度とその関連要因

予備研究の目的であった定年退職期にある男性の「地域活動に対する態度」3 カテゴリーと、その態度に関連する要因 6 カテゴリーの関連を〔図 2〕に示した。

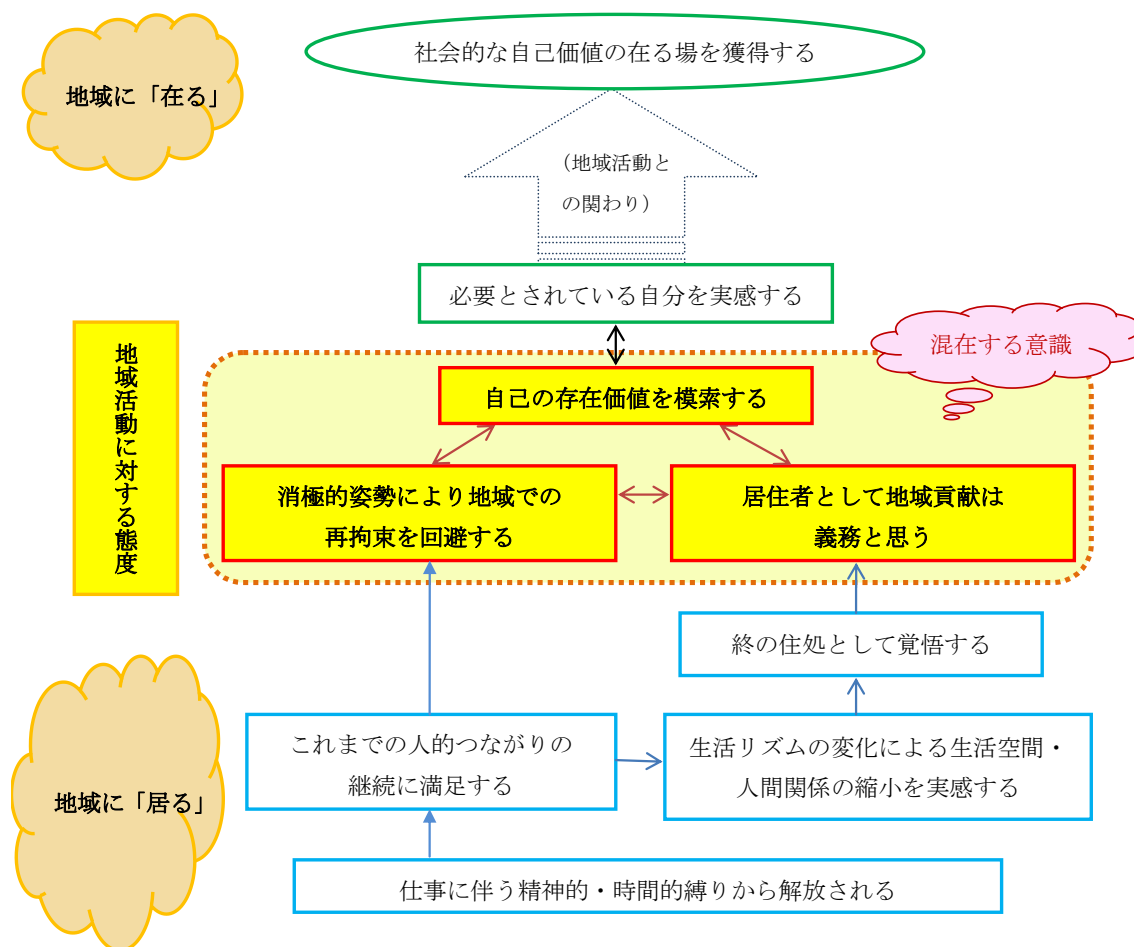


図 2 定年退職期にある男性の地域活動に対する態度とその関連要因

1) 地域活動に対する態度

定年退職期にある男性の地域活動に対する態度を表す 3 カテゴリー【消極的姿勢により地域での再拘束を回避する】、【居住者として地域貢献は義務と思う】、【自己の存在価値を模索する】は、定年退職期にある男性個々の中で混在した態度として同居している。地域活動に対して後ろ向きな【消極的姿勢により地域での再拘束を回避する】態度と、‘しなけれ

ばならない’ という自発的な【居住者として地域貢献は義務と思う】態度は、ある意味互いに両極の態度である。このアンビバレントな態度にどちらかの方向性を持たせるキーとして【自己の存在価値を模索する】態度があり、定年退職期にある男性は、地域を自己の存在価値を見出す場のひとつとして捉えて、地域との距離や関わり方を模索していた。

2) 関連要因

【仕事に伴う精神的・時間的縛りから解放される】、【これまでの人的つながりの継続に満足する】、【生活リズムの変化による生活空間・人間関係の縮小を実感する】、【終の住処として覚悟する】の4カテゴリーは、「地域活動に対する態度」を形づくる心情的要因であり背景となる。根底になるのは、退職後の【仕事に伴う精神的・時間的縛りから解放される】要因である。この解放感や自由をもとにどのように退職後の生活を過ごしていくか、という時に、【これまでの人的つながりの継続に満足する】人は、その時点で不自由さがいないために、あえて積極的に地域につながりを築く必要性を感じず、「地域活動に対する態度」の【消極的姿勢により地域での再拘束を回避する】態度を強化する要因となる。しかし、退職後の時間的経過と共に、男性は【生活リズムの変化による生活空間・人間関係の縮小を実感する】ことで、人的つながりの現状に不安や不自由さを感じるに至る。そしてこの限定されてくる活動空間や人間関係の移り変わりから【終の住処として覚悟する】ようになる。そして、その覚悟によってそれまでアクセスを消極的な形で回避してきた地域に対して、居住者としての義務感をより感じ強めていくと推察する。この4カテゴリーの心情的要因の段階では、地域は、定年退職後の男性にとって身体的な意味合いを強く含む「居る」という体の置きどころとしての物理的な場所として認識であると言える。

しかし、こうした心情の変化は「地域活動に対する態度」に影響を与えていき、その後地域活動に接触していく者と、あるいは内面の葛藤状態のまま行動には移さずに地域社会に入らない選択をする者とをつくっていく。そして、地域活動への接触に影響を与える要因として【必要とされている自分を実感する】ことが重要な契機となっていた。【必要とされている自分を実感する】ことによって地域活動と関わりを持った人は、地域活動を介した他者との交流や相互作用の中から、【社会的な自己価値の在る場を獲得する】に至っていく。この【社会的な自己価値の在る場を獲得する】段階において、地域への意識は、以前の身体的に「居る」という物理的場所から、自分の存在を確認できる「在る」という実在的場所へと、意識のうえでより自分と深く結びついた場として捉えるように変化していた。

しかし、この【必要とされている自分を実感する】ことで地域活動と関わり、その帰結として【社会的な自己価値の在る場を獲得する】に至る過程と男性の思いについては、予備研究においては明確にできていない。

Ⅲ. 考察

1. 退職後の生活リズムの変化がもたらす地域への意識

退職後、時間経過と共に現役時代の居場所・つながりに物理的・心理的な隔たりが生じ、疎遠感と共に、居住する「ここ」という場所を身近に自覚することが地域との関わりのうえで大きく影響していた。男性高齢者の“縁”構造の変化については、「夫婦の結びつきの増大」、「社縁・職縁の縮小」、「地縁の拡大」の3傾向が就業形態の別を問わず共通してあると言われている（奥山,1991）。本予備研究においても、退職直後の人間関係の中心である職場仲間とのつながりは年数を経るにつれて薄まり、そのつながりを住んでいる地域の中に見い出そうとする男性の心理的な変化がみられた。職業関係の友人や人間関係を維持している退職直後は、そのつながりによりあまり寂しさや交流関係に不自由さを感じないが、少しずつ生活基盤が家庭中心へと移行するに従って、活動時間や活動範囲にも変化が見られるようになる。在宅で過ごす時間は40歳代よりも60歳代、60歳代よりも70歳代と明らかに多くなっていき、反比例して移動することにかかる時間は高年齢になるに伴い減少していく（奥山,1991）。体力的な要因もあると思われるが、職場仲間とは居住地域が離れていることも多く、会うためには互いが時間をかけて出掛けていくことが必要になる。しかし、退職後は家庭内での役割を期待されたり、付き合い等による夜の会合の機会も減少したりすることで、彼らの活動時間帯は日中中心となり、夜間は在宅することが基本生活リズムになっていったと考えられる。現役時代の男性には飲酒を伴う夜の付き合い、いわゆる‘会合’も多く、夜の時間帯での交流や‘会合’の場が、男性にとって気兼ねない話しや本音を語れる貴重な機会になっていたと推察できる。研究者も、本インタビューの終了後、数名の研究協力者から「これから（酒が入ってから）が本番でしょう。本音がどんどん出てくるよ。」と冗談交じりに言われている。活動時間が日中へとシフトしていくと、男性はわざわざ遠距離同士が集う理由を作りにくくなり、徐々に互いに足が遠のいていくのではないかと考えられる。

このように、夜間外出の減少と共に、現役時代の仲間との交流機会も自然と少なくなり、

つながりを感じて安定していられた元居場所からの隔たりを感じるようになっていく。その時に、ふと自身の足元を見直した時に、自分がどこにいるのか、どこを拠点とした生活になっているのかに気付き、今自分の住んでいる‘ここ’を自覚し、人間関係や社会の中での自分の居場所を移行していくことの必要性を実感していくのだと考える。

男性の‘縁’構造が退職を機に変化していくことや、退職後に地域とのつながりを構築していくことの必要性については多くの研究や調査により明らかであるが（西村,1993,1997. 内閣府,2007）、何故退職後の男性が地域とのつながりを考え、求めるようになるのかという原因・要因について述べている研究は見当たらず、予備研究における【生活リズムの変化による生活空間・人間関係の縮小を実感する】ことで【終の住処として覚悟する】という内的な強い動機づけが、職場でのつながりから地域とのつながりへと意識とニーズを移行させていくきっかけになっているという結果は、新しい示唆になると考える。

2. 男性と地域をつなぐ外的アプローチの必要性

定年退職後の男性が地域活動と接点を作るためには、家族や地域の人からの外的アプローチが必要であり、自分が他者や地域から求められている、という自己価値や役割の認識が得られないとなかなか行動をおこせない男性の特徴が見出された。上原ら（2007）は、男性の保健事業への参加を促す時のアプローチのコツとして、‘あなたの力が必要なんです’的なアプローチ’は効果があると言っており、男性は必要と認められると意外と動き出しやすいこと、また、男性は‘目的を決めて邁進するため、曖昧さを受入れにくい’という特徴があると述べている。

予備研究においても、‘期待され求められれば動きようもある’という一步を踏み出す契機がつかめずにいたが、【必要とされている自分を実感する】ことができた時に地域と関わる一步を踏み出せており、地域という漠然とした状況下において、男性は自分の立ち位置や存在意義を把握しかねて積極的に出ていけないのではないかと考えられる。このことは、男性のそれまでの企業組織における働き方が影響しているのではないかと考える。一般的に、企業組織において働く場合、役職や役割による自由采配等の余地があっても、多くは企業の中で各自決まった業務内容が与えられ、目に見える形での成果や業績を問われながら企業内世界での自分のあり方やスケジュールを個々組み立てていると考えられる。しかし定年退職を迎え、企業内の決められた枠組みが取り払われて、「さあ、24時間、これからの人生を自由に組み立てていきましょう」と求められても、目的を示されない状態では、何を

どうどこから組み立てていったらいいのかわからないのではないだろうか。組織の中で目的・目標を見据えて行動することが日常となっていた男性にとって、自分から地域の中で自分を生かすための目的を見出していくことは難しく、どうしても受動的姿勢になってしまうことも想像に難くない。だから、家族や他者などの外からのアプローチにより、「自分が必要とされている‘目的’」を示してもらうことが必要であり、一方、自分が果たす役割や目的が明確に認識できれば、男性は組織の中で培ってきた能力や知識を活用して「責任感をもって役割を遂行」できるようになるのではないだろうか。私たちは、こうした男性のこれまで企業組織の一員として歩んできた背景や特徴、また彼らが退職後の生活の中で【自己の存在価値を模索する】ために揺れ動いている心情を理解して、【居住者として地域貢献は義務と思う】態度を後押しする形で、地域に出ていけるような支援的なアプローチをしていくことが求められると考える。

3. 地域活動を通して変化する地域への意識：「居る」から「在る」へ

定年退職期にある男性の地域活動に対する態度を明らかにするにあたり、彼らが語った内容を分析していく過程で、地域活動への参加や関わりを通して、定年退職後の男性の「地域」に対する意識にも変化が生じていることが明らかになった。

定年退職直後の時期においては、男性にとって地域は、からだが生る‘住处’あるいは生活している場といった‘物理的な場所’としての意味合いで認識されていた。しかし、地域活動に関わることで新しい人的な交流やネットワークができ、また地域社会の一員としての自分の存在価値を見出すことによって、地域はただ物理的に居るだけの場所ではなく、‘自分の存在が在るところ’、‘心の在処’として実在的な意味を有する場としての認識へと変化していった。このことは、地域に「居る」という状態から、地域に「在る」という意識のうえでの変革が行われ、男性が定年退職によって見失っていた自分の立ち位置を地域の中に見出し、これまでの企業・職域指向型の生活から家族・地域指向型の生活へとシフトしていったこと、また地域に軟着陸できた現れでもあるといえるだろう。

地域活動や社会活動が高齢者に対して、地域・社会における自己の存在や役割の認識を与えること（室屋ら,2006）や、社会に必要とされている自覚を強める（佐藤ら,2002）ことは、多くの研究で指摘されている。また、社会活動が高齢期の幸福感を高めるための重要な一要因であり、特に男性は女性よりも‘安定した居場所がある’ことに幸福感を感じており、そうした主観的幸福感を高めるためにも、高齢者が生活圏内において継続可能な社会的役割

を持つことが大切であることも示唆されている（浜崎ら,2007）。予備研究においても、退職期にある男性が退職後の生活を充実させていくためには、こうした【必要とされている自分を実感する】ことで‘社会的な自己価値’を獲得することの重要性が見出された。高齢者のQOLに関する研究には、主観的幸福感や生きがいなど既存の尺度によって測定した「主観的QOL」や「心理的QOL」を扱った検証型研究が多く（古谷野,2004）、地域活動との関係についても、QOLを高める重要要因として説明変数のひとつとして用いられるものが多かった。こうした高齢者のQOL研究から、地域活動は高齢者のQOLを構成する重要な要因であることが示されており、定年退職後の高齢期を迎える男性を対象に、彼らの地域活動に対する態度およびその影響要因について明らかにした本予備研究は、彼らの視点から帰納的・質的に高齢期のQOLを捉えて明らかにしたものとして意義があると考えられる。

ただ、地域に「在る」という意識へ至った人は、葛藤する地域活動への態度を経て‘地域’の中へと踏み出した男性たちであり、退職直後やこれまでのつながりに不自由を感じていない男性や、地域の中に入っていく必要性を感じながら葛藤状態のまま立ち止まっている男性にとって、地域はまだ「居る」ところであると言えよう。内閣府による国民生活白書（2007）では、ひとびとが求めるつながりは千差万別であるとしつつ、人生の中で継続的な関係が求められるつながりを、生活の依りどころとなる「家族」、幅広い年齢層で活躍していく場となる「地域」、生活を経済面から支える基盤であり就職後は1日の多くの時間を費やす「職場」に重点をおき、この3つを中心に、ひとびとは社会生活を営みつながりを得ていると指摘している。このつながりの枠組みで考えると、定年退職した男性にとって「職場」でのつながりが終焉していく中で、その代わりとなるつながりを求める先は、「家族」と「地域」となることは自然の流れであろう。現代社会のように電子機器が発達した生活においては、ソーシャル・ネットワーク・サービス等のヴァーチャルな世界に居場所を求めるひとがいる可能性もあり、今後こうしたヴァーチャルな世界における居場所へも考察していく必要が出てくるだろう（藤原,2010）が、年代的なことも考慮すると、定年退職した男性の多くは、社会の中でのつながりを「家族」以外には身近な「地域」の中に新しく見出していくことになると思う。特に、一人暮らしのように「家族」としてのつながりが薄い人にとっては、「地域」とのつながりが社会と自分自身とを結びつける大切なつながりとなり、社会的孤立を防止するうえで重要な視点になってくる。

予備研究の結果からも、定年退職期にある男性は、地域活動へ踏み出した人も戸惑っている人も、程度の差はあっても皆職場から離れて一端見失った自分の価値や存在意義を、家庭

以外にも見出そうと模索していることが示唆されている。男性にとって、退職後の新しい生活を築いていくうえで、退職後も社会的な関わりを持ち社会の中での自分という意識を得られることは、退職後男性の高齢期を豊かにし QOL を高めていくためにも欠かせない要素と言えるだろう。社会の中での自分という存在感を得られること、すなわち家庭の他に自分が「在る」と思えるところは、退職後は地域の中に求めていくことになるだろうし、そのためには、男性側からも地域との接触をもつための行動を起こすことが求められる。自ら積極的に地域の中での学習的活動や個人的活動に踏み出せる男性は問題ないだろうが、一方で、地域とのつながりの必要性を感じながらも、地域にも個人的活動にも踏み出せずにいる男性が、地域の中で居場所を見いだせずに孤立化していく危険性が高いと言えよう。こうした潜在する対象者をいかに見出して、孤立化しないように地域の中につながり築いていくアプローチを行っていくか、は団塊世代の定年退職に向けた保健活動の重要な役割のひとつであると考ええる。

4. 人的つながりにおける地域特性

本予備研究で、首都圏と地方都市（A市）に住む定年退職期にある男性を対象に「地域活動に対する態度」について探究した結果、地域からの再拘束を回避したい気持ちと居住者としての地域貢献への義務感の間で揺れ動く混在した意識状況が共通の態度として見出された。しかし、【消極的姿勢により地域での再拘束を回避する】態度においては、「静かに暮らしたい」、「拘束されたくない」などこれからの地域生活をイメージした上での地域への深入り回避意図を示す首都圏在住の男性に対し、地方都市在住の男性は、「近所の人たちは身近すぎて少し抵抗がありますね。自分をあまり人に知られたくない気持ちもあります」という、男性自身の地域での実体験に基づき地域とのつながりが強すぎるがゆえに拘束を厭うという、より地に足のついた理由を提示していた（表2）。どちらも、退職によって得た解放感や自由を満喫するために組織的な責任や束縛を回避したいという気持ちは共通しているが、同じ【消極的姿勢による地域での再拘束を回避する】態度をとる理由において、首都圏と地方都市とでは、在職中からの男性と地域との関係性のあり方によって微妙に差があることが見出された。また、【消極的姿勢による地域での再拘束を回避する】態度に影響を与える関連要因である【これまでの人的つながりの継続に満足する】心情においても、首都圏在住男性は、会社とのつながりの継続を中心に語っていたが、地方都市在住男性には、「田舎に帰れば声かけてもらえるし」、「同級生がいるからあまり寂しくない」など地元との関係が継

続していることを語る人が多くみられた(表3)。

人と人とのつながりは、大都市よりも地方の方が強いことはよく言われている。一山間部地域の高齢男性を対象とした矢野らの研究(2008)では、住み慣れた環境で昔からの知り合いもあり、近所同士交流もあって地域のつながりは強く、自分の存在を知っている人がいることが安心感を持ちやすい状況であると述べている。また、社会的なつながりの強さを示すソーシャル・キャピタル指数では、東京都や大阪府、愛知県などの大都市部は値が相対的に低く、地方部の値が高い傾向があるとのデータもある(内閣府,2002)。

地方部では、もともと地元での人と人とのつながりが強く、退職後も地元に戻れば知人や親族などの濃い付き合いが継続しているところも多い一方で、地元での人的距離が近く自分を知っている‘目’があるだけに、プライバシー的な距離を置きたくなるという心境になるだろうことも理解できる。良くも悪くも地元的な‘目’があって人と人とのつながりを持ちやすい地方部に比べて、大都市部では、他者の‘目’がない分気が楽な半面、職場以外でのつながりは希薄でつながりを持とうとしても容易ではない現状にあると言えるだろう。また、研究協力者の特性とも考えられるが、本予備研究における地方都市の定年退職期にある男性は、地元での人的つながりの他にも退職後も社縁・職縁が比較的長く続いている人が多く、現在の人間関係においてあまり不自由を感じていないようであった。地方の都市は、首都圏のような広域移動を要するほど規模は小さくなく、こじんまりとまとまった規模であり、同市に居れば退職後も比較的会う機会をつくりやすく、社縁・職縁を維持しやすい物理的環境にあることも、【これまでの人的つながりの継続に満足する】心情に影響しているのではないかと考える。

こうした状況より、現役時代の社縁・職縁が切れると周りに知り合いや友人を作りにくい環境にある首都圏の男性の方が、より地域の中で孤立しやすく、つながりを育むためにもより積極的な他者からのアプローチを必要としていると考えられる。

IV. 本研究への示唆

予備研究では、地域とつながる手段としての地域活動に着目し、定年退職期にある男性の「地域活動に対する態度」について内容分析を行い、定年退職期にある男性にみられる「地域活動に対する態度」の特徴を記述することを目的とした。定年退職期にある男性の「地域活動に対する態度」を明らかにすることは、地域社会と関わりをもって社会に貢献したい思

いがあるにも関わらず、実際への活動には結び付いていない人々の地域への態度（内閣府,2009）の解明への一端ともなり、また高齢期に女性よりも社会的な孤立に陥りやすい男性の特性に踏み込む糸口となると考える。そして、予備研究の結果は、退職後の高齢期男性が地域生活を築いていくうえで新たに求められる‘職場以外でのつながり’の構築の過程を明らかにするにあたって、定年退職後の男性の内面を考慮するうえで具体的な示唆となると考える。

そこで、予備研究では、定年退職期にある男性の地域活動に対する態度とその態度に影響を与える関連要因について明らかにするために、定年退職直後から退職後約 5 年前後の男性を対象に、首都圏と地方都市、地域活動の経験がある人となない人とさまざまな属性を交えてインタビューを行った。その結果、明らかになった定年退職期にある男性の地域活動に対する態度は、【消極的姿勢により地域での再拘束を回避する】、【居住者として地域貢献は義務と思う】、【自己の存在価値を模索する】の 3 側面であった。これらの態度は、定年退職期にある男性個々の中で混在した意識として自然に同居しながら揺れ動いていた。しかし自身が地域との関わりを模索する根底には【自己の存在価値を模索する】する態度があり、定年退職期にある男性は、その自己の存在価値を見出す場のひとつとして、地域との距離や関わり方を模索している現状が明らかになった。

そして、地域活動への態度には、退職後の人的つながりへの満足度が大きく影響していること、また、自己の存在価値の模索をしている退職期男性にとって、自分が必要とされている実感が地域活動へと踏み出す重要な後押しになっていることが、定年退職期にある男性が地域の中でつながりを構築していく過程の一端として見出された。定年退職期にある男性の地域活動に対する態度に影響を与える要因は、男性の「地域活動に対する態度」を形づくる、退職後の生活環境の変化に伴う心情的な変遷の過程であり、定年退職期にある男性が職場を離れた新しい居場所を、地域の中で模索しながら築いていくプロセスでもあった。定年退職期の男性にとって‘つながり’とは単なる結びつきに止まらず、そのつながりの中に自分が‘存在している’という‘居場所’としての意味づけを行っており、‘つながり’は、彼らが社会の中で自己価値を感じるための一手段とも言える。そして、地元的な‘目’が少なからずある地方都市在住の男性よりも、社縁・職縁以外の人的なつながりが希薄な首都圏在住の男性の方が、より地域の中で孤立化しやすく、つながりを構築していくための他者からのより積極的なアプローチを必要としている現状も示唆された。

しかし、予備研究で見出されたプロセスは、予備研究の目的である定年退職期にある男性

の「地域活動に対する態度」とその関連要因を明らかにするための分析過程において結果的に見出されたものであり、プロセスそのものに焦点をあてて探究して得られたものではなかった。そのため、揺れ動いている「地域活動に対する態度」が、地域に向いて地域活動と関わりを持ち、社会的な自己価値の在る場を獲得するまでの過程については明らかにされていない。また、研究協力者も首都圏と地方都市から計 9 名と属性や様相も様々であり、見出された内容には研究協力者の属性や特性に影響される部分も多々あると考えられる。

そこで本研究では、予備研究の結果に基づいて、対象者を首都圏在住の定年退職後の男性に焦点を絞り、定年退職後の男性が、職場を離れた後に家庭内以外で新しいつながりを地域の中で築いていく過程における体験や心情の変遷について明らかにすることを通して、予備研究で見出された、定年退職した男性が地域の中で新しいつながりを築いていくプロセスのさらなる精緻化を目指す。特に予備研究で見出された、葛藤する「地域活動に対する態度」が、どのような契機を経て地域活動への参加へと傾き、地域の中でのつながりを獲得していくのか、そして予備研究で示唆された「地域に『在る』」という意識の上での変革とはどういう状態のことなのかについて深めていく。

地域とのつながりを「社会活動」の側面から捉えて、生活満足度や主観的幸福感との関連を探究した研究は多く見られるが、職場関係が中心だった男性に焦点をあて、定年退職を機に生活基盤となる地域とのつながりをどのようにして築いていくのか、そのプロセスや関連する概念を質的に探究した研究は少ない。地域活動への参加を通して定年退職後の男性が地域生活へ移行していく過程については竹之内ら（2013）に見られるが、地域活動を積極的に実施している一組織の活動者を対象とした限定した取組みであった。定年退職後の男性が地域とのつながりを構築していくプロセスを明らかにすることは、彼らが長い退職後の生活を地域の中で自立して心身共に豊かに過ごしていくため、また地域に入り込みにくい高齢期男性の孤立化を予防するための、保健医療専門職による具体的なアプローチ方法や支援プログラムを考えていくうえで貴重な基礎資料となると考える。また、長期的展望として、団塊の世代を中心とした定年退職者の地域活動への参加が活性化することによって、彼らのもつ技術や能力が地域にとっての財産となって生かされ、地域力の向上やソーシャル・キャピタルの醸成に影響を与えると期待できる。本研究では、定年退職した男性が、定年退職後に地域の中で、どのような体験と心情のプロセスを経て、退職によって見失った社会的な自己価値を確認できる居場所を見出していくのかという構造を、地域活動へのアクセス過程や実際の活動経験への語りを通して明らかにすることを目的とする。

第4章 研究方法

本章では、本研究の目的から、研究を進めるうえで用いる理論的前提とその方法論について検討を行う。

I. 本研究の理論的前提

本研究は、定年退職した男性を対象とし、彼らが地域活動という人間集団の中での他者との相互作用を通して、どのように職場以外での新しい生活の基盤を地域の中に創り出していくのか、また定年退職した男性にとっての地域とのつながりにはどのような意味があるのか、という社会的相互作用の過程から生じる「地域とのつながり」という現象と彼ら自身の捉えるその意味に焦点をあてている。そのため、定年退職後の男性と地域という社会との相互作用について、その経験的世界を当事者の解釈から捉えることのできる理論的見地が必要であると考ええる。

そこで、人間を「意味」の世界に住む社会的存在として捉え、主体的人間と社会の相互作用とその変化過程に焦点をあてるシンボリック相互作用論を、本研究における理論的前提とすることとした。

以下に、シンボリック相互作用論の特性と、本研究における理論的前提としての適切性について述べる。

1. シンボリック相互作用論の特性

シンボリック相互作用論 (Symbolic Interactionism) は、1960 年代から 1970 年代の米国において G.H.Mead の考え方をもとに主にシカゴ大学で展開された社会学・社会心理学の一理論的基盤であり、シンボル (象徴) を用いた人間の相互作用過程に注目し、人間が社会的相互作用を通じて自我や意味を主体的に形成すること、意味に基づいて社会行為を積極的に行うことを前提としている。その特徴は、人間のもつ自発性、創造性、積極性、主体性を強調する理論であり、人間を単なる受身の存在ではなく、積極的で活動的な、そして創造的で主体的な存在である捉え方にある。また、人間はシンボル (象徴) をもつ動物であり、シンボルから成る世界、あるいは「意味」の世界に住む存在であることを強調している。「意味」の社会性を強調したのは G.H.Mead の高弟のひとりであり、Mead の思考を社会心理学の主流に引きこみ、シンボリック相互作用論の命名者でもある H.Blumer である。H.

Blumer(1992)は、「意味」とは、人々の相互作用の過程で生じたものであり、すなわち社会的な産物として考えており、社会的相互作用の文脈の中で形成され、人々によってその文脈から引き出されるものであると述べている。こうした前提のもと、シンボリック相互作用論として3つの主要な前提を挙げている。第1の前提は、「人間は、ものごとが自分に対して持つ意味に則って、そのものごとに対して行為する」という、人間は「意味」の世界に住む存在であること、第2の前提は、「ものごとの意味は、個人がその仲間と一緒に参加する社会的相互作用から導き出され発生する」という意味の社会性について、そして第3の前提は、「これらの意味は、個人が自分の出会ったものごとに対処する中で、その個人が用いる解釈の過程によって扱われたり修正されたりする」という、人間は解釈過程を有することで主体的に対処していく、ということである。

シンボリック相互作用論は、社会や現実、自己の解釈は相互作用を通じて行われ、そのため言語やコミュニケーションに依存すると考える理論的見解を持ち (Kathy,2008)、こうした人間の捉え方を前提に、人間が意味やシンボルの「解釈」を通じて主体的存在となることを強調し、人間が主体的存在であるための「解釈過程」に焦点をあてている (船津,1982) のである。

2. シンボリック相互作用論の方法

シンボリック相互作用論は、今世紀初頭の資本主義経済の発展と共に見失われつつあった人間主体のあり方が問われたアメリカ社会、特にシカゴ学派を背景に生みだされているため、社会科学における問題と深く関連しながら登場してきている (船津,1982)。当時の社会科学の方法が量的統計的分析を主とする自然科学的な方法もしくは実証主義的な方法をとっていたのに対し、シンボリック相互作用論はこの手法に相対する形で、より現実接近したアプローチでもって行為者の立場にたってその内的側面を解明する方法を主張している。船津 (1982) は、「操作概念」(Operational Concept)ではなく、「感受概念」(Sensitizing Concept)を用いて柔軟に現実接近し、実験や量的調査、統計的手法ではなく、参加観察やケース・スタディ、質的データの利用を用いて、行為者の意味・シンボル・解釈を取り扱うことが、シンボリック相互作用論の方法であり、こうした手段によってのみ、主体的な人間のあり方を明らかにできると述べている。シンボリック相互作用論のもとでの実証研究においては、行為者にとっての現象の意味を明らかにすること、広範な参与観察とインタビューによるデータ収集が特徴とされている (船津,1982)。

また、Blumer によるシンボリック相互作用論も、人間の行為を出発点として社会を考察する「行為理論」であり、人間行為の主体的、積極的なあり方を、行為者の内的過程の解明を通じて明らかにしようとするものであり、そのために、行為を形成する「行為者の観点」から取り扱うものであると示している。それゆえにシンボリック相互作用論は、人間の内的側面の解明を通じて、「解釈過程」を浮き彫りにする中から人間の主体的なあり方を明らかにすることを目指しており、そのために行為者の立場にたって感受概念を用い、質的データを分析するという方法をもつのである。

3. 本研究でシンボリック相互作用論を理論的前提とすることの適切性

本研究は、定年退職した男性を対象とし、彼らが地域活動という人間集団の中での他者との相互作用を通して、どのように職場以外での新しい生活の基盤を地域の中に創り出していくのか、また定年退職した男性にとっての地域とのつながりにはどのような意味があるのか、という社会的相互作用の過程から生じる「地域とのつながり」という現象と彼ら自身の捉えるその意味に焦点をあてた取り組みである。定年退職後の男性が、地域活動という社会的相互作用の過程から築いていく地域とのつながりに対する主観的な解釈過程と意味を探る研究であり、人間の相互作用に焦点を置き、主観的な意味付与の視点をもって人間の解釈過程から人間の主体的なあり方を明らかにしようとするシンボリック相互作用論を前提とすることは、本研究の理論的前提として妥当であると考えられる。

II. 研究方法の選定

1. グラウンデッド・セオリー・アプローチの背景

Grounded Theory Approach は、米国の社会学者である Glaser と Strauss によって「The Discovery of Grounded Theory (Glaser & Strauss,1967)」の研究プロジェクトを通じて開発され、その後に Glaser(1978)、Strauss(1987)、Strauss & Corbin(1998)らによってさらに方法論上の展開が行われた質的研究方法のひとつである。

グラウンデッド・セオリーは、対照的な 2 つの学派、コロンビア大学の実証主義とシカゴ大学のプラグマティズムおよびフィールド研究を融合させている。グラウンデッド・セオリー・アプローチのもつ認識論的前提、論理、体系的なアプローチは、Glaser がコロンビア大学で量的研究方法論の開発者であるポール・ラザースフェルド(Paul Lazarsfeld)から多

くの影響をうけたものであり、一方 Strauss は質的研究に長い歴史をもつシカゴ学派の伝統を受け継ぎ、グラウンデッド・セオリー・アプローチの概念にプラグマティズム (pragmatism) の哲学を反映させている。Strauss は、人間を社会的勢力の影響を受ける受動的な存在というよりも、各々の生と世界における能動的な主体として捉えており、構造よりもプロセスにこそ人間の存在の最も大きな意味があると考えて、人間はプロセスに従事することで構造をつくり上げるという考えを提唱した。そして、行為の解釈こそが中心課題とした (Kathy,2008)。

これらの着想は、全てプラグマティズム (pragmatism) の哲学から来ており、グラウンデッド・セオリー・アプローチの根底には、シンボリック相互作用論 (Symbolic Interactionism) がある。シンボリック相互作用論は、シンボル (象徴) を用いた人間の相互作用過程に注目し、人間が社会的相互作用を通じて自我や意味を主体的に形成すること、意味に基づいて社会行為を積極的に行うことを前提とした行為理論である。そして、シンボリック相互作用論のもとでの実証研究においては、行為者にとっての現象の意味を明らかにすること、広範な参与観察とインタビューによるデータ収集が特徴とされている (船津,1982)。Strauss による、グラウンデッド・セオリー・アプローチという方法論は、シンボリック相互作用論を理論的背景として生み出され発展してきたと言える。

2. グラウンデッド・セオリー・アプローチの特性

グラウンデッド・セオリー・アプローチは、データそのものに根ざして (grounded) 分析を進め、データから概念を抽出し、概念同士の関係づけによって研究領域に密着した理論 (領域密着理論) を生成しようとする研究方法である。そして、グラウンデッド・セオリーという理論とは、データから抽出した複数の概念 (カテゴリー) を体系的に関係づけた枠組みのことであり、規模の大きな、または抽象度の高い現象の構造とプロセスを把握し、ある状況にある人たちがどう捉えて、どう反応するのか、どのような行為や相互行為や出来事が起こるのかを説明すると共に、今後何が起こるのかを捉えようとするものである (戈木,2006)。Strauss の「相互作用・プロセス・社会変化を理解するために行為者の見地を把握することの必要性を重要視している」(山本,2005) ことは、グラウンデッド・セオリー・アプローチが前述のシカゴ社会学、シンボリック相互作用論を前提に発展してきた方法論であることがわかる。シンボリック相互作用論を基盤とする方法論は、人間と社会におこる相互作用を捉える方法が最も重要であると価値づけており、この基本的な考え方は、グラウ

ンデッド・セオリー・アプローチの理論化に関する言明や基本的分析手順および分析プロセスの理論的根拠となっている。

木下（2013）は、グラウンデッド・セオリーの主要な特性として 5 点挙げている。第一は、グラウンデッド・セオリーはデータに密着した分析から独自の説明概念を作って、それらによって統合的に構成された説明図が分析結果として提示される理論であることにある。グラウンデッド・セオリー・アプローチにおける「概念」とは、データを解釈して得られる仮説的なものであり一定程度の現象の多様性を説明できるものである。また「理論」は説明的な概念によって構成され、説明できる範囲が個別概念よりも広くかつ関連的であり、分析に用いたデータに関する限りという限定つきのものとなる。第二は、継続的比較分析法による質的データを用いた研究で生成されていることである。データに密着した分析であること、分析とデータ収集とを並行して行うこと、この両者をつなぐのが比較法であり特に理論的サンプリングと呼ばれているものである。第三の特性は、グラウンデッド・セオリーは、社会的相互作用（人間と人間の直接的なやりとり）に関係し、人間の行動の説明と予測に有効であることにある。そして、限定性を明確に設定したうえで、その範囲内に関しては、人間の行動の説明と予測に関して十分な内容であり、かつ数量的研究方法を含めた研究方法による結果と比べた時により優れた説明力をもちうる、領域密着理論である。第四には、グラウンデッド・セオリーとは、人間の行動、他者との相互作用の変化を説明できる、いわば動態的な説明理論であることにある。人間の行動は常に多様な影響かにおいて変化していくものであり、類似した社会状況での主要な変化を関連づけて理解できる理論の生成を重視している。そして第五の特性としては、実践的活用を促す理論となることにある。提示された研究結果は、データ収集が行われた現場と同じような社会的な場に戻されて、応用され理論として活用されていくことが求められている。

3. グラウンデッド・セオリー・アプローチの 4 タイプ

グラウンデッド・セオリーは、社会学者の Glaser と Strauss によって「The Discovery of Grounded Theory (Glaser & Strauss,1967)」の研究プロジェクトを通じて開発、紹介され、その後二人の立場や考え方の変化と共に Glaser(1978)、Strauss(1987)、Strauss & Corbin(1998)によって異なる特性をもつ研究方法へと分化していった経緯をもつ。また、日本においても、オリジナルである「The Discovery of Grounded Theory (Glaser & Strauss,1967)」を基にして作られた、木下（1999）による修正版グラウンデッド・セオリ

ー・アプローチ (M-GTA) がある。

基本となるものは Glaser と Strauss によって考案され提唱された、オリジナル版「The Discovery of Grounded Theory (Glaser & Strauss, 1967)」である。本理論は、データを重視した分析から理論生成を促す新しい社会学調査のあり方を提起した画期的な研究方法であったが、実際のデータ収集と分析、とくにコーディング方法に関して十分な説明がないとの課題があった (木下, 2013)。この課題に対して、1990 年に Strauss は Corbin との共著として「Basics of Qualitative Research: Grounded Theory Procedures and Technique (質的研究の基礎)」(Strauss & Corbin 版) を刊行し、一方この著書に対抗して Glaser が 1992 年に「Basics of Grounded Theory Analysis: Emergence vs. Forcing」(Glaser 版) を出版しており、現在グラウンデッド・セオリー・アプローチにはこの 3 種があるとされている。これら 3 つのグラウンデッド・セオリー・アプローチは、似て非なるものであり、それは分析のはじめに行われるデータの切片化の方法にも表れている。Glaser は、細かい切片化を基にした緻密な分析を重視しているのに比べて、Strauss は切片の大きさを各部分のデータの濃厚 (リッチ) さによって変化させることを可能にしている (戈木, 2006)。このデータの分析過程におけるデータの切片化において独自の特性を提唱しているのが、木下 (1999) による修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) である。木下による M-GTA は、オリジナル版における基本特性を継承しながら、より深い解釈を可能にするために独自の分析方法を提示した修正版であり、データ分析過程において切片化の方向での厳密さは求めておらず、むしろ切片化はせずに研究者の問題意識に忠実に、データのコンテキスト (文脈) で捉え、そこに反映されている要因や条件などを丁寧に検討していく方法を提唱している。そして、M-GTA のもうひとつの特徴としてデータの密着した (grounded on data) 分析を行うためのコーディング法において、データの解釈から直接概念を生成する方法に依り、コーディングの手順重視でなく研究者自身における解釈作業に重点をおいており、すなわちより解釈を重視したコーディング法となっている。データと概念の中間に構成要素の段階をおかないことで、より説明力に優れた概念を生成でき、またそうした概念関係によって説得力のあるグラウンデッド・セオリーを提示できると考えて開発されたグラウンデッド・セオリー・アプローチである。

4. 本研究でグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いることの適切性

このように、現在グラウンデッド・セオリー・アプローチは主に 4 つに分化されているが、

どれもがデータの密着した分析から独自の理論を生成する質的研究法であることは共通している。そして分析において、コーディング方法としてのオープン・コーディングと(軸足・)選択的コーディング、基軸となる継続的比較分析、その機能面である理論的サンプリング、分析の終了を判断する基準としての理論的飽和化の5つの側面を満たすことが、グラウンデッド・セオリー・アプローチとして求められる共通特性である。

本研究は、首都圏在住の定年退職した男性であり、かつ元職場以外に社会的な接点を持つ活動を行っている男性という限られた範囲を対象とするものである。そして、彼らが定年退職後に、どのようにして地域の中に社会的な自己価値を確認できる居場所を築いていくのかというプロセスの構造を、彼らのこれまでの社会的相互作用の中で経験してきた体験と心情の語りに密着して分析し明らかにし、理論を構築する取組みである。定年退職後の男性が、彼らが経験してきた社会的な相互作用によって築いていく地域とのつながりという現象を、彼らの主観的な経験の語りというデータに基づいて理論の生成を試みる本研究にとって、「データ→概念→カテゴリー→プロセス(結論)」という分析過程をもち、シンボリック相互作用論を理論的背景にもつグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いることが適しているのではないかと考える。

Ⅲ. 研究方法

1. 研究デザイン

本研究は、グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた質的因子探索型研究デザインとした。

2. 研究協力者

予備研究の結果、定年退職後の男性の中でも、地方都市在住の男性よりも、現役時代の社縁・職縁が切れると周りに知り合いや友人を作りにくい環境にある首都圏の男性の方がより地域の中で孤立化しやすく、つながりを育むためにもより積極的な他者からのアプローチを必要としていることが示唆された。

そこで、以下を研究協力者の選定条件とし、いずれにも該当するものとした。

- 1) 首都圏在住の定年退職後の男性
- 2) 完全退職後から10年以内の男性

3) 家庭以外で、家族以外の他者との交流をともなう活動に継続的に参加している男性

企業等を定年退職した、首都圏に在住する完全退職後約 10 年以内の男性で、家庭以外の地域に継続的に活動する場をもっており、地域での生活や活動、活動に至るまでの経緯や経験、思いについて語ることができる人物を研究協力者の条件とした。予備研究では、退職後約 5 年以内の男性を研究協力者としたが、本研究においては、地域で何かしらの継続的に活動する場を持ち、それなりに地域とのつながりを持っており、その経過や思いが熟成され色濃く語ることができる人という理由から、5 年以内では色濃く語れる人が除外されてしまう可能性を考慮し、研究協力者を完全退職後約 10 年以内の男性と設定した。研究協力者の条件は、分析の結果、必要に応じて、定年退職男性の活動内容や退職後の経過年数など、サンプリングの条件として加えていくこととした。データ収集と分析を行いながら、理論的飽和に至ると言われている 20 名前後を予定した。

3. 研究協力者のリクルート方法

研究協力者を以下の手順により選定した。

- 1) 企業等を定年退職した男性の紹介をうけるために、研究者は、地域の保健師 2 名と企業の元健康管理者 2 名に、「研究への協力をお願い（資料 1）」を渡して研究協力内容を説明し、研究協力依頼者として研究協力を依頼した。
- 2) 研究協力の承諾が得られた地域の保健師と企業の元健康管理者から、実際に企業等を定年退職した男性をそれぞれ 3~4 名、研究協力候補者として抽出してもらい、研究者へ連絡先を伝えて良いという許可を得たうえで、研究協力候補者として紹介を受けた。
- 3) 研究者は、研究協力依頼者から紹介を受けた研究協力候補者に対して、指示された方法で連絡（直接、電話、メールなど）をし、研究協力へのお願いを打診した。研究協力への内諾が得られた場合、研究協力候補者から指示された方法（直接、メール、郵送など）で「研究への協力をお願い（資料 2）」を渡し、説明を行った。
- 4) 研究協力への意思がある場合、直接研究者に電話かメールにて連絡してもらい、インタビュー予定日時と場所を相談のうえで設定した。
- 5) インタビュー実施前に、研究協力候補者に「研究への協力をお願い（資料 2）」と口頭にて研究主旨と内容を説明する。承諾を得られた場合、研究協力候補者と研究者両

者が「研究への協力の同意書（資料3）」2部に署名を行い、双方1部ずつ保管した。

- 6) なお、データ分析の結果や進捗状況に応じて、研究協力候補者の選定条件を吟味し、必要時、重ねて研究協力依頼者を通して研究協力候補者の紹介を受けた。

4. 研究協力の辞退とその方法

- 1) 研究協力者が研究協力の同意した後、研究協力を取り消す場合も想定し、研究への同意確認時に、研究協力の辞退方法についても直接あるいは電話・メールにて説明した。
- 2) 研究協力の辞退にあたっては、研究協力の任意性を保証し、研究協力辞退が精神的な負担とならないように、「研究協力の断わり書（資料4）」を研究者宛てに郵送してもらう形をとった。
- 3) 「研究協力の断わり書（資料4）」に関しては、直接研究協力者に対して研究の主旨等を説明できる場合は、説明時に研究者の宛先を明記した切手貼付済みの封筒と共に手渡す。また、電話あるいはメールでの協力依頼となる研究協力者に対しては、「研究への協力をお願い（資料2）」を郵送する者には返信用封筒と共に一緒に同封した。メール添付の場合は、「研究への協力をお願い（資料2）」のメール送付時に一緒に送付し、辞退時には、「研究協力の断わり書（資料4）」に署名して研究者のメールアドレスに返信してもらった。

5. データ収集期間

2014年2月から2014年6月まで

6. データ収集方法

1) インタビュー

本研究におけるデータは、研究協力者に対するインタビューガイド（資料5）を用いた半構成的インタビューにて収集した。本研究は、定年退職した男性が、定年退職という一大ライフイベントを通して、地域とのつながりがどのように変化していったのか、自身の主体的な生活や活動への取り組みや心情について記述するため、彼らが自由に自分の考えや気持ちを表現し語れることが必要である。そのため、インタビューは、構造化されていないオープンな質問で行い、必要に応じて内容を吟味し、追加の質問をしながら、研究協力者の語りを十分に引き出し、研究者の視野を広げて研究協力者の経験に

近づくことを意図しながら行った。

グラウンデッド・セオリー・アプローチの特徴のひとつに、データ収集と分析が交互に行われる「理論的サンプリング」がある。分析と連動して収集されるデータであり、明らかになりつつある解釈に基づいてその適否を吟味し、解釈を確定するために次のデータ対象の特性を定めてデータ収集を行っていく、この作業を理論的飽和まで継続していく方法である。そのため、本研究では、インタビューごとにインタビュー内容や観察内容の分析を行い、インタビューごとに分析作業も同時に行いながら 10 名前後でベース・データを作成していく。そして、分析によって見えてくる解釈の内容を吟味しながら、次の対象者の特性や人数を探りながら追加データとしてデータ収集を行った。

インタビュー実施の日程および場所は、研究協力者の希望により指定された日時と場所にて、プライバシーに配慮して行った。インタビュー時間は、研究協力者 1 人につき 1 回とし、60 分以内とした。その後、追加の質問や確認のために、電話で確認する場合もある。また、インタビュー内容は、研究協力者の許可を得て、IC レコーダーとメモによりその場で記録を行った。録音内容は、逐語録を作成してデータとした。

2) インタビュー内容

インタビューガイド（資料 5）を用いて、定年退職した男性が、退職後に地域の中に家族以外の新しいつながりを築いていく過程や地域活動と関わりをもつに至った経緯や契機について、そしてその時の経験や思いについてインタビューを実施した。また、研究協力者の現在あるいは過去の勤務状況や職業の概要および研究協力者自身の属性等について、研究協力者の個人フェイスシート（資料 6）に沿って確認した。

7. データ分析方法

本研究は、グラウンデッド・セオリー・アプローチの継続的比較法 (constant comparative methods) を用いた。Strauss & Corbin(1996)は、基礎的な分析手順として、問いを発すること (Asking Questions) と理論的な比較をおこなうこと (Making Theoretical Comparisons) の 2 つの操作が不可欠である。本研究でも、グラウンデッド・セオリー・アプローチの基礎的な分析手順を踏まえて、データと向かい合い、問いを発しながら初回のインタビュー内容を分析し、次のインタビューへと問いと比較を行う手順を踏み、分析とデータ収集を同時に並行させて進めた。そして、データから浮かびあがってくる現象の意味を解釈、コーディングし、概念 (カテゴリー) を見出していき、理論的に比較しながら見出され

た概念間の関係を統合的に記述することで理論をつくった。以下に具体的な手順について述べる。

1) オープンコーディング (Open coding)

オープンコーディング (Open coding) は、データの中からカテゴリー (概念) を見出し、そのカテゴリーの特性と次元 (一般的特性がとりうる多様性の範囲) を発見する段階といわれている (Strauss & Corbin, 1996)。結果データ (逐語録) を繰り返し精読し、語られた文脈から、定年退職後の男性の‘地域活動との関わり’および‘地域とのつながり’について語られている部分を抽出してコードに起こし、コードの示す意味内容の類似性を基にコーディングを行う。この時、データに忠実に、さまざまな可能性について目を向け発想を広げながら、分析の焦点を探るようにしていく。コーディングしたデータは、その類似性に着目してカテゴリー化を行っていく。

2) 軸足コーディング (Axial coding)

軸足コーディング (Axial coding)、オープンコーディングとほぼ同時に進められ、ひとつのカテゴリーとそのカテゴリーの特徴を示す複数のサブカテゴリーとを関連づけて現象を現わしていく段階である。この時には、関連づけを理解しやすくするために、Strauss と Corbin の提唱する「条件 (現象の構造を形成する事情や状況)」、「行為／相互行為 (課題や出来事、問題に対する対象者の戦略的な反応)」、「帰結 (行為／相互行為の結果)」の3要素を参考にし、カテゴリー間の関連やつながりを分類し整理していく。そして、カテゴリー内容や各カテゴリーに影響ある要因については、新たなデータで継続的に比較検討を行いながら分析を行い、生成されたカテゴリーが適切かどうかを常にデータに照らしながら検討を進めていく。

3) 選択的コーディング (Selective coding)

選択的コーディング (Selective coding) は、軸足コーディングでつくられた現象をいくつも集めてカテゴリー間の関係性をみながら上位あるいは中核となるカテゴリーの生成と洗練を行っていく段階であり、この段階を経て、データがより抽象度の高い現象を説明する理論となっていく、統合のための分析である。「定年退職した男性が地域活動を通して地域とのつながりを構築していく」ことに関連して抽出された複数のカテゴリー同士の関連性から、データの中心となる中核カテゴリーを抽出し、見出された中核カテゴリーと関連するカテゴリーを用いて「定年退職した男性が地域活動を通して地域とのつながりを構築していく」ことを説明するストーリーラインを記述する。そ

して、これまでのカテゴリーとその関連性の全体像をまとめて、研究協力者に再確認を行い、最終的な結果として研究協力者が理解できるものであるかを検討していく。

8. データ分析過程における信頼性と妥当性

質的研究における評価基準は一定ではなく、さまざまな基準が用いられている。Strauss と Corbin(2004)は、質的研究の科学性において「検証可能性」、「再現性」、「一般化可能性」といった自然科学における演繹的研究で用いられる評価基準を挙げており、Glaser(1978)は、「適合性 (fitness)」、「説明性 (workability)」、「関連性 (relevance)」、「修正可能性 (modifiability)」という基準を提唱している。そして、Lincoln. Y. S. と Guba. E. C. (1985) は、「信頼性 (trustworthiness)」とその構成要素である「信用可能性 (credibility)」、「転用可能性 (transferability)」、「確認可能性 (confirmability)」、「明解性 (dependability)」を質的研究の厳密性として提唱しており、この内容は、多くの質的研究者に支持されてきている。また、大川 (2005) は、演繹的研究の基準から離れて、「信用可能性 (credibility) : 結果が信じられるものであること」、「説明性 (auditability) : 他の人が、その研究の研究者がたどった‘分析の跡’を追っていくことができること」、「適合性 (fittingness) : 結果がその研究を行った場以外でも‘フィット’していること」という言葉で表現した基準の存在を述べており、これらは、前述の Lincoln. Y. S. と Guba. E. C. (1985) が挙げた「信用可能性 (credibility)」、「転用可能性 (transferability)」、「確認可能性 (confirmability)」と同等の意味合いを持つと考える。

こうした様々な質的研究の評価基準が存在している現状を踏まえたうえで、本研究はグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた理論生成を目的としていることから、本研究における分析過程の信頼性と妥当性は、Glaser(1978)が研究の評価基準として示している「適合性 (fitness)」、「説明性 (workability)」、「関連性 (relevance)」、「修正可能性 (modifiability)」の4側面を用いて検討することとする。

1) 適合性 (fitness) および関連性 (relevance)

カテゴリーがデータと整合性が取れているかについて検討を行った。本研究の分析過程では、データ収集と分析、コード化、コーディングを同時に進行させていくため、理論的サンプリングや、データから導かれるカテゴリーの生成およびカテゴリー間の関連性などについて、定期的に指導教授および質的研究の専門家、地域看護の実践者からのスーパーバイズを受けることで、分析内容の真実性と適合性の確保を行った。

2) 説明性 (workability)

研究テーマおよび元となるデータから、さまざまな分析過程を経て結果の解釈に至る研究の過程が、他の人に適切に提示されることによって判断される。そのために、他の人が本研究の分析の跡をたどれる形での結果の記述が求められる。そして、分析結果の整合性を図り、理論の説明力と精緻化を高めるために、指導教官および質的研究の専門家、地域看護の実践者からのスーパーバイズを受けた。

3) 修正可能性 (modifiability)

グラウンデッド・セオリー・アプローチによる理論は、限られた範囲を対象とした現象の説明であり、その現象は、対象によってまた時々刻々と変化していくため、生成された理論は、対象や場の変化等によって修正されていく動的性質をもっている。修正可能性とは転用可能性と同義であり、文脈から得られた知見が似たような状況や他の似たような条件を有する対象者に転用できるかということを意味する。そのため、研究協力者の背景について詳細に記載すると共に、生成された理論が、本研究の研究協力者以外の人や場所に対してどの程度適応できるのか、を問うていく必要がある。そして、生成された理論の限界や説明力の弱い可変性の部分についても明確にした。

以上1)、2)、3)の信頼性と妥当性を確保するために、Strauss と Corbin(1990,訳本 2004)の示す7つの研究プロセスの適切性の評価基準を用いた。

- (1) 元のサンプリングはどのようになされたのか？その基準は何か？
- (2) どのような主要なカテゴリーが得られたか？
- (3) 主要なカテゴリーが示すものとしてどのようなエピソードや行為があったか？
- (4) どのカテゴリーを用いて理論的サンプリングを進めたのか？理論的サンプリングによって、データが表しているものがカテゴリーになっていることをどのように説明しているか？
- (5) カテゴリー間の関係を示す仮説はどのようなものだったのか？どのような根拠からその仮説はつくられて検証されたか？
- (6) データ内で生じたものの中に、仮説では説明できないようなケースは提示されていたか？そうした矛盾はどのように説明されたのか？仮説は修正されたのか？
- (7) 中核となるカテゴリーは、どのようにして、なぜ、選択されたのか？最終的な分析上の判断は何に基づいて行われたか？

IV. 倫理的配慮

計画書の段階で、聖路加看護大学研究倫理審査委員会の審査（承認番号 13-070）を受けて実施した。倫理的配慮として研究協力者の権利を保証するために、以下の具体的な倫理的な配慮を行った。研究者は、事前に研究協力者に対して、研究参加による利益と不利益について説明し、1～4の倫理的配慮を遵守した。

1) 研究協力者の意思の尊重・権利の保証

研究協力者の自由意思に基づいて行うものであり、研究への参加と辞退の決定、および中途での辞退の表明ができるように依頼書に必要な情報を明記し、インタビューや質問に答えたくない場合には答えなくてもよい事、いつでも辞退の意思を表明できる体制をとる。そして、研究協力者が有する権利について説明し、辞退した場合にも不利益が生じないことを伝える。また、研究協力依頼者からの紹介ということで、研究協力者に圧力がかからないための配慮として、研究協力への参加の可否について研究協力依頼者には伝えないことを約束する。研究協力者には、研究協力に対しての謝礼（2,000円）を用意する。

2) 説明と同意

インタビューを行なう前には、改めて研究協力者に「研究への協力をお願い（資料2）」と口頭にて、具体的に研究の趣旨とインタビュー内容について説明を行う。そして、研究協力者が有する権利を守るための約束を伝え、インタビューデータは研究目的以外には使用しないことや匿名性の保証をし、「研究への協力の同意書（資料3）」を取り交わす。

3) データの取り扱いと匿名性の保持

録音媒体やメモ、逐語録などの収集・生成したデータ全てを、本研究の目的以外には使用しないことを「研究への協力をお願い（資料2）」を用いて説明する。得られたデータは、個人情報を含む箇所を記号化して取り扱う。また、研究協力者に対し、研究結果を学会や研究論文として公表する予定であることを伝える。その場合も匿名性は保持されることを説明する。

4) データの管理

個人情報を含むデータ、および個人情報に関する書類は、鍵のかかる場所で厳重に管理し、研究成果の公表後3年間保管した後に、再生不可な状態にして破棄する。録音内容は、逐語録を起こした後は速やかに消去する。

第5章 結果

本研究は、定年退職した男性が、退職後に地域との関わりを通して地域の中で家族以外のつながりを築いていくプロセスを構成する概念を見出し、概念を体系的に関連づけることで、定年退職した男性が地域とのつながりを構築していく理論を生成することを目的とした。首都圏にある大手企業を定年退職した男性 15 名へのインタビューにより、退職後の地域との関わりについての語りを得て、グラウンデッド・セオリー・アプローチの手法を用いて分析を行った。

I. 研究協力者の概要

本研究の研究協力者は、首都圏一都三県内に在住している、現在家族以外の他者との交流を伴う活動を継続的に行っている、企業等を定年退職してから 10 年前後の男性 15 名であった。(表 4)

表 4 研究協力者のデモグラフィック特性

ID	年齢	部署	元職位	完全退職 後年数	住居形態	居住年数	趣味	組織的な地域 活動経験	地域活動の内容	近所付き合い の有無	健康上の 問題
A	66歳	管理	社長・顧問	3年	集合住宅	20年以上	PC、カメラ、山登り、溪流釣り、ゴルフ他	有	マンション管理組合役員	有	有
B	74歳	設計	部長	9年	戸建	44年	陶芸、絵画、日曜大工	有	自治会	有	なし
C	74歳	総務・営業	部長	10年	戸建	40年	ソフトボール部、ゴルフ、トレーニング	有	自治会	有	有
D	74歳	営業	部長、常務	9年	戸建	24年	バイク、自転車、ゴルフ、旅、海	有	地域役員(地域開発)	有	なし
E	74歳	営業	部長	14年	戸建	74年	OV	なし	特になし	有	有
F	74歳	経理	役員	5年	戸建	26年	合唱、詩吟	有	町内会	有	なし
G	74歳	事務系	社長	8年	集合住宅	10年	中国語、散歩、音楽、ゴルフ	なし	特になし	有	有
H	74歳	人事	役員	10年	戸建	27年	農作業、読書、英会話	有	NPO地域統合スポーツ倶楽部他	有	なし
I	78歳	営業	理事	15年	集合住宅	25年	花づくり、音楽鑑賞、読書、水泳	なし	マンション理事会2回	少し有	なし
J	68歳	経理	常務	3年	戸建	28年	野菜作り、釣り、自転車	なし	特になし	有	有
K	73歳	営業	社員	11年	戸建	58年	ドライブ、ゴルフ	有	寺院の役員、大学杉並会	なし	有
L	70歳	営業	社員	6年	戸建	45年	テニス、スキー	有	ソフトボール、自治会役員	有	有
M	77歳	営業	理事、顧問 (顧問中)		戸建	40年	カメラ、ゴルフ、畑	なし	特になし	なし	有
N	65歳	営業	支店長	4年	集合住宅	24年	ゴルフ	なし	マンション委員	なし	なし
O	68歳	管理	部長、専務	5年	集合住宅	34年	読書、ウォーキング、ゴルフ他	なし	周辺の掃除	少し有	なし

研究協力者は、研究者が研究協力者の紹介を依頼して承諾の得られた、企業の元健康管理
者 2 名と地域の保健師 1 名の研究協力依頼者から、上記の条件に合致した研究協力者をそ
れぞれ 1~3 名、計 7 名紹介を受け、研究協力者の了承を得てデータ収集を進めた。その後、
地域活動や趣味の内容、家族構成、生活形態などで条件を絞り込んで、計 15 名のデータ収
集および分析を行った。

15 名の基礎的なデモグラフィック特性は表 4 に示すとおりである。首都圏（一都三県）
に在住する定年退職を迎えた 65 歳から 78 歳で平均年齢は 77.2 歳であり、14 名が既婚、1
名が未婚であった。既婚者 14 名は、全員妻との同居あるいは妻、子どもとの同居であり、
未婚者 1 名は独居であった。15 名とも首都圏にある大手企業に所属していた定年退職者で
あり、勤務中の部署は営業が 7 名と多く、職位は 4 名が部長職、8 名が役員と、企業内で管
理的立場にある者が多かった。また、15 名共年金あるいは個人資産による生計であったが、
経済的には安定している男性たちであった。退職後に、組織的な地域活動経験のある男性は
8 名、ない男性は 7 名であり、活動の内訳は町内会役員やマンション管理組合、地域のスポ
ーツ活動、大学時代の同窓会等多岐に亘っており、地域活動に関わっていない男性は 2 名
と少なかった。また、15 名全員が何かしらの趣味を持っていた。住宅形態は、戸建 10 名、
マンション 5 名、あいさつを交わす以上の近所づきあいの有無に関しては、10 名が「あり」、
2 名が「少しあり」、3 名が「なし」と答えていた。15 名中 1 名が未婚、独居の男性であ
ったが、このデータから他の分析結果に大きく影響を与える新しい知見は確認できず、他の 14
名のデータ分析結果と同様であったため、このデータも本研究の分析対象として含めるこ
ととした。

Ⅱ. 定年退職した男性が地域とのつながりを構築していく過程を構成するカテゴリー

本研究の結果、定年退職した男性が地域とのつながりを構築していく過程を構成するカ
テゴリーとして、コアカテゴリー『地域の中で共有できる視点を持つ』と、3 つの主要カ
テゴリー《自己の存在価値を模索する》、《個人として在る》、《地域と共に在る》と、9 カ
テゴリー、22 サブカテゴリーが抽出された。（表 5）

文中では、コアカテゴリー『 』、主要カテゴリー《 》、カテゴリー【 】、サブカテ
グリー< >、コード「 」で示している。

表5 定年退職した男性が地域とのつながりを構築していく過程を構成するカテゴリー

『コアカテゴリー』	《主要カテゴリー》	【カテゴリー】	＜サブカテゴリー＞
地域の中で共有できる視点を持つ	自己の存在価値を模索する	今のところ安定した生活基盤がある	家庭が安定している
			老化に伴う健康上の問題・介護への不安を感じている
		自己の存在価値が脅かされる	退職によって自己の存在価値が揺らぐ
			活動範囲の縮小に伴い人的交流機会も減少する
			自分を表現できるテーマを探す
		地域との接点づくりに消極的である	日常での話題に乏しい
			居住環境の変化と住人の変動が著しい
			日常での近所付き合いが希薄である
			地元意識と古い地域組織体質が残っており馴染みにくい
	個人として在る	職務経験で培った物事への対処術を生かして関わる	酒の席を通して関係性を深める
			やると決めたことに徹底して取り組む
		自己への誇りを再獲得する	現役時代に関心事の種をまいて育ておく
			語れる自分を見出す
	地域と共に在る	個人的な関心事の空間の中で満足する	自分を高める時間を満喫している
			今は不自由さを感じていない
			地域に住む者同士顔を知る
		自分が生活者であることを実感する	知らなかった地域の現状を知る
			終の住処として覚悟を決める
		地域の中で共有できる視点をもつ	生活に密着した体験を共有する
			地域のことが気になる
		住民意識が自己の一部となる	住民としての役割意識が芽生える
			地域貢献が自分の中で自然のこととなる

定年退職した男性にとって地域とのつながりが構築されていくということとは、『地域の中で共有できる視点を持つ』ことによって、『地域と共に在る』状態に目覚めていく過程であることが見出された。この過程は、退職によって自己の存在価値が揺らぐ男性が、『自己の存在価値を模索する』中で、趣味などの関心事の空間で『個人として在る』状態を作る一方で、地域生活や地域組織活動と関わることを通して自己の居場所を地域の中に見出していき、住民として『地域と共に在る』意識へと変化していく、心の在り方のダイナミクスを表すものであった。(図3)

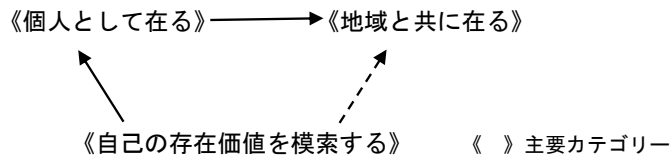


図3 主要カテゴリー同士の構造

本章では、定年退職した首都圏の男性が地域とのつながりを築いていく過程において、男性が《自己の存在価値を模索する》という自分の居場所を探す不安定な状態から、《個人として在る》状態を取戻し、あるいは、または同時に自分が《地域と共に在る》存在へと意識が変化していくプロセスについて記述する。

1. 《自己の存在価値を模索する》

《自己の存在価値を模索する》とは、定年退職によって【自己の存在価値が脅かされる】状態にある男性が、【今のところ安定した生活基盤がある】現状において、首都圏の地域特性によって【地域との接点づくりに消極的である】ため、【男性ならではの物事への対処術を用いて関わる】ことで、退職することによって揺らいだ自己の存在価値を模索することである。（図4）（表6）

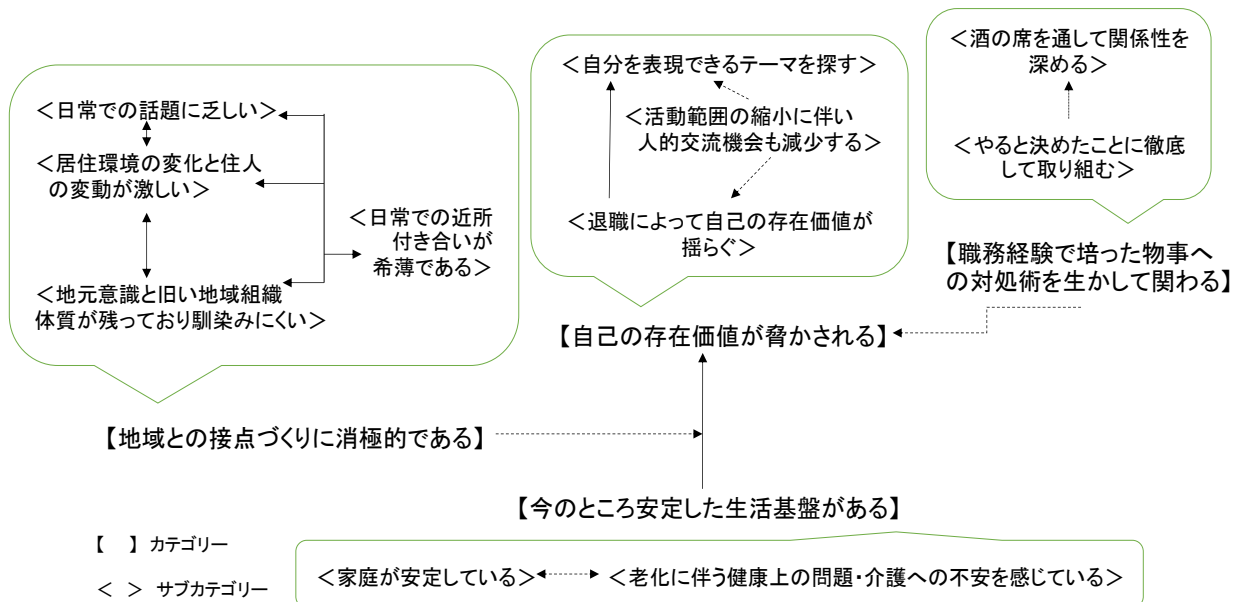


図4 主要カテゴリー《自己の存在価値を模索する》の構造

表6 定年退職した男性が地域とのつながりを構築していく過程《自己の存在価値を模索する》を構成するカテゴリー

主要カテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	コード
自己の存在価値を模索する	今のところ安定した生活基盤がある	家庭が安定している	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが同学年だったり子どもを通じての交流があった。 ・(活動を辞める時は)健康上の問題と親の面倒を見なきゃいけなくなった状況も結構ある。 ・二人で元気でないとも必ず崩れる。夫婦が元気であるということが基本。 ・家族の健康は大事。今こうやって動いていられるのは、やっぱり健康だからであって片っぽが寝こんだら、ゴルフもできなくなる。 ・これだけできるのも、本当に健康だし、女房も健康だからできることだし。
		老化に伴う健康上の問題・介護への不安を感じている	<ul style="list-style-type: none"> ・寂しくも何ともない。心配なのは体の問題だけ。これはもう確実に衰えてくるんで。 ・腰痛になって、止めたらもうそれだけで人付き合い少なくなった。きつかけは病気だね。 ・老後呆けない、老後を楽しむためにも、僕は社会活動や創造的活動をやらないと思う。 ・僕ははまだ元気でいいけど、年取って寝たきりになってる人とか、大変だと思う。 ・医者との付き合いは切り離せないんだろうな、リタイアした人は。健康に関しては敏感になる。
	自己の存在価値が脅かされる	退職によって自己の存在価値が揺らぐ	<ul style="list-style-type: none"> ・人の役に少しは役に立てるというのはそれくらい(マンションの理事長をする)しかない。何もしてないし、仕事してないから。 ・下のやつから、「〇さんは定年になったら何するんですか。毎日休みでしよう。何もやることなくて困るんじゃないですか。」とよくいわれる。昔から無趣味なんです。 ・(退職した後)どうしようと思った。正直な話。もう根っからの会社人間だから何もすることなくて。「〇〇さん、今何やってる？」って聞いてみたり。ものすごく気になって、皆に聞いて回ったことある。 ・会社仲間が集まる時は、あいつどうしてるって話になる。仲間の中で、自分のこともたまたま話題になるわけです。何もしていないと存在価値がなくなってくるような気がする。
		活動範囲の縮小に伴い人的交流機会も減少する	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の人たちとの交流は趣味を通じてくらい。近所じゃなくて市役所の近くの市内で。(市外に出るとか)それはない、続かないから。 ・仕事している時は、職場の人とのつながりが核になって色々な人と付き合っていたが、無くなるとそういう付き合いはすごく減ってくる。 ・変な話だがそれ(名目)がないと外へ出ていく機会がない。会社の付き合いがあるから電車に乗ってどこかへ行ける。自分一人だけで新宿行ってみる気には全然ならない。 ・会社の(仲間)は、遠くなったので難しい。こちらから千葉へ行くとすると、車でも電車でも行くのが混んで面倒くさい。今はもう無理、遠くは行きたくない。
		自分を表現できるテーマを探す	<ul style="list-style-type: none"> ・多分陶芸も絵もやってなかったら、コミュニケーションを取る場ってないと思う。 ・これが先でストンじゃ駄目。ある程度うんちく語れる世界がないと。趣味ってそういうものだ。 ・今野菜作ってます言ったら、じゃ少し分けるよとそんな話もあるわけで、自分の存在価値をその中に見出しているというもある。 ・(地域活動は沢山やっているが)悪い点として腰が据わっていない。あれもやらなくちゃ、これもやらなくちゃと、何となく切迫感とか焦燥感がある。 ・本当はもっと一生の目標になる何かを見つけないと思う。まだ見つかっていない。
	地域との接点づくりに消極的である	日常での話題に乏しい	<ul style="list-style-type: none"> ・男は仕事している間(近所)は会う機会がない。だから全然話も、会って話をすることがない。住んでも用事なし。 ・あそこの病院はどうか、話す時は、もう仕事離れるとそんな話しかない。 ・そこから世間話っていても何話していいかわからない。隣の奥さんと会話しようとしても、今日のおかず何にするとか、そんな話はやらないし。だから「やあ、こんにちは」ってきつと帰る。(話題)ないもん、俺、正直なところ。
		居住環境の変化と住人の変動が著しい	<ul style="list-style-type: none"> ・戸建で住んでる人がどんどん出て行く。今でもどんどん変わってる。だから親しい人少なくなった。 ・地元というのは、そこに自分の土地のある例えば農家とか。そういう人は地域とのつながりは自然に持つだろうけど、僕らはやっぱりよそから行ってるし、よそ者なんです。 ・ここ何年、30年、40年の間に、もう農地がほとんど住宅に変わっている。毎日毎日があまりにも変わってびっくりする。地域がこうどんどん変わっているという。 ・本当に家族というのが、地域というのが、50年じゃなくて40年くらいでばんばん替っている。ほとんど代替わり、どんどん代替わり。
		日常での近所付き合いが希薄である	<ul style="list-style-type: none"> ・個別の家に痛烈に感じるのは、朝庭掃除しなくなったなということ。朝でも夜でもいいんだけど、家の前の掃除をしなくなった。 ・あまり近所、いわゆる向こう三軒両隣という感じの付き合いは出来ていない。アパートでしょっちゅう変わるし、本当に高齢者の終の棲家みたいになっててデイサービスで車が迎えに来るとか、そんな方たちが多いから、所謂向こう三軒両隣の付き合いというのはあまりない。 ・地元の近隣というのは、もう「隣」なんかない。「近」だけ、近所だけ、もう。ちょっと離れるともう他人です。道路一本離れると。
		地元意識と旧い地域組織体質が残っており馴染みにくい	<ul style="list-style-type: none"> ・自治会は、要は守旧派というか流れを変えたくないというのが。だから、これはいいと思ってても、皆がじゃやろうかってなかなかならない。変わりが。そうすると、若い人たちがついてこれなくなっちゃう。昔から地域にいる人が強んだ。(45年経っても)やっぱり外様なの。 ・輪番制だったり頼み込んでやってもらうとか。言ってもどうせその通りにならないしと。ただ言われたことを働くようなのは面白くないというもある。そういう意味でモチベーションって全然難しい。 ・自治会関係は、結構歴史がある。僕は、自治会の歴史から見ると浅いんだ、入ったのは。自分のところにいる人はもうすごい縄張り張っている。僕はよそ者に見られているから。 ・土地の自治会の役員なんかほとんどが地元の人です。そういうのを見ると、我々サラリーマンというのは自治会にも馴染めないって、そういう先入観持つ人もいるみたい。
	職務経験で培った物事への対処術を生かして関わる	酒の席を通して関係性を深める	<ul style="list-style-type: none"> ・やっぱり酒を飲んだからかな。それは、酒があった方が話しやすい。酒を飲みながらっていうのはきつかけなんだ。じゃないと集まらないでしょ。 ・(酒飲むと)地が出るもの。飲むと本音が出てきますから、恰好いいところばかりじゃないから。 ・「ちょっとみんなで会いましょう」とか、そのうち定期的に機会ができる。飲んだりすると何かよろう、例えば「ゴルフやそう」とかなる。 ・ゴルフやった後は飲みにケーションで、飲みに行く。
		やると決めたことに徹底して取り組む	<ul style="list-style-type: none"> ・やっぱり何かやると、ある程度人間だからものにしたいというそれもある。 ・やると中途半端じゃちょっと気が済まないんだ、きつと。やるとどんだんのめり込んじゃって。 ・僕頑固な面があって決めたら結構それを踏襲している。家内に「いい加減にしな」と言われる位。 ・相当の覚悟がないと。中途半端に終わってもいけないし。引き受けたらやっぱり一生懸命やりました。自分が与えられたときは、一生懸命やる、そういう感覚。 ・(持続させていくのは)意識だ。意識を持つのは意地。意地あるよ、それは。すごく持っている。

1) 【今のところ安定した生活基盤がある】

【今のところ安定した生活基盤がある】とは、現時点において家族や自身の健康状態に問題がなく、また家族間が穏やかである＜家庭が安定している＞状態であり、定年退職した男性が退職によって獲得した余暇時間を自由に謳歌できる条件でもある。一方、男性は今は安定した状態であることを認識しており、いずれ訪れるであろう＜老化に伴う健康上の問題・介護への不安を感じている＞状態でもある。

＜家庭が安定している＞とは、子どもは子どもとして、妻は妻としてそれぞれが地域と結びついて生活しており、夫婦および子どもが健康で、家族として円満な状態にあることである。

（活動を辞める時は）健康上がやっぱり多いですよ、一番ね。それと親の面倒を見なきゃいけなくなるとかね、そういうのも結構あるからね。（F氏）

家族の健康は大事、大事。今こうやって動いていられるのは、やっぱり健康だからね。片っぱが寝ちゃったら、ゴルフもうできない。（C氏）

男性が企業就労者であった現役時代、男性には「会社人間 47 年やっているでしょう。そうすると、現役の頃は周り（隣近所）の人と会うなんてこと殆どない。」（J氏）ように、地域といえば家庭であり、寝に帰る場所というくらいの意識しかなかった人が多かった。しかし、男性が会社人間の様に勤務していた期間、その家族である妻や子どもたちが、それぞれの生活の中で地域の人と付き合いをもって存在感を築いてきており、そのつながりと地域に根づいた生活の安定感が、男性が定年退職になって地域を拠点とするようになった後も、子どもや妻を介する形であまり違和感を感じずに地域生活を始められる要因となっていた。「（妻が）周りをもうよく知っているし、繋がっていた。」（J氏）、「電気製品が玄関に置いてあったりするのよ。「動かないんですけど」って。女房が預かってくる。」（A氏）など、特に妻の縁故は、地域に親しい者のいない男性にとっては地域と接点をもつうえでの貴重な情報源、契機ともなっていた。

そして、男性は、自身も妻も病気がなく健康でいることが、退職後自分のやりたいことを自由に満喫できている基盤であることも感じており、夫婦が健康であることを当たり前と

は思わずに、感謝しながら今許されている自由を楽しんでいる姿があった。今回の研究協力者は、多くが管理職まで勤め上げた方々だったこともあり、インタビューにおいて退職後の経済面での不安定要素が聞かれることは特になかったが、好きなことにチャレンジしたり深めたりしようとする心のゆとりが持てるという意味において、家庭の安定には、健康面と共に経済的側面における安定も欠かせないことが読みとれた。

＜老化に伴う健康上の問題・介護への不安を感じている＞とは、今現在自由に活動できている理由が＜家庭が安定している＞ためであることを自覚しているが故に、そのうち老化に伴い生じてくるであろう自身や家族の病気あるいはその介護の可能性を考え、生活基盤が不安定になることへの予期的不安を抱えている状態である。

寂しくも何ともない。心配なのは体の問題だけ。これはもう確実に衰えてくるんで。腰痛になって、止めたらもうそれだけで人付き合い少なくなっちゃった。きっかけは病気だね。(E氏)

近くの斎場でやるっていったって。本当に身内でやってね。だから、誰かが亡くなったって、地域の自分の家を中心に色んな知っている人がいるじゃないですか。町会があって、あそこにこういう人がいたなって…。そのうちポロポロポロと欠けていく感じです。寂しいです。そういうのをすごく感じますよね。特に僕らはまだ元気でいいけど、年取って寝たきりになってる人とか、大変でしょうね。(K氏)

今は特に活動するのに支障のでるような疾患や状況になくとも、男性は、定年退職という年齢を節目とした大きなイベントを体験しており、人生の転換期として年齢的なことを考えるようになっていた。「‘もう〇〇歳だから’って考えないで、例えば目標、死ぬまであと何年あるというふうに考えますとね、それ、その時間何やってやろうかって今も考えています。」(B氏)、「カメラの撮影会の後なんかのいっぱいやってた人間も、一人減り、去年一人死んだり、仲間が。それから病気して飲まなくなったり、来れなくなったりとか、だんだん減りますよ。」(M氏)など、研究協力者のほぼ全員が、現在ある不安は‘健康’あるいは‘老化’であると述べていた。同年代の仲間の動向を肌で感じることで、近い将来やってくる自分や家族の老いのことを考え、いずれは自分が家族の介護をするようになることや、介護をされる自分の姿を思い描き、今の安定した生活が崩れることも予測しつつ、その時が来たときのための心積もりをしながら、今の自由な時間を一生懸命やりたいことに使い、満足できる人生にしようとしていた。

2) 【自己の存在価値が脅かされる】

【自己の存在価値が脅かされる】とは、男性が現役時代に就労を通して獲得してきた社会的な自分の存在価値を退職することによって失い、また会社仲間や取引先との接点が少なくなる等＜活動範囲の縮小に伴い人的交流機会が減少する＞ことで、自分を知っている人や場が減り＜退職によって自己の存在価値が揺らぐ＞ために、新たに自分の存在価値を示すことができる＜自分を表現できるテーマを探す＞状態である。

＜退職によって自己の存在価値が揺らぐ＞とは、男性が現役時代に仕事を通して社会の中で築いてきた自身への自信や誇りといった存在価値が、退職という職場を離れることによって、その自身や誇りの拠りどころを見失い、これからの自分の依って立つところが見出せずに不安になる状態である。

下のやつから、「Kさんは定年になったら何するんですか。だって毎日休みでしょう。何もやることなく困っちゃうじゃないですか（略）。」よくいわれるんですけど、昔から無趣味なんですよ。（K氏）

あのね、（退職した後）どうしようと思った。正直な話ね。もう根っからの会社人間だから。何もすることなくてさ。「〇〇さん、今何やってる？」って聞いてみたり。ものすごく気になってね、皆さんに聞いて回ったことあるの。会社の（仲間が集まる）時は、あいつどうしてるってそういう話になるんです。その仲間の中で、自分のこともたまに話題になるわけですよ。何もしていないと存在価値がなくなってくるような気がするんですよ。そうすると、何かやってなきゃいけないなというところから、まあ飛躍すれば野菜作りみたいなところにつながってくるんだけど。（J氏）

団塊の世代の男性には、高度成長期の時代にあって、自身の全てを仕事一筋に捧げてきた人も多く、そのため現役時代に趣味などの関心事への活動の幅を持たなかった人も少なからずおり、彼らは、特に仕事から離れた退職直後には「昔から無趣味なんですよ」（K氏）、
「その仲間の中で、自分のこともたまに話題になるわけですよ。何もしていないと存在価値がなくなってくるような気がするんですよ。」（J氏）等、自分の存在価値を示せるものが見出せない状態になっていた。そして、定年退職した男性たちは、他の退職した仲間の動向を探りながら自分の置かれている状況を確認し、不安定な状況にあると認識した男性は、「何かやってなきゃいけない」（J氏）の様に新しく自分の存在を示せる事柄を見出す必要性を感じていた。

＜活動範囲の縮小に伴い人的交流機会が減少する＞とは、退職によって仕事上の付き合いがなくなり活動の基盤が家庭になることで、これまで広範囲に亘っていた活動範囲や活動時間が縮小され、目的を持って出歩く機会が減り、自然とこれまでの人的な交流が減っていくことである。

仕事している時は、職場の人とのつながりはこれが核になって結構色んな人と付き合っていたけど、無くなるとね。そういう付き合いはすごく減ってくるね。(G氏)

それがないと外へ出ていく機会がないんですよ。変な話だけど。会社の付き合いがあるから電車に乗ってどこかへ行けるんだよね。自分一人だけで新宿いってみようかっていう気には全然ならないんですよ、俺はね。(J氏)

定年退職することによって、男性は、これまでの仕事上の付き合いから解放されると同時に、目的を持った人との交流機会がガタッと少なくなるために出かける理由も無くなり、活動範囲が徐々に縮小すると共に、人と会って交流したり酒を飲む機会も減ったりする状況があった。「そういう付き合いはすごく減ってくる。」(G氏)や「それがないと外に出ていく機会がないんですよ。」(J氏)の様に、人的な交流の大部分が仕事上での付き合いにあった男性にとって、仕事抜きでの付き合いの幅が非常に薄いため、退職によって付き合う範囲や内容を自分で選択できるようになっても、反対に、出かける理由や目的がはっきり見出せずに出掛けにくくなり、活動範囲が縮小して家に籠りやすくなる傾向が窺えた。

＜自分を表現できるテーマを探す＞とは、仕事の中に生きがいと自分の存在価値を見出し、その業績や肩書などが自分自身をアピールする重要なファクターであった男性が、退職によってその肩書きにあまり意味がなくなった時に、人に自分をアピールできるものが見出せず、新たに自分の存在感を示せる事柄を探すことである。

今、野菜作ってます言ったら、じゃ、少し分けるよとそんな話もあるわけだね。自分の存在価値をその中に見出しているというのもあるんだよね。(J氏)

本当はもっと一生の目標になることという感じがな。何かそれを見つけないかと思うんですね。まだ見つかっていない。一生の目標を探したいなと。一人できちっとやれることを何かやらなきゃなと思っているんだよね。泰然自若じゃないけど、内省的にならなくちゃいけないと思う。(H氏)

現役時代から、趣味などの形で仕事以外の関心事を持っていた男性は、退職後にその趣味を深めたり、別の活動への一歩を踏み出す下地を持ったりしたことで、自分というものをその趣味や活動を通して見出しやすい状態にあった。一方、仕事以外に特に何もしてこなかった男性は、一から全く新しい分野の中にその関心事を探していくために、何が自分のやりたいことなのか自分を振り返り、自ら情報を集めたり、友人や家族からの紹介の機会を大事にしたりして、自分に合ったやりたいことを見出す努力をしていた。

3) 【地域との接点づくりに消極的である】

【地域との接点づくりに消極的である】とは、男性が、仕事以外の＜日常での話題が乏しい＞ために、地域の人との会話のきっかけが作り難い傾向があり、地域の人々と関わることに消極的であることである。それは、地域側の状況として、首都圏の特に都心に近いほど＜居住環境の変化と住人の変動が著しい＞＜日常での近所付き合いが希薄である＞こと、そしてその地域内には＜地元意識と旧い地域組織体質が残っており馴染みにくい＞現状があり、男性が退職後に地域と接点を作り活動へ参加しようと思える基盤が弱い都市の特徴が関係している。

＜日常での話題に乏しい＞とは、地域での日常生活において、地域に住む人たちと話をするための話題がないために、あいさつはするがその後で会話が续かずに、結局あいさつだけの付き合いに止まってしまう状態である。

あそこの病院はどうとかね、僕も話しする時は大体どうしてもやっぱり、もう仕事離れるとそんな話しかないからね。(G氏)

そこらで世間話っていったって、何話していいか分からねえんだよ。隣の奥さんと会話しようといったって、今日のおかず何にするとか、そんな話はできないでしょ。だから「やあ、こんにちは」ってさっと帰る。(話題) ないもん、俺、正直なところ。(J氏)

男性は、退職までずっと仕事方面で知識や技術を磨き活躍してきた反面、生活に関わる例えば衣食住や買い物場所等の日常的な話題には疎く、それぞれ背景が異なる様々な人との会話の糸口が分からない状態にあった。地域に住む者同士挨拶は基本で大事である、という思いはみな持っており、意識的に挨拶をするように心がけていたが、「世間話っていったっ

て何話していいか分からない。」(J氏)の様に、その後の会話が续かずに、なかなか互いに知り合うきっかけを掴めずにいた。企業人として専門的な知識や話題を深めて社会に貢献してきた男性ではあるが、職場を離れていざ一個人、一生活者となった時に、人と話せる話題がないことに気付いて戸惑い、如何に自分が仕事一筋で日常生活から切り離された世界で生きてきたのか、ということを実感していた。そして、その気付きによって、男性は、これから地域の中での生活を築いていくうえでのひとつのポイントになるであろう‘話題’を地域の中に持つことの必要性を認識していった。

＜居住環境の変化と住人の変動が著しい＞とは、首都圏や特に都心に近い地域や駅近等のロケーションにおいては、近年地域開発が著しく地域の在り様がどんどん変化し、それに伴って居住する人たちの出入が激しく、地域、人共に代替わりをしていく都会の居住環境の特徴である。

変わったね。駅が変わった。すごい変わった。まあ当然、昔はスーパーみたいなのはなかったし、マンションも増えたしね。人が増えて。戸建で住んでる人がもう本当にどんどん出て行っちゃって。今でもどんどん変わってるんでね。だから一緒に住んでる人ってすごい少ないわけ。もう、住んでた人の所はマンションになっちゃったり、何しろ場所が良すぎるから。だから親しい人少なくなっちゃった。(E氏)

ここ何年、30年、40年の間にもう農地がほとんど住宅に変わっちゃっていますよね。何か毎日毎日が、こうあまりにも変わっちゃっているなとびっくりする。地域がこうどんどん変わっているという。(B氏)

全国的に見ても、未だに都会への流入人口は増加傾向にあり、生活形態の変化から一人暮らしの学生や高齢者も増えてきており、そうした対象のニーズに沿って都心を中心に戸建からマンションへの地域開発も加速している現状があった。地域でこれからの余生を暮そうとしている定年退職した男性は、ふと自分が住んでいる地域を意識した時に、その都会ならではの变化の著しさに驚き時代の流れとして受け止める一方で、知っている人が徐々に減っていく現実寂しさを感じていた。

＜日常での近所付き合いが希薄である＞とは、＜居住環境の変化と住人の変動が著しい＞>都会の特徴において、昔ながらの知り合いは減り、新しく住む人たちと知り合って関係性を築いていくことが難しいために、地域内での近所付き合いが浅く表面的なものになっている状態である。

あまり近所、いわゆる向こう三軒両隣という感じの付き合いは出来ていないですね。アパートでしょっちゅう変わるし、本当に高齢者の終の棲家みたいになってて、デイサービスで車が迎えに来るとか、そんな方たちが多いから、所謂向こう三軒両隣の付き合いというのはあまりないです。そうすると、本当にひとり、独居老人みたいのが多くてね。なかなか近所付き合いも、本当はもっと声かけてやってあげなくちゃいけないんだけど、夫婦揃っての付き合いみたいなのはできない環境ですね。(H氏)

いや、もう地元の近隣っていうのは、もう「隣」なんかないですよ、「近」だけです。ええ、近所だけですね、もう。ちょっと離れるともう他人ですよ。道路一本離れちゃうと。(D氏)

これから地域で腰を据えて暮らそうと落ち着き始めた定年退職した男性は、自分たちが住む地域においても、著しい地域開発の波とそれに伴う居住者の出入などの変動を感じ、以前の日本の生活形態の中で大切にされてきた‘向こう三軒両隣’という価値観が機能しない都会の生活環境の現状を肌で感じていた。そして「痛烈に感じるのは、庭掃除をしなくなったということ。家の前の掃除をしないんですよ。」(J氏)など、自身が小さかった時代の生活形態の記憶のある団塊世代の男性たちは、その頃の地域のあり方と比べることで、家族ぐるみの付き合いが難しくなった今の地域のあり方に疑問と寂しさを抱くようになっていた。

<地元意識と旧い地域組織体質が残っており馴染みにくい>とは、退職して地域に踏み込んだ時に実感する、地域に根強く残る地元意識と何十年その地に住んでいても‘地元’にはなれないサラリーマンのよそ者意識と、いざ自治会などの地域活動に参加しても、変化を求めず無難にこれまでの習慣を踏襲しようとする組織としての旧体質に対して、馴染みにくさを感じている状態である。

自治会は、要は守旧派というか流れを変えたくないというのがあるわけね。だから、これはいいと思っても、皆がじゃやろうかってなかなかならないんだよね。変わりはないんだ。そうすると、若い人たちがついてこれなくなっちゃうのね。昔から地域にいる人が強んだよね。(45年経っても)やっぱり外様なのよ。(役員をやるのは)輪番制だったりあるいはもう頼み込んでやってもらうとか。どうせ言ってもその通りにならないしと。ただ言われたことを働くような、そんなの面白くないというものもあるんじゃないかな。そういう意味でのモチベーションって全然難しいね。(L氏)

本当の新興住宅じゃない土地柄。昔から地族いる人の中にこうポツン、ポツンと新しい家が入って来ている感じ。だから、そこへ溶け込むにはもしかしたら難しいところがあつて。(略)意識して排除するとか、そういう意味じゃないんですね、何の気なしに。外様みたいな。(J氏)

地域で自治会等の組織活動に参加した経験を持つ男性が多く感じている現実であった。男性は、輪番制・当番制によって地域組織に関わった経験や、ずっと地域生活を営んできた家族の状況を通して、首都圏においても根強く残る地元意識の存在と、自分たちサラリーマンが外に出稼ぎに出ていた立場から、その地域にとってよそ者の立場であることを実感していた。また、男性たちは、自分たちが仕事を通して培ってきた知識や技術を駆使して、地域組織をより良く時代に合った形に整えていこうと頑張っても、「昔からそれやってるから今更変えられないとか、要は守旧派というか、流れを変えたくないというのがある」(L氏) 現実にはぶち当たり、「だから、これはいいと思っても、みんながじゃ、やろうってなかなかならない。若い人がついてこれなくなっちゃう。」(L氏) ために、地域活動へのモチベーションが低下し、苦勞してまで地域の中で活動をしなくてもいいだろうと、地域活動への参加意欲がより消極的になってしまう傾向がみられた。

4) 【職務経験で培った物事への対処術を生かして関わる】

【職務経験で培った物事への対処術を生かして関わる】とは、地域との接点を作ることに消極的な男性ではあるが、男性は、当番制・輪番制などの形であっても一度覚悟を決めて関わり始めると、＜やると決めたことに徹底して取り組む＞面を発揮し、さらに＜酒の席を通して関係性を深める＞形で互いの距離を縮めて活動を活性化していく、男性ならではの手法を持って、自己の存在価値のある場を探し築いていくことである。

＜やると決めたことに徹底して取り組む＞とは、自分がやると決意したり覚悟を決めたことに対して、スケジュールをこなす感覚できちんと徹底して実行していく実直さを持っていることである。

やると中途半端じゃちょっと気が済まないんだね、きっと。やるとね。どんどのめり込んじゃって。

(A氏)

相当のことね、覚悟もないとね。中途半端に終わってもいけないしね。もう、引き受けたらやっぱり一生懸命やりました。自分が与えられたときは、一生懸命やる、そういう感覚だよ。ね。(持続させていくのは)意識だ。意識を持つのは意地。意地あるよ、それは。すごく持っているね、やっぱり意地はね。(C氏)

現役時代の男性は、自分に課せられた役割や仕事内容をきちんとこなすことが当然であり、そのスタイルが身についているためか、どの定年退職した男性も、自分に課した日々の過ごし方、例えば散歩やジョギング、食事内容などを頑固なまでに崩さずに日々きちんとこなしている人が多かった。この律義さ、実直さは、地域活動における役員としての活動においても「中途半端じゃ気が済まない」(A氏) 性分として発揮され、自治会に関わった男性の多くは一生懸命自分に与えられた役割を果たし、その成果を出すことで自分の存在を地域の中で示し、地域との関係性を発展させるきっかけとしていた。

＜酒の席を通して関係性を深める＞とは、男性にとって酒を飲むということは、互いに心を許し合って本音を言い合い、互いをより深く知り合うきっかけとして重要な機会であり、互いの関係性を深めるための有用な手段であるということである。

やっぱり酒を飲んだからかな。話をするじゃない、それはね、酒があった方が話しやすい。で、例えばさ、酒を飲みながらっていうのはね、きっかけなんだよ。じゃないと集まらないでしょ。(酒飲むと) 地が出るもん、やっぱりそれは。飲むと本音が出てきますから、恰好いいところばかりじゃないから。(C氏)

ゴルフ行って帰ってきたら反省会だとかして飲み会しちゃってね。その後の飲み会の方が楽しくて来てる人もいたから、アフター〇〇友の会なんて名前つけて。(L氏)

現役時代、男性は会合と称した酒の席を介して、仕事上の人間関係を築き仕事を円滑に進める手段としていた。この酒を酌み交わす機会は、男性にとって酒が飲める楽しい時間であるだけでなく、酒の力を借りて人との間にある垣根を取り払って本音での話ができるために、互いの関係性を深める機会ともなっていた。定年退職した男性にとっても、所謂‘飲みにケーション’は、彼らが新しい人間関係を築いていくうえで欠かせない手段となっていた。

戦後日本の高度成長期を支えてきた‘団塊の世代’の企業就労者であった男性は、会社内で築かれてきた自分の存在価値が退職によってなくなり、＜退職によって自己の存在価値が揺ら＞いで【自己の存在価値が脅かされる】状態にいた。そして、仕事上広範囲であった活動範囲も縮小し、そのために＜活動範囲の縮小に伴い人的交流機会も減少する＞こととなり、定年退職後の男性にはまず、これまでの肩書や業績ではなく、社会の中で新たに＜自分を表現できるテーマを探す＞ことで自分の居場所を見出そうとしていた。しかし男性は、仕事以外の＜日常での話題に乏しい＞ために他者との会話の糸口がつかみにくく、また地

域との関わりにおいては、＜居住環境の変化と住人の変動が著し＞く＜日常での近所付き合いが希薄である＞首都圏の特性と、根強く＜地元意識や古い地域組織体質が残っており馴染みにくい＞ことにより、地域活動への参加モチベーションが低下して【地域との接点づくりに消極的である】傾向にあった。しかし、自分からはなかなか地域と係わるきっかけを作りにくい男性ではあるが、男性は＜やると決めたことに徹底して取り組む＞面を持ちスケジュールをこなすように律儀に実行するところや、＜酒の席を通して関係性を深め＞て物事を円滑に進めるなど、【職務経験で培った物事への対処術】を有していた。このような、待っていて地域と係わる機会を得ることが難しい首都圏特有の生活環境の中において、定年退職後の男性が《自己の存在価値を模索する》ためには、より自発的な行動姿勢が必要であると同時に、彼らの義務感や役割意識に働きかけてきっかけを作れるような、他者からのより強い後押しも求められている状況にあった。

そして、こうした自己の存在価値を模索して趣味や自己啓発活動などの個人的活動、地域活動に邁進できる背景には、今現在家族や自分の健康が保たれ、＜家庭が安定している＞状態があり、【今のところ安定した生活基盤がある】ことが前提となっていた。定年退職後の男性はみなそのことを認識しており、それ故に近未来に起こりうるであろう＜老化に伴う介護や健康阻害への不安＞を見据えながら、現状の中で、自分の居場所を模索する姿があった。

2. 《個人として在る》

《個人として在る》とは、退職することによってこれまでのキャリアや肩書に寄ることがなくなって、それに代わる自己の存在価値を模索していた定年退職した男性が、趣味や自己啓発活動を通して【自己への誇りを再獲得する】ことができ、その自己の存在が感じられる世界、即ち【個人的な関心事の空間の中で満足する】状態であり、地域という生活で結びつく限定的な空間ではなく、個人の満足や生きがい等の自己実現を目的とした空間の中で、自己の存在を見出した状態である。(図5)(表7)

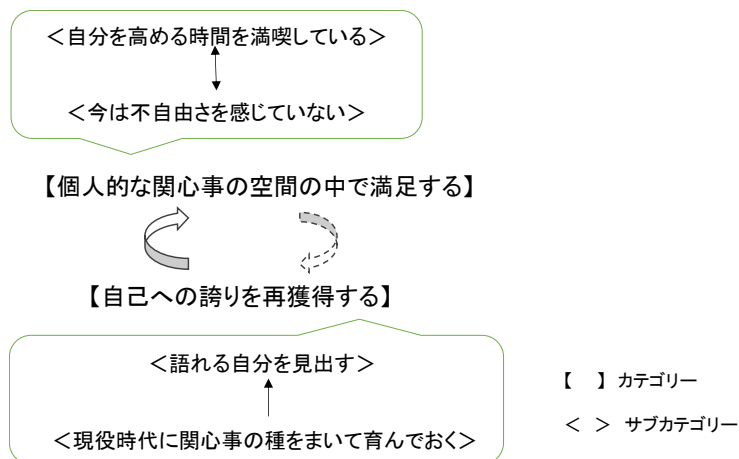


図5 主要カテゴリー《個人として在る》の構造

表7 定年退職した男性が地域とのつながりを構築していく過程《個人として在る》を構成するカテゴリー

主要カテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	コード
個人として在る	自己への誇りを再獲得する	現役時代に関心事の種をまいて育ておく	<ul style="list-style-type: none"> ・畑もゴルフも現役の時からずっとやっていた。 ・もともと絵には興味があって、やりたいなという潜在的な何か思いはあったので、思い切ってやってみようかと思って退職してすぐ始めた。 ・現役時代から社内でも合唱やっていた、今も続いている。 ・もっと前から仕込みをやったかないと、一つのものに向かって何かね、心ひとつに何かやるなんてことは難しい。 ・もともと百姓の次男坊だから、田舎のね。(畑を)いじるのは全然抵抗なかった。ここでちょこちょこやってたのをその人が知ってくれていて、で声をかけてくれた、やらないかと言って。
		語れる自分を見出す	<ul style="list-style-type: none"> ・(退職した時)外に出るのが何かすごい恥ずかしいっていうか、怖いっていうか。いわゆる会社に行ってるのか当たり前あれで、「俺見られてる」と思ったわけです。何かブラブラしているというのが、何となく怖いっていうか違和感があった。 ・やっぱりテーマがないとね、たまに飲みに行きましようという。今僕の最大のあれは、テーマというか、課題というか、いかにしてそういうつながりね。 ・周りに聞かれるし。「今何されているんですか？」ってなると「家庭菜園だよ」とか何か言わなくちゃいけない感じになる。「何もやってない」というのはそれこそそのレポートの問題になっているんだね。 ・「どないして生きていくんだろう」って、それはね結構悩むんじゃないか。
	個人的な関心事の空間の中で満足する	自分を高める時間を満喫している	<ul style="list-style-type: none"> ・あまり地域にない。ほとんど色んなことで出歩いていることが多いし大体スケジュール入っている。 ・普通地域のつながりなんか、よっぽど何かやらないと、老人会に入るとか、老人会に入るつもりはない。嫌ですよ、老人の仲間に入るのは。 ・自分を高めて、若返らせるというか老化させないという感じ。 ・趣味なら趣味の目的があるから、何時間でも語れるし、何日間いたって飽きない。 ・ボケ防止とね、新しいことだから。会社時代じゃ経験してない業種だから、嫌いなことじゃない。
		今は不自由さを感じない	<ul style="list-style-type: none"> ・(地域を)意識することはない。何か体が不自由になったりして、介護みたいなことになったらもっと付き合う範囲が広がるんじゃないかと思うけど、今もところはそういうの全然ないから。 ・(地域を意識するのは)今のこの感じでいくと、例えば本が読めなくなったとか、足腰が悪くなってウォーキングができなくなるとか。ある程度そっちの方の比重が下がった時でしょう。 ・会社を辞めても会社の人とのつながりというのは結構残るから、それがパタッと無くなった時にはあると思う。そこから当然切り離されるわけだから、周りの人との関係が重要になるかも。 ・今のところは感じていない。やっぱり孤立してくると、社会問題にもなっているように、そういう意味では(地域)活動するようになるかもしれないけど、今のところはそういう環境じゃないから。むしろ孤独を、孤独というかそういうのを謳歌しているというか。 ・不便感じてないし、あえて積極的に輪を広げようという意識も今のところはない。 ・あまり(地域とつながる意味)は感じてない。地域とつながってないと不自由だとかあんまり感じない。 ・自分からすれば、別に地域じゃなくてもね、地域じゃなくても十分。 ・(地域を意識することは)あまり関係ないね。(意識)しないんじゃないかな、多分。しないで、このまま逝くんじゃないかな。

1) 【自己への誇りを再獲得する】

【自己への誇りを再獲得する】とは、自己の存在価値を新たに模索していく上で、退職後も継続していける趣味など、＜現役時代に関心事の種をまいて育ておく＞ことが社会や人と繋がるきっかけとして有用であり、自身の関心事を通じて仲間やグループができ、その中で＜語れる自分を見出す＞ことで、揺らいでいた自分の自信を取り戻した状態である。

＜現役時代に関心事の種をまいて育ておく＞とは、定年退職によって揺らぐ自分の存在価値や居場所を模索していく時に、仕事以外の何か関心事を持っていることは、新しい世界に踏み込むためのきっかけとして強みであるため、現役時代にその土台を築いておくことが有用であるということである。

もともとちょっと絵には興味があって、やりたいなという潜在的な何か思いはあったんですけども。ま、思い切ってやってみようかなと思って、退職してすぐ始めました。(B氏)

もともと百姓の次男坊だから、田舎のね。(畑を) いじるのは全然抵抗なかったんですよ。ここでちょこちょこやってたのをその人が知ってくれていて、で声かけてくれたの、やらないかと言って。(J氏)

退職後にスムーズに新しい生活に馴染めていた男性の多くは、現役時代に自分の関心事を見つけて、「現役時代から社内で合唱をやっていたね」(F氏)、「もともと自転車が好きで、会社入った時に自分で組み立てたりね」(D氏)等、少しずつ知識や体験を積み重ねており、そのためにその関心事を高めたり広げたりすることで、新たな自分の居場所を見出す土台としていた。関心事は一朝一夕では育たないために、「もっと前から仕込みをやったかないと、一つのものに向かって何かやるのは難しいね」(A氏)という様に、退職後に新たに見出そうとしても難しく、男性も現役時代から何かしら意識して関心事を作っておくことが、退職後の自分探しにおいて有用であると言えた。無趣味であったと語った男性も、幼少期の畑仕事の経験を生かして退職後は家庭菜園の中に楽しみを見出しており、自分の存在価値を見つける世界は、それまでの自身の経験の中に種が蒔かれていたとも言える。

＜語れる自分を見出す＞とは、現役時代の名刺代わりとなる、他者に自分を紹介する時の‘自分’を表すシンボルの様な、自身の自信や誇りとして人に語れるものをもう一度持つと

いうことである。

やっぱりテーマがないとね、たまに飲みに行きましょうという。今僕の最大のあれは、テーマというか、課題というか、いかにしてそういうつながりね。(G氏)

聞かれますしね、周りに。「今何されているんですか？」って言うと「家庭菜園だよ」とか何か言わなくちゃいけない感じになる。「何もやってない」というのはそれこそこのレポートの問題になっているんだね。(A氏)

現役時代、男性の多くは、仕事の中に自分の存在価値を見出し、その業績や生き方に誇りを持って、そのシンボリックなツールとして名刺を用いて自分を他者にアピールしていた。しかし、退職によって名刺が無くなると同時に、仕事の中に見出していた自己存在が揺らぎ、自身として他者に示せるものも揺らぐことになっていた。自分自身で自己の存在価値を明確に示せないことは、「どないして生きていくんだろう」(A氏)という生き方を問われることでもあり、定年退職した男性にとって、自分として人に語れる内容、即ち‘自分とはどういう存在か’を示せる事柄を模索し、見出していくことは、退職後の第二の人生を歩み出す上で必要不可欠なステップであった。そして、彼らは、趣味や自己啓発など自分の内面を高める活動を通して自分の居場所や自分のこととして語れる事柄を見出し、職業人としてではない、一個人としての普遍的な自信や誇りを再獲得していた。

2) 【個人的な関心事の空間の中で満足する】

【個人的な関心事の空間の中で満足する】とは、退職後の男性が、揺らぐ自己の存在価値の再建を模索する過程で見出した、自己価値を感じられる心地良い空間の中で、＜自分を高める時間を満喫している＞状態であり、また、自分の好きなことを楽しみ満足しており＜今は不自由さを感じていない＞ために、個人として生きがいや自己実現を追い求めている状態である。

＜自分を高める時間を満喫している＞とは、自分の存在価値を自分自身の能力や知識を高めることで感じたり見出したりし、自身の達成感や満足感を優先した生活を楽しみ満足している状態である。

あまり地域にいないからね。ほとんど色々なことで出歩いていることが多いから。大体スケジュール入

っていますよ。(M氏)

自分を高めて、若返らせるというか老化させないという感じでね。(G氏)

普通地域のつながりなんか、よっぽど何かやらないと、老人会に入るとか、老人会に入るつもりないから。嫌ですよ、老人の仲間に入るのは。(僕は) スポーツクラブに行ってるからね。色んな人と付き合えるんですよ。スポーツクラブに行ってから知り合いができた。(I氏)

定年退職した男性に限らず、人は誰もが自己実現に向けて自分を高めることに尽力し、知識や能力の向上を目指して活動を行っている。自己がしっかりと立つためには、自分への自信を持つことが必要であり、その自信を得るためにも自分を高める努力が求められる。定年退職した男性は、年齢で職を辞することになったが、まだ社会の第一線で働ける技術や体力、好奇心を有しており、これからの人生の中で自分を更に高めていこうという意欲を持っている人もいた。彼らは、「自分を高めて、若返らせるというか老化させないという感じで」(G氏)や「嫌ですよ、老人の仲間に入るのは」(I氏)の様に、定年を迎えたとは云えまだまだ気力、体力共に充実しており、老人の仲間入りをしないためにも、常に新しい刺激や発見を求めて活動を行っていた。また、男性の中には、定年後の地域との関わりイコール老人会というイメージを持っている者もあり、定年後に地域と関わるのは老人になった証という様な偏ったイメージがあることも窺えた。老化したくない、若い自分を保ちたいという意味においても、自分の生きがいを求め、自己の内面的な充実を図っていくことは男性にとって大切な生きる目標となっていた。

<今は不自由さを感じていない>とは、今現在自分には、自分の趣味を中心としたつながりがあり、そこに心地良い安定した居場所を見出しているため、地域と関わりを持っていないくても特に不自由に思うことがなく、敢えて地域とのつながりの必要性を感じていない状態である。

(地域を)意識することはないね。何か体が不自由になったりなんかして、介護みたいなことになったらもっと付き合う範囲が広がるんじゃないかと思うけどね。今のところそういうの全然ないからね。(E氏)

今のところは感じていないですね。やっぱり孤立してくると、社会問題にもなっているように、そういう意味では(地域)活動するようになるかもしれないけど、今のところはそういう環境じゃないもんですから。むしろ孤独を、孤独というかそういうのを謳歌しているというか。(N氏)

気力、体力が充実している定年退職した男性は、どちらかという個人としての自分を充実させる方に関心や優先度があり、自分の興味関心のある世界の中で、自己の存在価値を見出し心地良さを感じているために、「あまり地域とつながる意味は感じないんですけどね。」(B氏)、「別に地域じゃなくてもね、地域じゃなくても十分。」(D氏)等、敢えてきっかけを作りにくい地域の中に入っていく必要性を感じていない者が多かった。しかし一方で、「何か体が不自由になったり、介護みたいなことになったら」(E氏)や「例えば本が読めなくなったとか、足腰が悪くなってウォーキングができなくなるとか」(O氏)の様に、今の安定した健康状態や生活基盤が脅かされた場合には、おそらく地域のことを考えなくては行けないだろう、といった漠然とした展望を持っており、いずれ訪れる老化に伴う取り巻く環境の変化を頭の片隅に置きつつ、‘今は’与えられた自由の中で精一杯自分を高めて充実した時間を満喫している現状があった。

多くの定年退職後の男性は、＜現役時代に関心事の種をまいて育んでおく＞ことで、自分の趣味や自己啓発活動を精力的に行って自己を高め、見失った自己の在処を見出そうと活動していた。定年退職直後の男性は、これまでの自分の看板であった仕事上の肩書や業績が無くなるために、まず趣味や自己啓発活動を通して＜語れる自分を見出す＞ことで自分自身に対しての自信を取り戻し、揺らいでいた【自己への誇りを再獲得】していた。定年退職した男性の多くは、この【自己への誇りを再獲得】した状態に満足して＜自分を高める時間を満喫して＞おり、またその状態に在る自分に＜今は不自由さを感じていない＞ために、その【個人的な関心事の空間の中で満足】していた。定年退職した男性は、揺らぐ自己の存在価値を見出す過程として、＜語れる自分を見出す＞ことで誇りを取り戻し、その語れる世界を、社会の中で自己の存在価値を感じられる《個人として在る》心地よい居場所として大切にしていた。

また、本研究において、この【個人的な関心事の空間の中で満足する】状態で、《個人として在る》場を自分の居場所としていた男性の多くは、集合住宅に居住している人であった。高層マンション等の集合住宅に居住する男性は、戸建に住む男性よりも、集合体としての地域を感じる機会や空間的感覚が薄くなるため、視点が馴染みの薄い地域よりも自分自身に向きやすくなり、地域の中に新しい出会いや居場所を求めるよりも、自身の関心事や能力を高めて自己実現を志向する傾向にあることが窺えた。故に、集合住宅に居住する人の多い首都圏においては、《地域と共に在る》ことを感じられる機会が減少している現状から、こう

した《個人として在る》生き方を自然と選択する定年退職後の男性が多く存在することが推察できた。

3. 《地域と共に在る》

《地域と共に在る》とは、これまで‘生活’をあまり意識してこなかった定年退職した男性が、日々の生活上の営みの中や自治会等の地域活動に参加することを通して、【自分が生活者であることを実感する】、自分の中での意識変化が生まれ、他の住民との共同体験から【地域の中で共有できる視点をもつ】ことで地域の一員としての意識へと変化し、地域を視ることが自然と自分の意識の中に取り込まれて【住民意識が自己の一部となる】、自分の存在価値を地域との関係性の中に見出す状態である。(図6)(表8)

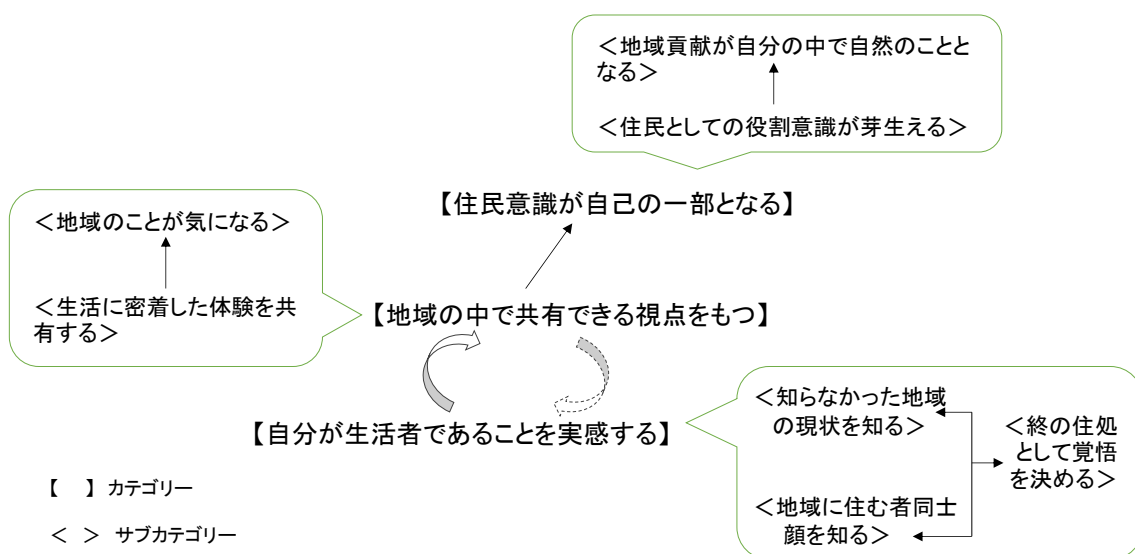


図6 主要カテゴリー《地域と共に在る》の構造

表8 定年退職した男性が地域とのつながりを構築していく過程《地域と共に在る》を構成するカテゴリー

主要カテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	コード
地域と共に在る	自分が生活者であることを実感する	地域に住む者同士顔を知る	<ul style="list-style-type: none"> ・子供たちと関わり合うとすぐ地域が身近に感じられる。親とも知り合いになるし、子供たちも道路で会ってもあいさつしてくれる。 ・僕は道路掃除したりなんかすると、結構広がってくることある、軽く「こんにちば」から始まって。 ・会話しなくても顔は知っている、お互い。名前、どこの誰だったかはお互い皆知っている。 ・勤めている時は、ほとんど地元では何もなかった。犬の散歩で結構仲良くなったくらいで、犬の散歩で知り合いがいるというくらい。
		知らなかった地域の現状を知る	<ul style="list-style-type: none"> ・常日頃見えないところが、結構自治会の中でもこういうので苦労してんだとか、これはちゃんとしないとまずいだろうな、とか例えば、ごみの問題で資源ごみなんて分別回収してるじゃない。 ・(地域開発に係わって)マンションは嫌だって。やっぱり地べた、自分の土地を取られるのは嫌だと、そういう古い考えの人が多くて。 ・選挙応援で車でC市をぐるっと回ったことがあった。人口22万ってなんだ、神宮球場の満員人数の5～6倍だけじゃないかと思ったけど、やっぱり22万人の人が生活するというのはすごいことだと思った。22万人が生活するということはこういうことなのかと。生活というのは何なのかという辺りが分かったという感じがする。
		終の住処として覚悟を決める	<ul style="list-style-type: none"> ・お墓を買って踏ん切りをつけた。田舎に帰りたいという気持ちは今でもある。しかしここに家がある。子どもたちも家内もいる。せざるを得ないという現実があるわけで、現実重視せざるを得ない、まあしょうないと自分で決めた。自分でお墓を買うところから始まった。 ・(地域って言えるのは) やっぱり今住んでいる所の周りでしょう。何かやるにしても市でやっているそういうものに参加するとかそういう感じ。他の所に行ってもつながるというのはあり得ないと思う。 ・全国を(仕事で)見て歩いて、中でもC市って僕いいところだなと思っている。僕らの世代が住みやすいような所という感じがする。ここが自分の街だって。
	地域の中で共有できる視点をもつ	生活に密着した体験を共有する	<ul style="list-style-type: none"> ・マンションの大規模修繕に関わって、その後今度は次の大規模工事になって、外の道路、街路樹、街灯などいろいろと。 ・ある意味では、トラブルで同じ釜の飯を食ったような感覚になったら、その人たちとは結構今も続いている。単に挨拶して、プロジェクトしてさよならってだけでは多分続かないんじゃないかな。 ・自治会やってみなかった時は、こんなの面倒くさいと思ってたけど、実際やって一番で立ったりすると、やっぱりこれはこういうふうになんとやらなきゃいけないんだと。 ・この間雪がずいぶん降って私も若い人と一生懸命雪かきして腰が痛くなっちゃったけど、みんな雪かきやってる。雪もひとつのあれだね。 ・(庭掃除とか)そういうことをやれば、コミュニケーションも自然にとれるんだと思うけど、外に出るきっかけがなくなっているというのか。掃除のひとつもすればいいのという気がしている、今。 ・やっぱり共通テーマでしょう。犬という共通テーマもそうさせている。だから、何でもいい、文化的なものも好きなものをやればいいんですよ。
		地域のことが気になる	<ul style="list-style-type: none"> ・最近顔見ないけどどうしたのとか。 ・何人も雪かきやっていて、そういえばあそこおじいちゃんとおばあちゃんしかいないしねとか。結構雪かきしながら、車押したり、お話ししたりして近所のお付き合いができる。 ・自分の住んでいる所を、比較的広い地域だから、清掃だとか、それこそゴミ出しの日じゃないのにどこでもないゴミを出していると、町内会の面倒見ている人と、ちょっとこんなごみあるよって。 ・本当にひとり、独居老人みたいなのが多くてね。本当はもっと声をかけてあげなきゃいけないんだけど、夫婦揃っての付き合いみたいなのができない環境ですね。
	住民意識が自己の一部になる	住民としての役割意識が芽生える	<ul style="list-style-type: none"> ・変化っていうのは、町内会の人を良くしていかうとできたというあれです。 ・(ごみ回収の日)俺がほとんど立っな。(問題ある出し方を見つけたら)これは何がダメなのかって書いて、その人が気付いて持って行ってくれるように。 ・(とんでもないゴミ出し)これ学生のかなって、よしっ調べようって二人で中を出して調べた。全部調べた。(自主的に)やりますよ。それから張り紙なんかも、今日は可燃ごみを捨てる日ではありませんせん、皆さんの心に聞いて下さいとか書いて。 ・車がその四つ角の所でよく事故を起こす。だから、僕が班長の時に「一方通行にしてくれ」と陳情の動き、積極的にやった。結局うまくいかなかったけど。 ・本当に踏切すごいですよ、10分くらい開かない時ある。路線橋を設けてくれとか、そういうことはやっていくつもりはある。
		地域貢献が自分の中で自然のこととなる	<ul style="list-style-type: none"> ・昔は仕事優先で、会社と家の行き来だったけど、最近は結構周りを見ながら、例えば街路灯が切れているとか、ここは暗いとか、これじゃちょっと事件が起きそうだとか、そういうところ何となく気になるという感じがしてきた。目配りができるようになったというか。 ・自分だけじゃなくて、この地域の良くなることないのかななんて思う。 ・(地域に入って街灯を見たりということが) そう、自然とそうなっちゃうね。 ・そういうのはよくやります。散歩していて、電灯が消えていたり、街路灯が切れてたり、誰かが電話しないと替えてくれないから。(住んでいる住民の目で)それは見ます。自然にそういうふうになった。 ・苦労だとはあまり思わない。やっぱり自分たちのためだと思うので。 ・京成の柴又か京王のS崎かなんていうのは、僕だけだけど、こういった皆の顔つきが違うなと、他の人より。そんな街になって欲しいんだ、本当に柴又と同じだなと。

1) 【自分が生活者であることを実感する】

【自分が生活者であることを実感する】とは、定年退職した男性が、日々の生活の中や自治会等の地域活動に参加することで＜地域に住む者同士顔を知る＞ことができ、活動を通して今まで気に留めていなかった地域の課題や現状に触れ、＜知らなかった地域の現状を知る＞機会を得て、今まで他人事のように感じていた地域に関わる人々や生活上の問題についての実際を知り、生活者としての自分に気づくという段階である。そして、自分の住む地域を知り、退職後のこれからの生活を考えて現実を直視した結果＜終の住処として覚悟を決める＞男性もいた。

＜地域に住む者同士顔を知る＞とは、日常の生活の中で近隣の人たちと挨拶を交わしたり、玄関先の掃除や雪かき等の顔の見える作業を共にしたり、自治会等の地域組織活動に参加することで、今まで知らなかった近隣の人たちと出会い互いに顔を分かり合う、地域との関わりの第一歩である。この‘知る’は、ただ視覚的に顔を知っているだけではなく、互いに関心を持って意識し合う状態である。

子供たちと関わり合うとすごく地域が身近に感じられちゃうのね。親とも知り合いになるし、子供たちも道路で会ってもあいさつしてくれるんですよ。やっぱり全員の顔と名前は一致しないんだけど、やっぱりバス停で会ったりするとあいさつするようになるんだよね。ああ、地域って意外と皆いい人が多いんだなんて思ったりして。(L氏)

だって会社人間 47 年やっているでしょう。そうすると、周りの人と会うなんてことほとんどないじゃないですか。最近ですよ、犬の散歩へ行って「あれっ」なんて思って会ってみたり。隣の畑の旦那と仲良くなるでしょう。俺は素人で、隣は専門家だから、聞くわけですよ。これどうやってやったらいいの、どうやって作るの、堆肥いつやるんだとか、そういうのを聞く。(J氏)

現役時代は、近所の人顔を知っていて互いに挨拶を交わすことはあっても、ゆっくり関わる時間もなく挨拶のみのお付き合いしかしていない男性が多かったが、退職後は地域で過ごす時間も増え、住民同士顔を合わせる機会が増えていた。子どもの行事や妻の付き合いの延長上に地域と関わる機会を得ている男性もいたが、その他、日常生活上で顔を知るきっかけとなるのは、犬の散歩や家の前の掃除、雪かき等の共同作業が多く聞かれ、男性にとって、物理的にも心理的にも垣根を取り払う話題や作業があることが、地域の中で互いの存在

を意識し合って顔を知り合う要因となっていた。「顔知らなきゃね、何にもならないからね」(J氏)とあるように、まず自分が関心を寄せて住民の顔を知ることが、地域の中でつながりを築いていくうえで必要な第一段階であった。

＜知らなかった地域の現状を知る＞とは、日常生活の中での交流や地域活動などでの実体験が、男性にとって、今まで他人事で気にしていなかった地域の現状や抱える課題について知る機会となり、その課題が自身の生活に影響を与えることや、生活するとはこういうことを考えていくんだということに気づくことで、自分がこの地域の生活者の一人であることを自覚し、地域に対する心理的な距離が縮まる状態である。

常日頃見えないところが、結構自治会の中でもこういうので苦労してんだとか、これはちゃんとしないとまずいだろうな、とか例えば、ごみの問題で資源ごみなんて分別回収しててじゃない。(L氏)

選挙応援で車でC市をぐるっと回ったことがあったんです。人口22万ってなんだ、神宮球場の満員人数の5〜6倍だけじゃないかと思ってたけど、やっぱり22万人の人が生活するというのはすごいことだと思いましたね。22万人が生活するということはこういうことなのかと。生活というのは何なのかという辺りが、そういうことが分かったという感じがしますね。何十万の人が生きていくということは、どんだけの環境とか、行政の力が必要かというあたりなんです。あんな隅々まで見ていないところで、本当に色んな意見の人がいるわけですね。ゴミ処理をうまくやらない人もいれば、徘徊老人もいたりね。(H氏)

現役時代、家庭生活の大部分を妻に任せていた男性は、退職後も生活の基盤を妻が整えてくれていることもあって、あまり地域と接点を持たずとも生活できていることもあり、生活者としての感覚が薄い人が多かった。しかし、男性は、生活の中での犬や雪かき等を介した交流や、自治会等地域に密着した活動に関わることで、今まで知らなかった地域の現状や住民のことを知り、自分が住んでいる地域に対して初めて目が向く体験をしていた。知らないということは見えないことでもある。活動をきっかけに、自分や家族の住む地域の持つ様々な日常生活上の問題について知ること、今まで気付かなかった地域の状況を意識的に視るようになっていた。また、‘知る’内容は、地域の環境的な問題等のハード面だけではなく、「自治会だともうアッチャコッチャ向いてるから、大変は大変なんだけど、面白いっては面白いよね。そういう世界知らなかったから。あー、こんな考え方する人いるんだとかね。」(L氏)の様に、その地域に住む住人の背景や考え方の多様性等のソフト面についても気付

き、現役時代の価値観とは異なる様々な価値観のぶつかり合いを目の当たりにして、そこから新しい刺激を得ていた。そして、‘知る’ことによって視野が広がり、今まで見えなかったものが見えるようになっていった。

＜終の住処として覚悟を決める＞とは、今の住まいをこれからの人生の拠点として定め、この地で腰を据えて夫婦で暮らしていく覚悟を決めることである。

踏ん切りつけたというのは、お墓を買ったんです、去年。田舎にあるお墓を全部こっちに持ってきてしまったんです。それだけ田舎に帰りたいという気持ちは今でもあるんですよ、正直な話。だけど、ここに家がある。子どもたちもいる。それから家内もいる。せざるを得ないという現実があるわけだ。現実重視せざるを得ないなということを去年、まあしょうがないなと自分で決めて、自分でお墓を買うところから始まった。(J氏)

全国を(仕事で)見て歩いて、中でもC市って僕いいところだなと思っているんですよ。僕らの世代が住みやすいような所かなという感じがしますね。ここが自分の街だって。(H氏)

研究協力者の男性の多くは、故郷と呼べるところが別にあり、彼らの地域に対する思い入れや愛着は、今現在暮らしている所よりも、彼らが幼少期や学生時代を過ごした思い出のある地にある者もいた。しかし、彼らは「望郷というのかな。何かそういう淡い気持ちです。」

(J氏)という故郷への慕わしい思いを持ちながらも、「でも、ここに家がある。子どもたちもいる。家内もいる。友達もこっちの方がいる。50年もここに住んでいますから。」(J氏)と現実の生活に目を向け、家族のことも考えて今の住まいを‘終の住処’とする覚悟を決めて、その地でのつながりを作る努力をしていた。腰を据える地を得ることで、男性は、これからの人生の設計についても、自分の人生だけでなく、夫婦あるいは家族の人生のあり方としても考え、地域との関係性を考え目を向ける理由ともなっていた。

2) 【地域の中で共有できる視点をもつ】

【地域の中で共有できる視点をもつ】とは、これまで地域の中で共有できる話題が無いために、地域での付き合いが挨拶だけになり易かった定年退職後の男性が、地域の人々との身近な交流や自治会活動など＜生活に密着した体験を共有する＞ことを通して、他の住民と共有できる話題や視方を得て、互いが共にこの地域に暮らす同志という意識が生じること

で、地域に住む一員として＜地域のことが気になる＞という、他者との関係性の中で自分の位置を感じていく意識の拡がりである。

＜生活に密着した体験を共有する＞とは、日常生活の中での住民同士の交流や、自治会等の地域に密着した地域活動に参加することを通して、男性が、知識や情報として知った地域の現状や課題に対して、他の住民と共同で具体的な活動を展開しその体験を共有することであり、そのうえで、地域での生活が、個人のものとしてだけではなく、地域に住む他者のものとしても意識できるようになることである。

マンションの大規模修理に関わって、その後今度は次の大規模工事になって、外の道路、街路樹、街灯などいろいろね。「あ、これは問題だ」と思った途端にはまっちゃう感じがしますよね。ある意味では、トラブルで同じ釜の飯を食ったような感覚になったら、その人たちっていうのは結構今も続いていますよね。単に挨拶して、プロジェクトしてさよならっていうことだけじゃ、多分続かないんじゃないですかね。(A氏)

自治会やってみなかった時は、こんなの面倒くせえなと思っていたんだけど、実際やって当番で立ったりすると、やっぱりこれはこういうふうにならなくちゃいけないんだと。(L氏)

定年退職した男性が他の住民と共有する生活に密着した体験には、ゴミ出しの仕方や街灯や街路樹、道路などの地域全体の生活環境や生活に関わるルールの遵守に対する環境の整備・管理的な意味合いを持つ活動と、雪かきや玄関先掃除、犬の散歩などの個々の生活行動が複数人一緒に行われることで共通作業となって体験を共有できる、個人の思いや判断の集合体として行われる活動の二種類があった。どちらも生活を安全で豊かなものにするためには必要なことであり、こうした生活に密着した活動は、地域との接点を作りにくい定年退職後の男性にとって、現実の地域生活を体感し生活者としての視点を得るうえで貴重な体験となっていた。それと同時に、他の住民と体験を共にすることで、自分も地域という空間やそこにある社会資源を他者と共有しているという感覚も生まれ、それまで自分や家族へと向いていた意識が、自分や家族以外の地域に住む他者にも目が向く契機となっていた。

＜地域のことが気になる＞とは、地域との関わりを通して、他の住民と体験を共有することによって生まれた、自分も地域に共に暮らしている一員という意識から、普段自分たちが

生活している地域の状況や生活に関わるルールの遵守のことが気になってくる状態である。

(地域には) 出ていかないでしょう。ただ、自分の住んでいる所を、比較的広い地域だから、清掃だとか、それこそゴミ出し…の日じゃないのにどんでもないごみを出していると、町内会の面倒見ている人と、ちょっとこんなごみあるよって。(K氏)

本当にひとり、独居老人みたいなのが多くてね。なかなか近所付き合いも、本当はもっと声をかけてあげなくちゃいけないんだけど、夫婦揃っての付き合いみたいなのはできない環境ですね。(H氏)

定年退職した男性は、自分も地域に住むメンバーの一員であり、皆と共にこの地域に暮らしているという自覚が生まれることで、地域と関わらなかった時には見えなかった地域の状況や住んでいる人たちの様子などが気になるようになっていた。以前であれば気に留めなかったし気付かなかったであろう「最近顔みないけどどうしたのか」(L氏)、「そう言えばあそこはおじいちゃんとおばあちゃんしかいないしね」(K氏)など、何かいつもと違うということを感じ取るようになっていたり、「ゴミ出しの日じゃないのにとんでもないゴミを出してる」(K氏)など生活者として守るべきマナーや住民の行動が気になってきたりと、自分や家族のことだけでなく、地域の状況や他の住民の動向に関しても意識や目が向くようになっていた。

【自分が生活者であることを実感する】段階では、自分の住んでいる地域の実情を知って、自分が一生活者であることに気づくという、視点がまだ自分や家族に向いている状態であったものが、【地域の中で共有できる視点をもつ】段階では、自分の地域生活が他の住民と共にあって築かれていることを認識することで、自分や家族以外の他者にも意識が向くようになり、他の住民との関係性の中での自分として捉える態度へと変化していた。

3) 【住民意識が自己の一部となる】

【住民意識が自己の一部となる】とは、定年退職した男性が、地域に住む一員としての意識から気が付くようになった地域の課題や改善点に対して、‘気付いた’次のステップとして地域を良くするための対策を考え、必要に応じて行動に移していく＜住民としての役割意識が芽生える＞段階を経て、そうした体験を繰り返すうちに、その地域に関する気付きから解決までの一連の行動が自然と行われるようになり、＜地域貢献が自分の中で自然なこととなる＞状態へと至ることである。

＜住民としての役割意識が芽生える＞とは、定年退職した男性が、自分たちの住む地域をより安全で快適な環境にしようと、住民としての役割を意識し、気付いた問題点に対して必要に応じて実際に行動することで解決策を探る姿勢である。

変化っていうのは、町内会のやっぱり人を良くしていこうとできたというあれですかね。(F氏)

(とんでもないゴミ出し)これ学生のかなって、よしっ調べようっていうんで二人で中を出して調べた。全部調べた。(自主的に)やりますよ。それから張り紙なんかも、今日はこういう可燃ごみを捨てる日ではありません、皆さんの心に聞いて下さいとか書いてね。(K氏)

車がね、その四つ角の所でよく事故を起こす。だから、僕が班長の時に「一方通行にしてくれ」と陳情の動き、積極的にやったんだけどね。結局うまくいかなかったけど。(C氏)

この役割意識による行動は、自分や家族のためでもあるが、地域全体が快適に、住民が皆心地よく安全に暮らしていけるために、という自己だけでなく地域に住む他者のために、という意識が働いていた。「散歩していて、電灯が消えてたり街路灯が切れていたり、誰かが電話しないと替えてくれないからね」(K氏)の様に、住民としての役割意識を持つ男性は、住民が共有している地域の不備状況に気づくと、そのまま放ってはおかず、できることは自分で動き、自分の判断や行動で難しい場合には地域の仲間と共に解決するための行動を実際に取り、自分の役割を遂行していた。こうした実行力の発揮は、企業就労者としての経験から身についた物事を推し進めるためのノウハウや役割遂行への責任感からとも考えられ、男性ならではの強みであると言える。

地域との交流や地域活動への参加を通して、男性は、自分の意識が‘自分’や‘家族’から‘他の住民’へと向いていき、行動の目的も徐々に‘自分のため’から‘他者のために’へと、他者との関係性の中に自分の位置や役割を見出すようになっていた。そして彼らは、地域の中で自分の住民としての役割を意識し、その役割を果たすことで、地域という社会の中での自分の存在と地域社会とのつながりを感じるようになっていた。

＜地域貢献が自分の中で自然なこととなる＞とは、地域と関わりを持つことで、自分たちが生活している地域に目が向くようになった意識が、地域の課題改善のための活動を他の住民と共に行い、その体験を重ねていく中で、自然と自分の一部として浸透していき、自然に地域のために動くことができるようになる態度のことである。

昔は仕事優先で、会社と家の行き来だったけど、最近は結構周りを見ながら、例えば街路灯が切れていたりとか、ここは暗いとか、これじゃちょっと事件が起きそうとか、そういうところ何となく気になるという感じがしてきたね。目配りができるようになったというかね。自分だけじゃなくて、この地域の良くなることないのかななんて思うとき。(地域に入って街灯を見たりということが) そう、自然とそうなっちゃうね。(L氏)

(住んでいる住民の目で) それは見ます。自然にそういうふうになったんで。(K氏)

苦労だとはあまり思わないね。やっぱり自分たちのためだと思うので。特にああいう下水道なんてもう大変だったからね。(C氏)

地域の中で街路灯が切れていたり、ゴミ出しマナーが不十分だったりということは日常的によく見かける事象である。放っておけば住民の生活に支障をきたす可能性もあり対応を必要とする案件でもあるが、誰がどのように対応しているのかについては、あまり意識されておらず知られていない。自治会や管理組合等の組織的な対応もあるが、今回、そうした自治会活動の経験を経てきた定年退職後の男性の自主的な関わりによっても対応がされている現状が窺えた。彼らは、自治会等での役割としてではなく、一生活者としての視点・役割意識から、普段から自然と地域への目配りが身についており、気付いたことに対しては当たり前のように改善のための行動へと移していていた。こうした行動は「自然とそうなっちゃう」(L氏)、「自然とそういうふうになったんで」(K氏)にあるように、本人たちは特に意気込まずに当たり前の感覚で、‘自然と’対応できるまでに自分の一部となっていた。また、「苦労だとは思わない。自分たちのためだと思うので」(C氏)や「自分だけじゃなくて、この地域の良くなることはないのかななんて思うとね」(L氏)等‘自分たち’‘自分だけじゃなくて’と自己の範疇を超えて、自己を含めた他者への目配りが自然とできる利他的な意識が働くようになっていた。

企業就労者であった男性の多くは、あまり生活の場としての地域を意識することなく定年退職を迎え、地域が活動拠点となって、初めて自分が地域や住民について殆ど知らないことに気付き、彼らは、日々の地域生活上の営みの中や組織的な地域活動への参加を通して、＜地域に住む者同士顔を知る＞機会が増え、居住地域の実際に触れて＜知らなかった地域の現状を知る＞こととなっていた。そして中には、‘ここが自分の生きる場所’と＜終の住

処として覚悟を決める>者もおり、男性は、【自分が生活者であることを実感する】ことで、今まで意識してこなかった地域と結びついている自分に気付くこととなっていた。そして、他の住民とく生活に密着した体験を共有する>ことを通して、より深く地域の現状や課題について知り、日常生活上でもく地域のことが気になる>ようになっていた。このことは、今まで日常生活の中に話題がなかった定年退職後の男性が【地域の中で共有できる視点をもつ】ことで地域と接点を持ちやすくなると共に、‘地域の一員’である自分を意識するひとつのターニングポイントになっていた。そして、地域の一員として地域が気になることでく住民としての役割意識が芽生え>、日々の生活に係わる日常生活上の問題に気づき、その解決のための対策を考え行動に移すまでになっていた。こうした気づきや行動は、男性にとって自身の役割遂行として日々の生活の中で日常化していき、住民目線で地域を視ることが自然と身について、く地域貢献が自分の中で自然なこととなる>状態へととなっていた。く地域貢献が自分の中で自然なこととなる>ことにより、男性は、自分の存在価値を、個人や家族を中心とした身近な関係性の中に感じるだけではなく、《地域と共に在る》という、より社会的な広がりや深みを持った他者との関係性の中に見出していく認識へと変化していた。

4. 『地域の中で共有できる視点をもつ』


定年退職した男性には、組織的な地域活動への参加を通して《地域と共に在る》ことを忍びていくことで、居場所としてだけでなく意識の部分でも‘地域とのつながり’を構築していく人がいる一方で、自己の在る場を必ずしも地域に求めるのではなく、趣味などの世界の中で他者とのつながりを築き、【個人的な関心事の空間の中で満足】し《個人として在る》ことを満喫している人もいた。双方の差は、『地域の中で共有できる視点をもつ』か否かであり、生活者の目線を獲得できる体験や経験の有無が、定年退職後の男性の意識の方向性に影響を与えていた。

Ⅲ. 定年退職した男性が地域とのつながりを構築していく過程の理論化

1. 定年退職した男性が地域とのつながりを構築していく過程

定年退職した男性にとって地域とのつながりが構築されていくということは、『地域の中で共有できる視点を持つ』ことをコアカテゴリーとして、《地域と共に在る》状態に目

覚めていく過程であった。この過程は、退職によって自己の存在価値が揺らぐ男性が、《自己の存在価値を模索する》中で、趣味や自己啓発活動などの《個人として在る》場や空間をつくっていく一方で、地域生活や地域での組織活動と関わることを通して自己の居場所を地域の中に見出していき、住民の一員として《地域と共に在る》意識へと変化していく、心の在り方のダイナミクスを表すものであった。(表5、前掲)(図7)

《個人として在る》意識を基盤として、その意識に《地域と共に在る》意識が重なっていくその比重の変化を、心の在り方として  の円の色分けで表示した。

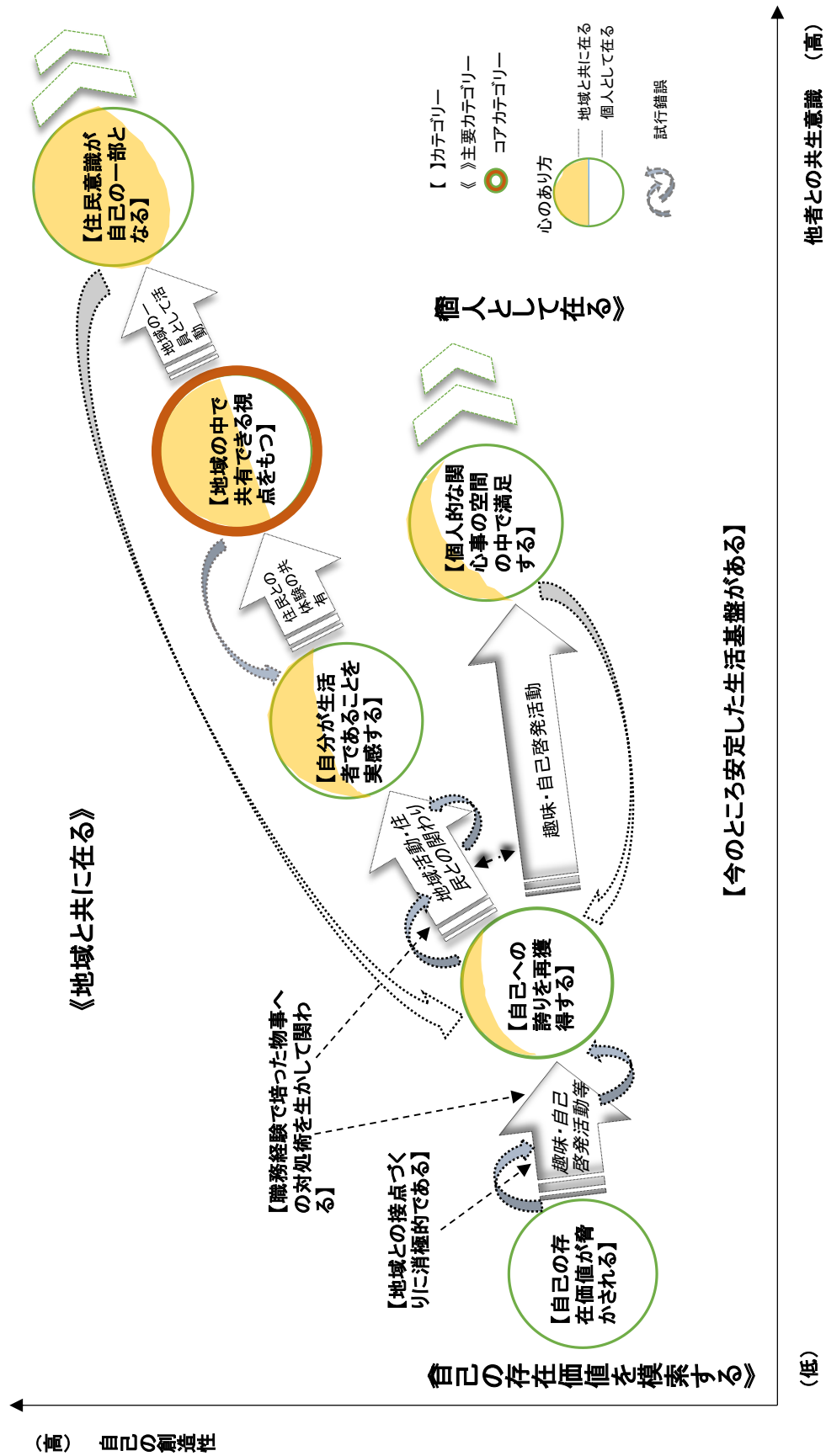


図7 首都圏在住の定年退職した男性が地域とのつながりを構築していく過程の理論化

‘団塊の世代’の企業就労者であった男性は、それまで会社内で培ってきた業績やスキルを礎に、社会の中に自分の存在価値を確立してきたが、定年退職することによって、その存在価値のあった場所がなくなり、皆一時的にでも＜退職によって自己の存在価値が揺ら＞いでいた。そして、仕事上広範囲であった活動範囲の縮小と合わせて、仕事に関連した付き合いや人的な交流機会も減っていき＜活動範囲の縮小に伴い人的交流機会も減少する＞新しい生活環境の中で、定年退職した男性は、まずこれまでの肩書や業績ではない、新たな自分を表現できるテーマを探す＞ことで自己の存在価値を模索し自分の居場所を見出そうとしていた。

しかし男性は、これまで仕事一筋で日常生活に関わる時間もなく、また関心も低かったためか仕事以外の＜日常での話題に乏し＞く、他者との会話の糸口が掴みにくく、そのために近隣の人たちとも挨拶のみの関係に留まってしまう現状が窺えた。また、居住地域の開発で戸建がどんどん高層マンション等の集合住宅に変化していったり、それに伴う住民の転出入が激しいために、住民同士が深く関わる環境的条件が厳しい＜居住環境の変化と住人の変動が著し＞い首都圏の住宅事情と、＜日常での近所付き合いが希薄＞になり易い特性とが、さらに定年退職後に男性が地域と関わりを持ちにくい要因となっていた。そして、特に、自治会や町内会等の組織的な地域活動に関わった経験のある男性から多く聞かれた要因として、根強く＜地元意識や古い地域組織体質が残っており馴染みにくい＞ことがあった。自治会等の地域組織の基盤は、古くからその地に住む地元民によって築かれており、サラリーマンであった男性が入っても、よそ者意識を感じさせる場合があった。彼らが社会の中で切磋琢磨しながら培ってきた運営方法や効率化への提案が受け入れられない等変化を好まない体質によって、彼らの地域活動への参加モチベーションが低下して【地域との接点づくりに消極的である】傾向が見られていた。男性は地域との関わりに消極的であると言われているが、その要因は、企業就労者としての男性の特性だけにあるのではなく、地域側の、新しい価値観を受け入れ時代の進化に合わせて地域のあり方を変化させていく柔軟性の不足にも課題があることが示された。

しかし、自分からはなかなか地域と係わるきっかけを作りにくい男性ではあるが、男性は＜やると決めたことに徹底して取り組む＞面を持ちスケジュールをこなすように物事を実行していく実直さや、酒の力や場の雰囲気を借りて自分の殻を取り払って本音で語り合う＜酒の席を通して関係性を深め＞る【職務経験で培った物事への対処術】を有しており、有言実行を示すことで周囲の者の信頼を獲得し、酒の席を通して、建前ではなく本音のコミュ

ニケーションで互いへの関心や理解を深め、新しい関係性を太く安定したものへと育てて
いっていた。男性にとって‘同じ釜の飯を食う’経験は、定年退職した後の新しい他者との
関係性を確かなものにしていく上でも大切な体験であり、男性の対処術のひとつであった。

このような、待っていて地域と関わる機会を得ることが難しい首都圏特有の生活環境の
中において、定年退職後の男性が《自己の存在価値を模索する》ためには、より自発的な行
動姿勢が必要であると同時に、彼らの義務感や役割意識に働きかけてきっかけを作れるよ
うな、他者からのより強い後押しも求められている状況にあった。

こうした自己の存在価値を模索して趣味や自己啓発活動などの個人的活動、地域活動に
邁進できる背景には、今現在家族や自分の健康が保たれており、家族関係が穏やかである<
家庭が安定している>状態があつてのこと、と定年退職後の男性はみなそのことを認識し
ていた。それ故に、一方で定年退職した男性は、この安定がこの先ずっと保障されるもの
ではなく、いつかは自身や家族に健康障害が生じて介護を必要とする時が来ることを予測し、
頭の片隅で意識していた。彼らは、<老化に伴う健康上の問題・介護への不安>を見据えな
がら、【今のところ安定した生活基盤がある】現状の中で、一生懸命自分の居場所を模索し
ていた。【自己の存在価値が脅かされる】状態の中で、存在価値を探して行く上で、定年退
職後の男性の多くは<現役時代に関心事の種をまいて育ておく>ことで、退職後の自由
な時間を、趣味や自己啓発活動等の個人的な関心事に費やし、その関心事において自己の能
力や知識を高め、自分を表現できるシンボルおよび自信を再び獲得し、<語れる自分を見出
>していくことで、【自己への誇りを再獲得】し、社会の中での自己の在処を見出していた。
そして彼らは、この【自己への誇りを再獲得】した状態に満足して、さらに<自分を高める
時間を満喫して>おり、またその状態に在る自分に<今は不自由さを感じていない>ため
に、その【個人的な関心事の空間の中で満足】している状況があつた。<今は不自由さを感じ
ていない>とは、今は十分心身共に健康で、趣味の仲間との交流の中で十分自分の存在価
値を感じ、満足しているために、敢えて地域の中につながりを持つ意義を感じない状態の人
たちであり、彼らは、介護するようになったり、自分が健康を害して思う様に今の活動が継
続出来なくなったり、何か自分にとって‘活動が出来なくなる不自由な状態’になったその
時に、今の心地良い馴染みのある空間以外の場を意識するだろう、という今を満喫している
状態であった。

定年退職した男性は、揺らぐ自己の存在価値を見出す過程として、<語れる自分を見出す
>ことで誇りを取り戻し、その語れる世界を、社会の中で自己の存在価値を感じられる《個

人として在る》ことに満たされる心地よい居場所として大切にしている現状があった。また、首都圏では、高層マンション等の集合住宅に居住する人も多く、そうした居住環境にある男性は、集合体としての地域を感じる機会や空間的感覚が戸建に住む人たちよりも薄くなるために、視点が、馴染みの薄い地域よりも自分自身に向きやすくなり、地域の中に新しい出会いや居場所を求めるよりも、自身の関心事や能力を高めて自己実現を志向する傾向にあったことが読み取れた。このことは、人口の集中に伴う人の転出入の激しさや地域開発による居住形態の変化等の、首都圏の特性が影響した、定年退職後の男性の活動のあり方の特徴とも言える。

上記のように、【自己の存在価値が脅かされる】中で存在価値を探して、【個人的な関心事の空間の中で満足する】定年退職後の男性がいる一方で、そうした‘個人的な関心事’を個人的に充実させながら、地域との関わりを通して地域の中にも自分の居場所を見出していく男性もいた。企業就労者であった男性の多くは、あまり生活の場としての地域を意識することなく定年退職を迎え、地域が活動拠点となって、日常生活上、近隣の人たちと接する機会が出来て初めて、自分が地域や住民について殆ど知らないことに気付くことになっていた。そして、【地域との接点づくりに消極的である】男性は、当番制や輪番制等による半ば仕方なしの形で自治会や町内会に参加することで、地域とのファーストコンタクトを取ることになった人が多かった。彼らは、地域に密着した事柄を取り扱う自治会等の役員になり、メンバーと活動を共にすることによって、それまで関わり合うことの無かった住民と知り合い、＜地域に住む者同士顔を知る＞機会が増えて地域の中に既知の者が増えていくと同時に、地域の抱える身近な問題や居住地域の実際に触れて＜知らなかった地域の現状を知る＞こととなっていた。＜地域に住む者同士顔を知る＞機会には、組織的な活動だけではなく、‘玄関先の掃除’や‘雪かき’といった日常生活の中で、物理的な垣根を取り払い、隣近所が同じ目線、同じ行動目的を持った行動そのものがきっかけとなっていた人も多かった。そして中には、‘ここが自分の生きる場所’と＜終の住処として覚悟を決める＞者もあり、男性は、【自分が生活者であることを実感する】ことで、今まで意識してこなかった地域と結びついている自分に気付くこととなっていた。

そして、男性は、快適な地域にしていくための活動を実践し、他の住民と共に＜生活に密着した体験を共有する＞ことを通して、より深く地域の現状や課題について知り、日常生活上でも＜地域のことが気になる＞ようになっていた。このことは、今まで日常生活の中に話題がなかった定年退職後の男性が、生活に関わる具体的な事柄、例えばゴミの出し方や街路

灯や道路の不整備といった、【地域の中で共有できる視点をもつ】ことで地域と接点を持ちやすくなると共に、‘地域の一員’である自分を意識するひとつのターニングポイントになっていた。そして、地域の一員として地域が気になることで、今まで面倒くさいと感じていた‘ゴミ出しの仕方’や、自分の仕事とは思わなかった身近な道路や街路灯の不整備等を、自分にも関わる事案であることを認識できるようになっていた。また、男性は一度自治会役員としての自分の役割として実行することによって、これまで意識してこなかった自分の生活圏、居住地域への意識が強まり、男性ならではの役割意識の強さや役割遂行への律義さが発揮されてく住民としての役割意識が芽生え、日々の生活に関わる日常生活上の問題に気づいたり、その解決のための対策を考え行動に移すまでになっていた。こうした気づきや行動は、男性にとって自身の役割遂行として日々の生活の中で日常化していき、住民目線で地域を視ることが自然と身について、＜地域貢献が自分の中で自然なこととなる＞状態へと昇華していった。＜地域貢献が自分の中で自然なこととなる＞ことにより、男性は、主体的に地域の中における課題や良くしていきたい点に気づき、その解決のために自然と行動を起こしていく能動的で創造的な態度を形成していき、また自分の存在価値を、個人や家族を中心とした身近な関係性の中に感じるだけではなく、《地域と共に在る》という、より社会的な広がりや深みを持った他者との関係性の中に見出していき認識へと変化させていった。

以上のように、定年退職した男性が地域とのつながりを構築していく過程には、男性が【自己の存在価値が脅かされる】状態の中で、まず趣味やこれまでのつながりを通して＜語れる自分を見出す＞ことで【自己への誇りを再獲得する】ことが必要であることが明らかになった。そして、自分が安定したうえで、組織的な地域活動への参加や日常生活上の住民との関わりを通して＜自分が生活者であることを実感＞し、＜地域の中で共有できる視点をもつ＞ことで地域の一員としての意識が高まり《地域と共に在る》状態へと徐々に至る心の在り方のダイナミクスとして示された。一方、受け身の状態では地域との接点が作りにくい環境的、人的特性がある首都圏においては、退職後、存在価値を見出す場所が地域よりも自分の自己実現の方向に見出し易く、【自己への誇りを再獲得する】ことで【個人的な関心事の空間の中で満足する】男性も多く存在しており、《個人として在る》生き方も、首都圏に住む定年退職した男性が築く、広義に解釈する地域とのつながりのひとつの形として見出された。

2. 定年退職した男性が地域とのつながりを構築していく過程の理論化

これまで述べてきたカテゴリー間の関係性から、定年退職した男性が地域とのつながりを構築していく過程とは、退職によって【自己の存在価値が脅かされる】男性が＜語れる自分＞を見出すことで【自己の誇りを再獲得】し、地域活動への関わりを通して『地域の中で共有できる視点をもつ』ことによって、地域の一員としての意識、即ち共生意識が高まり、《地域と共に在る》状態へと至る心の在り方のダイナミクスとして理論化することができた。《地域と共に在る》心の変容が見出された一方、首都圏に住む定年退職した男性には、‘関心縁’すなわち‘個人が楽しみとしているスポーツや余暇活動、健康など同じ関心事によって通じた縁’である【個人的な関心事の空間の中で満足】している《個人として在る》生き方も、もう一つの必要なつながりの形であることも見出された。

本研究は、理論的前提にシンボリック相互作用論を用いており、定年退職した男性が地域とのつながりを構築していく過程を、単に意識の変化の面からだけではなく、人間の「相互作用」や「主体的なあり方」の側面から捉えて理論化した。図中では、男性が地域とのつながりを構築していく過程で育まれる「他者との共生意識」をヨコ軸とし、「他者との共生意識」が育まれていくことで自己の中に形成されていく、社会の中で主体的に新しいものを形にしていく力を「自己の創造性」としてタテ軸とした。(図7、前掲)

右肩上がりの図は、地域活動や住民との関わりを通して、男性自身の中に「他者との共生意識」と「自己の創造性」が徐々に形成されて、そして高められていき、【自分が生活者であることを実感する】段階を経て、コアカテゴリーである『地域の中で共有できる視点を持つ』段階へと向かうことを示している。そして、その上の【住民意識が自己の一部となる】状態が、「地域とのつながりを構築した状態」、《地域と共に在る》状態の終着点であることも示している。

《地域と共に在る》状態も《個人として在る》状態も、それぞれ‘地域’や‘関心縁’というコミュニティにおいて、他者との連帯感や仲間意識、自分の存在価値や役割の獲得、達成感を得ていることは共通していた。また、定年退職した男性が、退職後に《地域と共に在る》状態や《個人として在る》状態を築いていくために、誰もがこれまでの趣味の中や新しい趣味や地域での活動に戸惑いながら踏み込んでいき、チャレンジして自分に合わなければまた他の方向性を探るなどの試行錯誤を繰り返していた。彼らが時間をかけて＜語れる自分を見出＞し【自己の誇りを再獲得】して、『地域の中での共有できる視点』を育んでい

ったり【個人的な関心事の空間の中】に心地良い居場所を見出したりしていく、トライアンドエラーを経験しながらその人なりの地域とのつながりを創っていく過程も同じであった。

しかし一方で、《個人として在る》状態にいる男性からは、自分の能力や技術を高めることへの充実感や達成感が自己実現の形として多々語られていたが、《地域と共に在る》状態の男性からは、地域の一員として他の住民のためにも役立てることへの充実感ややりがいといった、自分以外の‘他者のために’という視点からの行動を元にした自己実現の形が語られた。どちらも、他者との相互作用から自己の在り方を見出していたが、その在り方や達成感には‘自身の邁進のため’と‘他者のため’という質的な違いが見出された。定年退職した男性が地域とのつながりを構築していくことは、地域に住む他者との共生意識を創り出し、自己の満足を越えた次元にも喜びを見出せる人としての成熟度に深みを与えると共に、主体的に地域の中における課題や良くしていきたい点に気づき、その解決のために自然と行動を起こしていく能動的で創造的な態度を形成していく重要な過程であることが示された。

以上のことより、定年退職した男性が地域とのつながりを構築していくこととは、単に有事の際の近隣での助け合いや安心感のためだけに意義があるのではなく、男性自身が社会との共生意識を高めて、自分だけでなく他者のためにも役立てる充実感や生きがいを得て、人間的な円熟を増していく意義も有する、人間的な成長変容のダイナミクスとして理論構築された。

第6章 考察

本研究は、シンボリック相互作用論を理論的前提として、定年退職した男性が、定年退職後に地域の中で家族以外の新しいつながりを地域との関わりを通してどのように築いていくのかを記述し、理論構築することを目的に行った。その結果、定年退職した男性にとって地域とのつながりが構築されていくということとは、『地域の中で共有できる視点を持つ』ことによって、『地域と共に在ること』を認識する状態に目覚めていく過程であることが見出された。この過程は、退職によって自己の存在価値が揺らぐ男性が、『自己の存在価値を模索する』中で、趣味や自己啓発活動などの『個人として在る』ことに満たされる状態をつくっていく一方で、地域生活や地域での組織活動と関わることを通して自己の居場所を地域の中に見出していき、住民として『地域と共に在る』意識へと変化していく、心の在り方のダイナミクスを表すものであった。

本章では、Ⅰ．首都圏に住む定年退職した男性と地域との関わり、Ⅱ．定年退職した男性が自己の存在価値を模索することとは、Ⅲ．定年退職した男性が個人として在ることの意味、Ⅳ．定年退職した男性にとって地域とつながることの意味、Ⅴ．看護への示唆、Ⅵ．本研究の限界と今後の課題について述べる。

Ⅰ．首都圏に住む定年退職した男性と地域との関わり

1．首都圏における地域の著しい変化

現在、我が国において地域のつながりが薄れている背景のひとつに、都市化の進展が挙げられている。特に、人口と業務機能が集積する大都市部、中でも首都圏では、通勤・通学距離の伸長に伴って職住分離の都市構造が顕著であり、その結果、平日の男性就労者の多くは、ただ寝に帰るために家に帰るような、地域の実情に疎くつながりも薄い地域コミュニティへと変容していつている（土堤内,2010; 松原,1983）。また、首都圏を含む都市部では土地の高度利用から中高層マンション等の集合住宅が増加しており、こうした住宅形態がさらに都市部において隣近所と関係性を築きにくい状況を作り出しており（土堤内,2010）、男性が定年退職によって社縁・職縁による付き合いが減少した後に、親しい知人や仲間のいない地域環境の中で孤立しやすくなることは想像に難くない。本研究においては、研究対象者が何かしらの他者との交流を伴う地域活動に関わっている男性であり孤立を感じさせる者はいなかったが、みな退職して各自居住する地域を拠点とするようになって、改めて地域との

関係性や距離感に戸惑い、難しさを感じていた。仕事一筋に生きてきた男性が、日常生活に関わる話題性に乏しいことも、地域の中になかなか入り込んでいきにくい要因のひとつではあるが、その他多くの男性が、時代と共にどんどん変化していく地域の変化と代替わりしていく地域の在り様をまざまざと感じていた。‘住民の頻繁な入れ替わりによる地域への愛着・帰属意識の低下’が地域コミュニティの衰退を促す事象である（国土交通白書,2006）とも言われており、研究協力者から「向こう三軒両隣という付き合いもできていない」と語られる程、首都圏における住環境の変化は激しい現状がうかがえる。また都市部においては、地方に比して生活スタイルや価値観もより多様性に富んでいるため、隣近所とじっくり関係性を深めていける安定した生活環境が維持されにくい状況であることが推察できる。

「ここ 30 年、40 年の間に農地がほとんど住宅に変わっている。毎日毎日あまりにも変わってびっくりする。」「地域というのが 50 年じゃなくて 40 年でばんばん変わっていく。ほとんど代替わり。」という研究協力者の語りから、我々の暮らしがこの 40 年、50 年で大きく変化してきた様に、首都圏にある地域もまた、時代の移り変わり和社会の発展と共に環境的にも住民構成的にも変化し、今がちょうど地域としての代替わり時期に当たっている様に感じられた。マイホームを購入して子育てを終え、自身も定年退職を迎えた団塊世代の人生のサイクルにリンクして地域も共に動いてきた、ひとつの時代の趨勢を感じた。保健医療専門職として行政保健師や企業保健師は、こうした時代に沿って地域も大きく様変わりし変化し続けるものであること、特に都市部においては、経済の発展に伴い、従来の隣近所の近しい関係性や日常的な助け合いの精神を育てる土壌が乏しくなっている現状を認識し、その地域の変化に合わせた住民同士がつながるための方略を考えていくことが必要であると考えた。

2. 首都圏における住宅形態による影響

首都圏では、人口密度の高さや業務機能の集中による土地の高度利用から、従来の戸建の住宅形態から急速に中高層マンション等の集合住宅形態へと変容してきており、それと共に集合住宅に住む世帯も増加している（内閣府, 2013）。戸建に住む人は、玄関を一步出れば直ぐ道路等の地域の共有空間であり、視線や意識も自然と地続きの地域空間に向き易く「ヨコ」のつながりを持ちやすい環境にあると言える。一方中高層住宅は、居住空間が「タテ」方向に高く、居住者の視線も意識も自然「タテ」方向の空間に向きやすくなり、戸建に住む人に比べて、地域という「ヨコ」のつながりの中での生活感が薄く、また地域との結びつきの必要性をあまり感じることはない生活スタイルでいられる環境にあるために、男性は

退職後の自分の居場所を、馴染みの薄い地域の中よりも個人的な趣味や広域な空間の中に見出していく傾向になっていくとも考えられる。本研究の研究協力者も、15名中5名が集合住宅住いであり、うち4名は組織的な地域活動経験がなく、近所付き合いも稀薄な状態であったが、それぞれが趣味や今までの交流関係等の【個人的な関心事の空間の中で満足】し、その状態に不自由さを感じていない状態であった。一方、戸建に居住する10名の男性中7名に組織的な地域活動経験があり、また8名が近所付き合いがあると回答している。檜谷（1995）は、大都市都心部の居住地類型に関する研究の中で、戸建等の低層住宅形態は、日常生活行為や付き合いの範囲と居住地とのつながりが強い「地縁」型とし、中高層住宅形態を、居住地を超えた広域的な居住関連都市サービスに依存し評価する「居住サービス指向」型としている。住宅形態は、そこに住む人々の価値観を反映した生活スタイルに合ったものであり、つながる空間にも影響を与えていると言える。こうした物理的な住環境のあり方も首都圏の生活スタイルの特徴であり、男性が定年退職後に地域との接点をもちにくくしている要因のひとつであると考えられる。

3. 地域に残る旧い組織体制による影響

一方、自治会や町内会等の地域と密着した活動を行う組織的な地域活動に参加した男性は、こうした著しい地域開発や地域の世代交代が進んで行く中、自治会等の地域組織には、地域を職場として地域内でのつながりを深めてきている地元民の持つ地元意識と、定年退職した男性等のサラリーマンに対するよそ者意識とがあり、今まで続いてきたやり方を踏襲し変化を好まない組織体質があると感じていた。この＜地元意識と旧い地域組織が残っており馴染みにくい＞地域の組織体質が、定年退職した男性が地域活動への参加を躊躇し、関わってもなかなか組織に根づいていけず、【地域との接点づくりに消極的】になっていく要因のひとつとなっていた。「いってもどうせその通りにならないし。ただ言われたことを働くようなのは面白くない」との語りからも、企業就労者として、競争社会の第一線で培ってきた組織運営スキルや活動展開のノウハウを自治会内で解決を要する地域課題のために発揮しようとしても、伝統的なやり方の前になかなか反映する機会のない経験が、男性にとって、地域という場が自分の能力を発揮して自身の存在を示していく場ではないとの意識を生じさせ、余計地域との関わりに消極的になっていく要因になっていることが推察できる。退職した後も、自分の能力やスキルを発揮してやりがいを感じたい男性は、地元の柔軟性に欠けた組織体制を体験することで、地域に関わることの魅力を感じなくなり、地域に関わることは当番制で与えられた期間だけのものとして割り切り、任期が切れた以降は、自分

の能力を発揮し存在価値を見出す場として、趣味などの個人的な活動空間を求めるような志向性が高まるのではないかと推察する。

地域のつながりが薄れている中で、定年退職した男性が地域の中でつながりを構築していくためには、男性自身が自ら地域と接点を持とうと意識し、関わる機会を有効に活用するなどの努力をしていくと同時に、地域にある自治会や町内会側も今の時代の流れに合った活動方法や体制へと変化させていく工夫が求められるだろう。近年、自治会や町内会は会員の高齢化や衰退化の傾向にあり（土堤内, 2010; 内閣府, 2013）、自治会側も組織の若返りや活動の継続を図る上で、貴重な人材である定年退職後の男性が、手応えややりがいを感じられるような受け入れ態勢や柔軟な運営体制を整えていくと共に、彼らが組織の中でよそ者意識を感じることがないよう、地域の仲間同士としての一体感を先導して作り出していく努力も必要であると考ええる。

Ⅱ. 定年退職した男性が自己の存在価値を模索することとは

‘団塊の世代’の企業就労者であった男性は、それまで会社内で培ってきた業績やスキルを礎に社会の中に自分の存在価値を確立してきたが、定年退職することによって、その存在価値の拠りどころであった場所がなくなること、退職直後は皆、一時的にでも自己の存在価値が揺らぐ体験をしていた。中には、強い社縁・職縁が残っていることで、その中でまず自分を保たせていた男性もいたが、徐々にそうした仕事に関連した付き合いや人的な交流機会も減っていき、定年退職した男性は、新しい生活環境の中で、これまでの肩書や業績ではない新たな自己の存在価値を、社縁・職縁でない他の人間との関わり合いの中に探し、見出そうとしており、誰もが、これまでの趣味の中や新しい趣味や地域での活動に戸惑いながら踏み込んでいき、チャレンジして自分に合わなければまた他の方向性を探るなどの試行錯誤を繰り返していた。彼らは、自ら＜語れる自分＞となる物事が何かを考え、踏み込むか否かを判断し、自分なりの目的や意思を持って趣味や地域での活動に参加することで、行きつ戻りつしながらも着実に【自己の誇りを再獲得】していった。そして、人によっては【個人的な関心事の空間の中】に心地良さを見出して満足する者もいる一方で、【自己の誇りを再獲得】した後、地域という退職した男性にとって最も身近に関わりやすい‘社会’に対して働きかけ、『地域の中での共有できる視点』を育みながら他の住民と共に地域社会に能動的、主体的に関わり、地域とのつながりを自然と築いていた男性の存在も見出された。定年退職した男性が、退職後に脅かされる自己の存在価値をもう一度見出すために、自己と向き

合い、自分が何を求めているのか、何ができるのかを自分自身にその「意味」を問い探っていく過程において、趣味などの関心事の世界や地域での組織活動など、社会的相互作用を伴う人間社会・集団と関わり、互いの活動を適合させて自分自身の個人的行動の方向性を主体的に見極め、選択し、形成していく変化が生じていたという結果は、人間を「意味」の世界に住む社会的存在として捉え、主体的人間のあり方を問題とし（船津,1982）、自分にとって自分がどんな対象かということに立脚して、自分自身に対して行為し、他者に対する自分の行為を導いていく（H. Blumer, 1992）というシンボリック相互作用論でいう‘人間を主体的存在たらしめる「解釈過程」’そのものであると言えるだろう。

定年退職した男性は、《自己の存在価値を模索する》中で、他の人間との相互作用を通じて【自己への誇りを再獲得】し、‘しっかりした自分’（内閣府, 2006）を取り戻し、その人の置かれた物理的・人的環境や個々の性格によって、《個人として在る》状態に満足する者と、個人として在りながらも《地域と共に在る》状態へと導かれる者とがいた。しかし、《個人として在る》状態も、《地域と共に在る》状態のどちらもが、各々のコミュニティの中で自分が他者から認められる関係性に基づく状態での認識であり、H. Blumer(1992)の言う他者の自己への役割期待を相対化し、そのことを主体的に受け止めて意味づけし、自らに引き寄せて解釈して、自己として受け入れ、自己を形成していく過程を踏んでいることは共通している。

自らの求める居場所が、関心事の世界か、あるいは地域かという空間に違いはあっても、どちらも他者との社会的相互作用によって自己のあり方を意識し存在価値を見出している。定年退職した男性は、退職後まず揺らいでいる自己の存在価値をしっかりさせるために、自分に焦点を向けて自己のあり方を模索し、自分として語れるシンボリックな軸を獲得すると、その自信と誇りを礎にして、各々が選択する居場所において自分以外の他者を意識し、他者との関係性の中での自分を再形成していくのではないかと考える。

Ⅲ. 定年退職した男性が個人として在ることの意味

戦後の日本経済の発展を支える労働力源として活躍してきた団塊の世代には、現役時代、同世代との競争の中で自身を磨き、仕事人としての誇りに価値を置いている者も多くいる（三浦,2005）。本研究の研究協力者からも、自身の仕事に対するこだわりや熱い思いと同時に、部長や役員等の管理職への昇格に関する話や学歴の話題等、自分が如何に頑張ってきたかというヒストリーが語られており、彼らの自分自身への自負や誇りが感じられた。こうし

た、自負と誇りを持ってきた男性が、その拠りどころであった会社を辞して、新しく自分の存在価値を見出そうとした時に、馴染みが薄く、前述した様に自分の能力を発揮しにくい地域の中よりも、より自分を高めて＜語れる自分＞を見出し、自己実現や生きがいを得る場を、趣味等の個人の関心事の世界に求めていく志向性は、首都圏に住む男性の特性であるともいえるだろう。

前節で述べたように、男性にとって【自己の誇りを再獲得すること】は、自己を確定し、定年退職後に彼らが第二の人生を歩き出す土台を固めるためにも欠かせないステップである。内閣府（2006）も、高齢者の共生社会形成促進に関する調査の中で、共生社会実現の「道しるべ」の5つの視点の中の一番目に、「各人がしっかりした自分を持ちながら帰属意識を持ちうる社会」を挙げている。安定した地域社会を組み立てていくためには、基盤として個々人が「しっかりした自分を持つ」ことが前提となっていることが分かる。定年退職した男性は、もともと自分への誇りや自負は高く、退職によってその居場所を見失っているだけで、彼ら自身、新しい生活環境の中で、自身の存在価値を見出そうと《自己の存在価値を模索》しており、ある男性は趣味などの関心事を突き詰めていくことで自分を高めて【誇りを再獲得】して居場所を得たり、ある男性は、地域の中につながりを求めていたりしている。松田（1998）は、地域高齢者のいきがい形成において、古典的な「職縁」「住縁」「地縁」に変わる新しいパラダイムとして「関心縁」があると述べており、様々な価値観や生活スタイルが混在する首都圏においては、つながりを求める先が従来の地域に根づいたものでなく、趣味などの関心事を中心としたつながりや連帯を主としていく傾向が出てきている。生きがいを感じる時は「趣味に熱中している時」（47.7%）が最も高いというデータもあり（内閣府，2013）、個人を充実させ高めることで、居住地を超えた広域的な地域の中に自分の居場所を築いていくというスタイルも、首都圏等の都市部ならではの‘つながり’のあり方であると言えよう。西田（2006）は、「退職者自らが自分のための新たな役割を模索し、選択することが求められており、退職後の生活の意味づけもまた多様であり、個人の自己決定にまかされている」と述べており、男性が退職後にどのような存在価値を何処に見出していくかの選択は自由であり、その選択は尊重されなくてはならないだろう。

研究者は、定年退職した男性にとって、自分の心地良い居場所、存在価値を見出す場所が、趣味等の【個人的な関心事の空間の中】であっても良いと考える。今は価値観も多様であるから、必ずしも地域の中に居場所を見出すことを強制する必要はなく、その人が安定して充実した生活を送れていることが大事であると考えている。《個人として在る》ことも、定年

退職した男性にとって第二の人生を歩む過程で、人生の充実という意味においても重要な状態であり、特に首都圏においては、活動の志向性として高まり易い傾向にあると言える。岩田（2004）も、地域社会の中に‘つながり’を持たなくとも、家族との付き合いや趣味・職場の仲間との交流が豊かな者もあり、そうした人々を一律に地域社会にインクルージョンしていくことが果たして可能なのか、そして必要なのかと疑問を投げかけている。行政保健師としては、彼らが、地域とは別の空間で充実して満足した生活を楽しんでいる間は、無理に地域と結びつけることはせずに、情報提供等で門戸を開きつつ見守る姿勢も必要ではないかと考える。

今回の研究協力者は、多くが管理職まで勤め上げた方々だったこともあり、インタビューにおいて退職後の経済面での不安定要素が聞かれることは特になかったが、好きなことにチャレンジしたり深めたりしようとする経済的なゆとりがあったという意味において、家庭の安定には、健康面と共に経済的側面も、精神的な安定を得るために欠かせない要素と言えるだろう。また、未婚で独居であった男性も、経済的には資産もあってゆとりがあり、また隣に姉妹の家族が住んでおりいつでもその家族との接触が可能であるという全くの独居とは言えない環境にあったこともあり、ひとりの状態を望んで楽しんでいた。ただ、今は健康的にも経済的にも安定しているから自由が効いているが、いずれ健康上の問題が生じたり介護の必要性が出たりした時に、【個人的な関心事の空間の中】はずっと居られるとは限らない。こうした広域的な地域における自己存在は、安定した生活基盤があつてのものであり、いつ揺らぐか分からない不安定な状況の上に成り立っていることを認識している必要がある。基盤が崩れれば、活動範囲が広域であるだけに、体力的・時間的に自分をその空間に置くことを維持することが難しい活動空間でもある。中村（2011）は、「体が丈夫で経済的にご飯が食べられることを根・幹で確保した上で、その後に「絆」「やりがい」「生きがい」「安らぎ」等の精神的な充実を枝葉としている」と指摘しており、根幹部分には‘健康’と‘経済状況’の安定があつての自己実現活動であると述べている。そして、人は要介護となった場合に希望する生活場所は自宅が最も高く（内閣府，2013）、健康を崩した時に居る場所は‘自宅’であり‘地域の中’になっていく。その弱った時に、急に自分の居場所を地域の中に見つけようとしても難しい。健康な間は、趣味の世界で自己の存在価値を見出してその居場所でのつながりで満足していても十分であると思われるが、将来的なことも視野に入れて、男性側も日々少しずつでも、地域のことに目を向けて関心を寄せる姿勢を意識的に持つておくこと、そして、いざという時に地域とつながれる窓口を見つけておくことは、

退職後に幾度も自分の存在価値が揺らがずに、安定して高齢期を生活していくためにも必要ではないかと考える。

IV. 定年退職した男性にとって地域とつながることの意味

定年退職した男性が地域とのつながりを構築していく過程は、退職直後は自分の存在の在処があやふやであった男性が、趣味や地域との関わりを通して【自己への誇りを再構築】し、さらに地域の人々と思いや課題を共有する体験をすることで、徐々に‘心の在処’が《個人として在る》ものから《地域と共に在る》ものへと比重を増して行くダイナミクスであった。だが、定年退職した男性の全員が【住民意識が自己の一部となる】段階で《地域と共に在る》状態に至るわけではなく、人によっては趣味などの関心事の世界で《個人として在る》状態を選択する者や、地域と関わっていく男性も、その心の在処の様相は、個々の性格や価値観、周りの環境等によって様々な段階を歩んでいる。しかし、男性が地域とつながりを持ち深めていくキーポイントは、【生活者としての自覚】と【地域の中で共有できる視点】、そしてその体験を共にできる仲間の存在にあることは共通して明らかであった。「人々は、共有された認知を通じて、心理的・社会的な意味を持ち実体のある人間集団として社会的カテゴリーを認知する（久保田, 2000）」とあるように、地域の中での共有できる話題や体験、男性が言うところの‘同じ釜の飯を食う’感覚が、地域との結びつきを深めていると言える。青山（2010）は、「活動において自分が役に立っているという体験が、やりがいや生きがいになり、地域に貢献していると感じ、地域における自分の役割を認識することにつながっている」と示しており、また、男性は、課題に対してリーダーシップを発揮したり行政への交渉力を活用して（千保, 2012）現実的に問題解決をしていく力を有している。こうした【職務経験で培った物事への対処術】を駆使して地域の中で役立っていると感じられる体験の積み重ねが、彼らの社会的アイデンティティを育み、地域の一員としての意識を高めていくことになると考える。定年退職した男性が得意分野を発揮できる場や機会が地域の中にあることは、彼らを地域活動への参加を促す要因にもなり、ひいては、定年退職後の男性が、日常生活の基盤となる身近な地域空間に自分の居場所を見出し、《地域と共に在る》意識を生みやすくなるのではないかと考える。

予備研究においては、定年退職期にある男性の地域活動に対する態度を明らかにする中で、彼らの地域に対する意識が、体が居る‘住处’である「居る」状態から、‘自分の存在があるところ’‘心の在処’として地域に「在る」状態へと変化が生じていることが見出さ

れている。そして、本研究において、定年退職した男性が地域に「在る」状態とはどういうことなのかという事を、彼らが地域とのつながりを構築していく過程を明らかにしていく中でさらに深めていった結果、予備研究において地域に「在る」と言えると思出された状態は、地域の中に社会的な自己価値を見出した状態であることが再確認された一方、男性が退職後に、自己価値を見出すために社会的なつながりを求める場として、狭義の意味での生活圏としての‘地域’と、趣味などの関心事で結ばれた居住地を超えた‘関心事で結ばれた空間’の2つの場があることが見出された。そして、予備研究において捉えた「在る」状態とは、地域との関係性をあくまで自分主体で捉えた、「地域に（自分が）在る」という認識であったが、本研究では、さらに、地域と自分のあり方を地域に住む他者との関係性や共生の意識から捉えた、《地域と共に在る》という地域社会集団の一員であるという認識からくる「在る」状態へと進化していくことが見出された。

田高（2012）は、MacIverの言を借りて「コミュニティ意識、即ち地域において人々が有する共通の社会的意識は、地域社会の成員としての自覚に基づき、地域社会という場を重視し、関心を向ける意識であり、この意識こそが地域の基盤となる」と述べている。本研究の結果からも、《地域と共に在る》状態とは、意識や視点が自分だけではなく自然と地域に住む他者にも向き、自分を地域に共生している存在であると認識している状態として見出されている。そして、地域の人とのつながりや関係性の中にある自己の存在を自覚し、各々の住民としての役割を果たすことが、真の意味で「地域とのつながり」を構築した状態であると言えるだろう。

地域は生活の基盤があるところであり、その基盤が安定していることは、精神的安らぎをもたらす（内閣府,2013）、人生に安心感が得られるということでもある。現在は、通信機器やSNS等のITを駆使したコミュニケーションツールの発展が著しく、人々は他者とのつながる場を、地盤で結びつく地域空間を超えた個々の価値観や関心事に求める高齢者が増えている（土堤内,2010）。本研究の研究協力者もほぼ全員が生活圏を超えたところに趣味や同窓会を持ち、その中でつながりを大事にし、中には「地域を意識することは（これからも）ないでしょうね」、「あまり地域とつながる意味を感じない」等地域との関わりに無関心な男性も複数いた。元気なうちは、活動範囲も広がり、自分の関心事の中で自身を高める、その仲間の中で精神的な満足や充実感を得る生き方も可能であるが、自分や家族の心身が弱ってきた時に最後にたどりつく場所は、やはり‘自宅’であり‘地域’である（内閣府,2013）。また、近年頻発する災害等の緊急時においては、関心事で結ばれた空間でのつながり

りは精神的部分での支えにはなっても、実質的な問題解決を有する事態への支援は期待できず、それこそ自分の足元である地域での **face to face** の直接的な助け合いや支え合いが必要とされる。定年退職した男性は、現状では不自由がなく地域とつながる意味を感じなくとも、‘遠くの親戚より近くの他人’ のことわざがある様に、いざという時のためにも、元気な時から地域や隣近所等の地域住民に対しても意識して目を向けて、入り込み易い状況や関係性を築いておくことも、安定した高齢期を過ごしていくためにも必要なことであるとする。

しかし、定年退職した男性が地域とのつながりを構築することは、有事の際の近隣同士の助け合いや安心感のためだけに意味があるのではない。本研究からは、地域とのつながりを構築していく過程を通して、男性は地域に住む他者との共生意識を創り出しており、趣味等の関心縁でのつながりからは育まれにくい自己の満足を越えた、他者のために役立つことにも喜びを見出せる他者志向的な生き方と、地域の中で自然と能動的かつ創造的に行動していける態度とを身に着けていることが示された。男性自身が、地域に住む多様な価値観をもつ他者と関わることで社会との共生意識を高め、自分だけでなく他者のためにも役立てる充実感や生きがいを得るようになることは、彼らの人格に豊かさと深みをもたらし人間的な成長に影響を与えていると言えよう。地域とのつながりを構築していく試みは、定年退職した男性にとって、自立した個人として在る《個人として在る》生き方から、地域社会の一員として生きていく《地域と共に在る》社会的存在へと、自己の在り方に広がり豊かさをもたらす貴重なステップとしても意味がある、と考える。

さらに、こうした定年退職した男性が地域とのつながりを構築していく過程で培われる、他者との共生意識や創造的な行動力の発揮、「持ちつ持たれつ」の互酬性の規範に基づくさまざまな地域での活動の活性化は、安全で住みやすいコミュニティの再興にもつながり、ひいてはソーシャル・キャピタルの醸成を促す貴重な資源となっていくと考えられる。コミュニティの崩壊が進む首都圏などの都市部においては、これからのコミュニティの再興や豊かな地域づくりを促進していく観点からも、定年退職した男性が地域とのつながりを構築していくために、消極的な理由からではあっても、まずは『地域の中に共有できる視点をもつ』ための体験をしていくことがとても重要であり、そうした体験を住民同士で共有できるような機会を地域の中に創っていくことが必要であることが示唆された。

V. 看護への示唆

本研究の結果より、定年退職した男性が地域とのつながりを構築していくあり方には《個人として在る》方向と《地域と共に在る》方向の二通りあることが明らかになった。

首都圏においては、地方の様に地縁が強いわけではなく、受け身で待っていて地域に入るきっかけを得ることが少ない環境であることから、男性自らより積極的に自分から働きかけていく姿勢が求められている。つながりは、昔は否応なく確実に地域に住む者に割り当てられる感覚で当然あったものであるが、現在では、自分が自由に決められるようになった半面、自分自身でつながりを作り出さなくてはいけないものになってきている（内閣府, 2007）。そして、男性の地域活動への不参加の理由として、‘自分にあった活動の場がない’や‘興味関心がない’など自ら積極的に動けば解決できるようなものが相対的に多い（千保, 2012）と言われている。それ故に、男性が地域と接点を持つためにも、家族や自治会等の外部からの干渉や後押しが有効であると同時に、地域の中に、彼らが興味関心を抱ける、また彼らが自分の能力やスキルを生かせると思える場やプログラムがあることが効果的ではないかと考える。カルチャーセンターや公民館では、男性の料理教室を始め、仲間を作る目的で色々なテーマを設定した教室が多く開かれているが、男性の参加はいまひとつであると言われており、現役保健師たちからも「男性を対象としたプログラムはいつも苦戦している」との声が挙がっており、本研究の研究協力者からもこうした「設定された教室やプログラムに魅力を感じない」との声が多く聞かれていた。料理教室などは、自分のスキルアップや、料理という共通テーマでつながる仲間ができる意味で有効なプログラムではあるが、能力の発揮や地域とつながっていく意味においては直接的な効果は薄いと言える。中高年男性対象の地域プログラムへの出席率の低さからも、現在展開されている地域プログラムの内容が、定年退職期にある男性が求めるニーズや興味に合致していない可能性が考えられる。

男性は必要と認められると動きやすかったり、目的を決めて邁進していく傾向があるため（上原, 2007）、活動の中に役割を作り、目標を据えるようなプログラムの内容を考えたり、男性がもつ様々なスキルや得意分野を生かせる様、多様な幅を持たせた内容を工夫することも、男性に地域での活動に興味関心を持たせ、参加を促すための方略として有効であると考えられる。そのために、男性個々の知識や生きる技術、趣味の向上を図る従来の「教授型」プログラムだけでなく、男性がもつ能力やスキルを発揮できる場の設定やプログラムの内容を工夫した、男性自身が自分の持つ技術や能力を互いに教え合えるような「参加型」プログラムなどは、同じ目線や境遇にある者同士故の気安さから参加へのハードルも下がり、ま

た自分が他者に与えられることへの満足感や達成感も得られるのではないかと考える。

その他にも、今回の研究で見出された様な「自分が地域に住む生活者であること」を体験できるようなプログラムも、住んでいる地域に関心の薄い首都圏在住の男性にとっては、これまで馴染みの薄かった生活に直結する新しい気づきや知識が得られる、新鮮でかつ地域と自分とのつながりを築いていくきっかけとしても有用ではないだろうか。

行政保健師の立場からは、定年退職した男性が地域とつながり、自分の居場所を地域の中に見出せるための働きかけとして、担当地域・区にある自治会や町内会などの地域組織と関係性を持ち、保健師自ら地域の組織活動に関わりながら、場所的にも人的にもその地域で展開できるような活動プログラムを一緒に考えていくこともできるのではないだろうか。そして、会員に高齢者が多いことや介護ニーズが高まる今後を見越して、専門性を生かした健康チェックや健康相談等の出張活動を組み込んでいくことや、地域に住む高齢者や健康課題を抱える住民の把握がしやすく、また保健師が配属されている地域包括支援センターとも連携して、地域に身近な健康増進プログラムや、身近な地域への知見を深めるプログラムを検討して展開することも、住民と地域を結び付けるきっかけになるのではないかと考える。退職後、地域とのつながりが薄い男性たちに地域とつながるための支援を行っていくのであれば、行政はこれまでの‘プログラムを作ったので参加しましょう’的な施設に出向かせる呼び込み型姿勢ではなく、行政側が自ら地域に出向いて、その人たちが住むより身近な場で、その地域の中の話題やテーマで、みんなが自分のこととして考えられるような共有できる内容を地域の人と一緒に考えていく、出前的な姿勢が求められていると考える。

一方、定年退職した男性の中にも個人としての生き方や《個人として在る》ことで十分満足している人も多く存在することが、本研究の結果から明らかになった。定年退職した男性の中には、個人的な空間の中で満足している人も多くおり、価値観が多様化している現在、何が何でも男性を地域とつなげようとする必要もないのではないだろうか。彼らに対しては、行政側も、健康状態や介護事情などで地域に居る状態になった時に、彼らが孤立せず、地域の中に何かしらのつながりを持てるような準備や心づもりをしておく、見守り姿勢でよいのではないかと考える。そして、行政保健師としては、こうした関心縁で結ばれた空間で満たされている男性には見守りの姿勢を、反面、居場所を探しつつなかなか見いだせない男性や地域の中に踏み込めないでいる男性には、前述のような出前的な姿勢や地域包括支援センターとの連携強化などを通して、保健師自らそのターゲットを把握して関わっていく積極的アプローチを展開していくことが、男性のニーズを満たす支援としては有効では

ないかと考える。

そして、もう一点重要な視点に、退職後に地域の中で孤立化しやすい男性、特に一人暮らしの男性を重点的に支援していくことがある。地域に馴染みの薄い定年退職後の男性が、地域と関わりを持つためには、ある程度の覚悟を持って地域デビューすることになり、この覚悟は人によって容易な人と容易でない人がおり、特に容易でない人へのアプローチが必要（瀬沼, 2010）となってくる。常に環境的にも人的にも動きの激しい首都圏において、男性が自分たちなりの居場所や関係性を築いていくことは、覚悟と共に多くのエネルギーを要するため、後押ししてくれる家族の支えや存在は大きな基盤となっている。そういう意味で、後押しをしてくれたり、安心感を与えてくれる家族の居ない一人暮らしの男性は、地域の中で関係性を築くことが難しく、引きこもりがちとなり孤立していくリスクが高い存在であると言える（田高, 2012）。「男性の一人暮らし世帯」で地域とのつながりの必要性を感じている割合と、実際に地域とのつながりを感じている割合のギャップが大きい（東京市町村自治調査会, 2012）というデータもあり、行政側も、地域とのつながりを構築していく支援を必要としている対象者にターゲットを絞り、彼らに対してより手厚い支援を提供していくことが必要になっていると考える。男性の一人暮らしや、生活基盤が不安定な男性、例えば生活保護や自宅で介護をしている人に対するアプローチとして、何かあった時に地域に助けを求めていけるように、近隣に顔を覚えてもらえるような機会が持てる働きかけや、機関とすぐに繋がれる様な情報提供等の先を見据えた予期的な関わりも行っていくことと並行して、地域の自治会や老人会、地域包括支援センター等との連携を強化して、高齢者の関心の高い健康に対するプログラムをきっかけとして、地域の中で隣近所が集まって互いを知れる様な場をつくる試みを検討していくことも、住民同士のつながりが希薄な首都圏においては、特に求められる支援の形ではないかと考える。

こうした定年退職した男性が地域とのつながりを創っていくための行政保健師や企業保健師の関わりは、地域の連帯感が希薄でコミュニティが崩壊しつつある首都圏や大都市部においては特に、地域の中で孤立して誰からも見えなくなってしまう人を作らないためにも、また地域の共助の精神の創生、安心安全な街づくりのためにも、そしてコミュニティの再興やソーシャル・キャピタルの醸成を促していくためにも、今後とても必要な住民アプローチになるのではないだろうか。

VI. 本研究の限界と今後の課題

本研究において、まず研究協力者の限界があると考ええる。今回研究協力者の選定において、企業の元健康管理者と地域の行政保健師に協力を依頼し、対象者の条件等を確認しながら進めたが、紹介を受ける状況には、研究協力依頼者の既知や彼らと関係性の良い人が対象者であるという条件が潜在していると考えられる。その結果、最終的に計 15 名の研究協力者を得たが、研究協力者の元所属先や元職位等の背景がある程度限定されており、研究協力者の属性による偏りも考えられ、本研究の結果を定年退職した男性一般に対して適応させることには限界があると考ええる。

また、理論的サンプリングによって研究協力者の選択、分析を進めていったが、研究協力者の全員が必ずしも地域とのつながりの構築に対して積極的な姿勢を有していたわけではなく、地域と接しながらも、自分の関心事を優先させる生き方を選択している男性も含まれていた。そのため、本研究で導かれた《地域と共に在る》状態は、15 名全員に当てはまる結果ではなく、地域とのつながりの構築におけるひとつの方向性であったという結論から、結果の信頼性において限定されたものである可能性がある。しかし、《地域と共に在る》結論が 15 名全員の一致した結果とはならなかったが、分析の過程で、定年退職した男性が必ずしも地域とのつながりを必要としているとは限らず、自分自身の選択によって《個人として在る》という関心事の中でのつながりを大切に、満足している心の在り様があることが明らかになったことは、首都圏在住の定年退職した男性を対象とした本研究の独自性、新規性であるという事ができると考える。

研究協力者の限界は、本研究の結果にも影響していることが考えられる。今後は、定年退職した男性の属性の幅を広げて、大企業、中小企業、公務員関係等の就業形態や、営業系、経理等の事務系以外にも SE 等の所属部署等の職種のバリエーションを増やして知見を充実させ、本研究の結果の汎用性の検証や各バリエーションによる理論との相互比較をしていくことで、定年退職した男性の地域とのつながりの理論をより発展させ、フォーマル理論に近づけていく試みも必要であると考ええる。また、今回は地域と何らかの関わりを持っている男性を対象とした研究であったが、今後、本研究の結果から示唆された、地域デビューへの覚悟が容易でない一人暮らしの男性や介護等で自分の時間がとりにくい男性など、地域との関わりが薄い男性を対象として、彼らの地域とのつながりへの意識や支援の必要性についても明らかにし、定年退職した男性が地域とのつながりを構築していくプロセスとして統合し、理論化を進めていくことが必要だろう。

本研究では、定年退職した男性が地域とのつながりを構築していく過程を構成する概念が見出されたが、職種や就業形態、住居形態等の多様な属性が本研究の結果とどのように関連しているのかを明らかにするには、質的研究での分析からだけでは限界がある。そのため、今後は、多様な属性を持つ対象に一般化していくために、本研究で見出された概念を元に、地域とのつながりを測定できるようなツールの開発や、量的研究を行うことで、その相互関係を検討する研究へと発展させていくことも必要であると考え。

第7章 結論

本研究は、定年退職した男性が、退職後に地域の中で家族以外の新しいつながりを地域との関わりをどのように築いていくのかを記述し、理論を生成することを目的に行った。研究協力者は、首都圏一都三県に在住する、地域の中で家族以外の他者との交流を伴う活動を行っている15名の定年退職した男性である。半構成的インタビューによって、退職後の地域との関わりについて語りを得て、グラウンデッド・セオリー・アプローチの手法を用いて分析した結果、以下のことが明らかになった。

1. 定年退職した男性が地域とのつながりを構築していくプロセスを構成するカテゴリーとして、コアカテゴリー『地域の中で共有できる視点を持つ』と、3つの主要カテゴリー《自己の存在価値を模索する》、《個人として在る》、《地域と共に在る》と、9カテゴリー、22サブカテゴリーが抽出された。
2. 《自己の存在価値を模索する》とは、定年退職によって【自己の存在価値が脅かされる】状態にある男性が、【今のところ安定した生活基盤がある】現状において、【地域との接点づくりに消極的である】ため、【職務経験で培った物事への対処術を生かして関わる】ことで、退職することによって揺らいだ自己の存在価値を模索することであった。
3. 《個人として在る》とは、定年退職した男性が、趣味などの関心事を通してこれまでキャリアや肩書に代わる【自己への誇りを再獲得する】こと、そしてその【個人的な関心事の空間の中で満足する】状態において自己の存在価値を見出した状態であった。
4. 《地域と共に在る》とは、定年退職した男性が、日々の生活上の営みや自治会等の地域活動を通して、【自分が生活者であることを実感する】体験をし、他の住民との共同体験から【地域の中で共有できる視点をもつ】ことで地域の一員としての意識が芽生え、地域を視ることが自然と自分の意識の中に取り込まれて【住民意識が自己の一部となる】、自分の存在価値を地域との関係性の中に見出す状態であった。
5. 定年退職した男性にとって地域とのつながりが構築されていくということは、退職によって自己の存在価値が揺らぐ男性が、《自己の存在価値を模索する》中で、趣味などの

関心事の空間で《個人として在る》状態を作る一方で、地域生活や地域活動と関わることを通して、他者との共生意識と自己の創造性が高まり、『地域の中で共有できる視点を持つ』ことによって、地域の一員として《地域と共に在る》意識を形成していく過程であり、心の在り方のダイナミクスとして理論構築された。

6. 地縁が希薄になっている首都圏においては、急速な地域開発による環境的・人的変化や高層化する住宅形態、多様な価値観等により、定年退職した男性の地域との関わりへの関心が薄まり、自己の存在価値の居場所として趣味などの関心縁によるつながりを求める志向性が強まることが推察された。
7. 定年退職した男性は、まず自分自身を見つめて自己の存在価値を再獲得し、取り戻した自信と誇りを礎にして、関心事や地域の中で他者と共有できる話題や視点を見出し、他者との関係性の中での自分を意識することで社会的なつながりを構築していた。このことから、定年退職した男性が地域の中でつながりを持つためにも、地域の中で住民同士共有できる話題を見出せる経験・体験が大切であることが示唆された。
8. 定年退職した男性にとって地域とのつながりは、地域の人との関係性の中で自分が地域の一員であることを認識し、住民としての目線で地域を感じ、いざという時に自分の足元である地域での **face to face** の直接的な助け合いや支え合いができる状態であった。地域とのつながりは、単に有事の際の近隣での助け合いや安心感のためだけではなく、男性自身が地域の中で他者との共生意識を高め、自分だけでなく他者のためにも役立てる充実感を得て彼らの人格に豊かさと深みを齎すと共に、地域に対する能動的で創造的な態度が形成されていく貴重な関わりであることが示唆された。
9. 行政保健師は、首都圏に住む定年退職した男性には、元気な間は関心縁の中に結びつきを求める志向性が高くなり易い状況を理解し、そういう対象に対しては無理に地域との結びつきを求めずに見守りの姿勢を持ち、一方で、地域とのつながりを構築していく支援を必要としている対象者にターゲットを絞り、彼らに対しては保健師自らが地域に出向く積極的アプローチ等で、より生活に身近な地域の中で支援を提供していく必要があるとの示唆を得た。